

VIEW21

〈ビュー21〉

高校版

Volume 2

2016
June

6月

すべては「**学力の3要素**」 育成のために

特集

高大接続改革における2つの新テストに見る

これからの高校教育で 育むべき力と 求められる指導

ベネッセ教育総合研究所

授業を進化！ 思考を深化！

実践 アクティブ・ラーニング

日本史

福岡県・私立明光学園中学校・高校
前川修一

指導変革の軌跡

青森県立 田名部高校

千葉県・私立
昭和学院中学校・高校

新コーナー

次代の教育を形づくる教委の一手
愛媛県

目指すは、誰もが外国人に気軽に話しかけることができる町づくり!

ハートを
こがせ!

Vol.08

島根県立松江北高校 高齢者向け英語教室

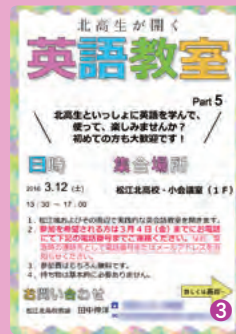
高齢化が進むからこそ 高齢者が活躍できる場をつくり 地域の活性化に貢献したい



1 英語教室では、生徒が受講者にマンツーマンで、道案内の仕方や観光名所の名称など、観光案内で用いることが多い英語表現を指導。ESSの生徒も参加し、この日の受講者13人に対応した。

2 教材は、企画・運営役の生徒がESSの協力を得ながら作成した。道案内や観光案内といったシーン別に、役立つ表現や会話例を厳選。

3 高齢者の目に留まるように、文字の大きさや色を工夫してチラシを作った。



4 外国人に観光案内をする受講者をサポートするためには、生徒自身も地域の歴史や文化を知る必要がある。「もっと地域のことを勉強しなければ」と、生徒は言う。

5 模擬観光案内では、基本的に、受講者が観光客役のALTを案内し、生徒は受講者が分からない表現や単語をフォロー。頼られる立場になることで、「しっかりしなければ」と意識も自然と高まる。

学校で学んだことを 地域の人々と外国人の橋渡しに 役立てるんだ

高齢化が進む地域の活性化に向けて、自分たちに何ができるのか。島根県立松江北高校の2年生5人が考えたのは、外国人に英語で観光案内ができるよう、地域の高齢者に高校生が英語を教える英語教室の実施だった。その実践報告を「国際高校生フォーラムin倉吉2015」(*)で行ったところ、最優秀賞を受賞。生徒は活動の継続を決意した。そして、ほかの生徒も巻き込み、全5回の英語教室を開催。最終回には、松江市内の名所・旧跡を巡る、外国人への模擬観光案内を実施した。自分たちのアイデアを実現させようと、試行錯誤して活動をつくり上げた生徒たちの姿を追う。

「自分たちにもできる!」と
信じたことが活動の支えになった

6 観光客役のALTは、「地域の人と外国人が交流でき、生徒はALTと話したり、受講者に英語を教えたりすることで、英語力を伸ばせるという素晴らしい取り組み。私自身も城や寺を巡り、日本文化を勉強できた」と大満足。

7 模擬観光案内の振り返りでは、英語の学習意欲が高まったと話すと生徒が目立った。

生徒のインタビューは P.30

*全国の進学校の生徒を招いて、社会の諸問題についてプレゼンテーションを行う大会。鳥取県立倉吉東高校で毎年開催されている。

すべては
「学力の3要素」
育成のために

◎2015年3月に始まった高大接続システム改革会議では、約1年にわたって、アクティブ・ラーニングの充実や2つの新テストの導入、個別大学における多面的・総合的評価による入学者選抜の推進など、様々な論点での議論が行われてきました。それらはいずれも指導・評価のための手段であり、目的はすべて「学力の3要素」の育成にあります。それを念頭に置きながら、今号は2つの新テストで求められる力を具体的に考えます。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

2 特集

高大接続改革における2つの新テストに見る これからの高校教育で 育むべき力と求められる指導

- 4 **現状把握** 高大接続システム改革会議「最終報告」を読み解く
どのような入試になろうとも「学力の3要素」に沿った力の育成を
- 6 **分析** 問題イメージ例から見える
「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で
求められる力とその育成に必要な指導のあり方
6 国語 9 数学 12 英語 15 物理 18 世界史
- 21 **管理職
メッセージ** ALの本質を理解する場として全校体制での研修を
東京都立西高校 校長 宮本久也
理論や経験に裏づけされた研修の枠組みを構築する
岡山県立和気閑谷高校 校長 香山真一
- 22 **分析** 問題作成イメージから見える
「高等学校基礎学力テスト(仮称)」で求められる力
22 国語 24 数学 26 英語
- 28 **文部科学省
インタビュー** 基礎学力の定着を図る PDCA サイクルの一環としての活用を
文部科学省 初等中等教育局 高校教育改革 PT 総括リーダー 今井裕一

30 ハートをこがせ!

鳥根県立松江北高校 高齢者向け英語教室 メンバーが支え合い地域への思いをカタチにしていく

32 授業を進化! 思考を深化! 実践 アクティブ・ラーニング

仲間と普遍的な問いに向き合う中で知の統合化を図り、人間的な成長を実現する
日本史◎福岡県・私立明光学園中学校・高校 前川修一

36 指導変革の軌跡

青森県立田名部高校

進路指導◎高い志を育む面談と若手教師の情熱で、学校を活性化

千葉県・私立昭和学院中学校・高校

進学実績向上◎英語の指導を軸に、難関私立大学の合格実績向上を図る

44 改良! 指導ツール ビフォーアフター

3年生夏休み 志望校別過去問研究

48 大学Evolution 大学が拓く新しい学び

1年次での体験型学習を充実させ、4年間を主体的に過ごすための気づきを促す
明治大学経営学部◎体験型学習の拡充

52 新コーナー 次代の教育を形づくる教委の一手

愛媛県 アクティブ・ラーニングの視点に立った ICT 活用で、「心おどる学び合いの旅」へ生徒をいざなう

56 VIEW'S REPORT

教科学習外活動におけるアクティブ・ラーニング —「ワールド・カフェ」の進め方と実践事例—

ポスター発表とプレゼンテーションに計27校が参加

近畿地区のSGH校・アソシエイト校が合同の課題研究発表会を開催

72 Reader's VIEW

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールは全て取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます *本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

高大接続改革における2つの新テストに見る

これからの高校教育で

育むべき力と

求められる指導

2015年12月、そして16年2月に、高大接続システム改革会議において

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の問題イメージ例が、

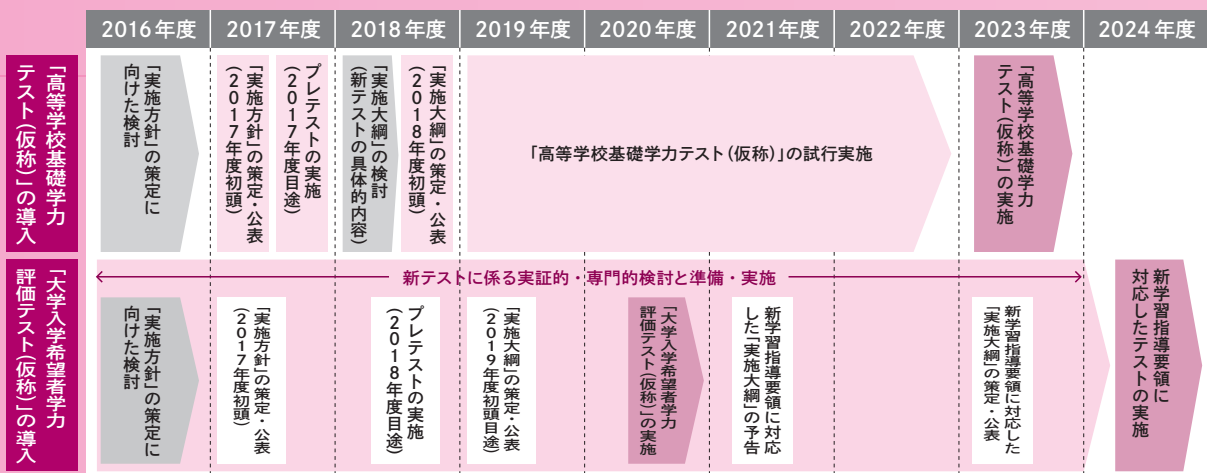
16年3月には、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の問題作成イメージの例が公表された。

それぞれのテストでは、どのような力を評価・測定しようとしているのか。

そして、そのような力を生徒に育むためには、どのような指導が求められるのか。

現場の教師と進研模試の教科編集者の分析から考える。

2つの新テストの導入・実施スケジュール



*高大接続システム改革会議「最終報告」別添資料2（2016年3月）を基に編集部で作成

本号のテーマ

2つの新テストの位置づけと、それぞれのテストで求められる力、及びその育成に必要な指導のあり方を考える

位置づけ

高大接続システム改革会議「最終報告」の読み解きより

現状把握【P.4~5】

- 「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は高校教育改革、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は大学入学者選抜改革の中に位置づけられる。すなわち、2つの新テストは、高校教育改革、大学教育改革、大学入学者選抜改革の3つから成る高大接続システム改革の一部にすぎない。
- 「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、高校の基礎学力の定着度合いを把握することがねらいであり、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は、知識・技能を十分有しているかも見つつ、思考力・判断力・表現力を中心に測定する。
- 2つの新テストは現段階では見通せない点も少なくないが、どのようなテストになったとしても、「学力の3要素」に沿って、これからの時代に必要とされる資質・能力を育成し、高校教育を大学教育や社会に接続することが求められる。

求められる力と指導のあり方

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の問題イメージ例の分析より

分析【P.6~21】

- 国語**○複数の情報を基に推論しながら考えをまとめ、状況に応じて適切に表現する力
- 数学**○問題文や図形から必要な情報を読み取り、知識や技能を用いて表現する力
- 英語**○「聞く」「読む」を通して得た知識を活用した、「話す」「書く」の発信力
- 物理**○必要なデータを抽出して関係を見いだす力や仮説を立てる力
- 世界史**○資料の活用を通じ、歴史事象について論理的に捉える力

上記の力を育むために必要な指導に共通する、
アクティブ・ラーニング(AL)の視点を学校全体で共有する



「ALの本質を理解する場として
全校体制での研修を」
東京都立西高校 校長 宮本久也



「理論や経験に裏づけされた
研修の枠組みを構築する」
岡山県立和気関谷高校 校長 香山真一

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の問題作成イメージの例の分析より

分析【P.22~29】

- 国語**○国語の基本的な力と、状況・目的に応じて表現の工夫や課題解決の説明を考える力
- 数学**○生活と関連した問題、高校数学の基礎事項、義務教育領域に対応できる力
- 英語**○オーセンティックな題材への対応力



「基礎学力の定着を図る
PDCAサイクルの一環としての活用を」
文部科学省 初等中等教育局 高校教育改革PT 総括リーダー 今井裕一

現状把握

入試改革だけではない 三位一体の改革

高大接続システム改革では、大学入学者選抜改革に注目が集まった。しかし、今回の「最終報告」の基になった2014年12月の中央教育審議会答申は、その表題にもある通り、「高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革」を目指していた。「最終報告」では、この一体的改革を「高大接続システム改革」と位置づけている。つまり、高大接続システム改革の中で、大学入学者選抜改革は単独で存在しない。常に高校教育や大学教育の改革と関係づけられていることに、注意しなければならない。

高大接続システム改革会議「最終報告」を読み解く

どのような入試になるろうとも

「学力の3要素」に沿った力の育成を

2016年3月、文部科学省から高大接続システム改革会議の「最終報告」が公表された。約1年間にわたる議論によって、高大接続改革はどのような方向に進むことになったのか。会議の経過と報告書の内容から考える。

また、「大学入学者選抜改革」＝「大学入試改革」ではない。両者は同義

で使われることが少なくないが、1点刻みのペーパーテストを中心とした入試だけではなく、高校時代の活動や志望理由、入学後の学修計画などといった多様な資料を用いて、その大学が求める学生像に合致しているかどうかを基準として選抜することを目指している。以上のことは、「最終報告」の全体構成を見ても分かる。

I 検討の背景と狙い

II 高大接続システム改革の基本的な内容

III 高大接続システム改革の実現のための具体的方策

1. 高等学校教育改革 2. 大学教

育改革 3. 大学入学者選抜改革

IV 改革の実現に向けた今後の検討体制等

2つの新しいテストのうち、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は高校教育改革にかかわるⅢの1に、「大学入学者希望者学力評価テスト（仮称）」は大学入学者選抜改革にかかわるⅢの3に位置づけられている。つまり、2つのテストは、3つの改革のうちの一部にすぎないと言える。

センター試験に代わる「大学入学者希望者学力評価テスト（仮称）」にしても、各大学がその成績だけで入学者選抜を行うことは想定していない。個別大学の入学者選抜では、「大学入学者希望者学力評価テスト（仮称）」以

外にも多様な選抜資料を用いて、多面的・総合的に評価することが求められる。そのような評価は、一般に思われがちなる人物評価といった抽象的なものではない。各大学が定めるアドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針、AP）に沿った方法で選抜するように「最終報告」では求められている。

一方の「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、「全国学力・学習状況調査」と同様に、基礎学力の定着と指導改善を目指すものだが、高校教育改革の中では、専門高校の校長会や民間が行う検定試験と並んで、多様な学習成果を測定するツールに位置づけられている。なお、テストの正式名

称は、その目的や性質に合致するよう、17年度初頭に示す実施方針で確定することになっている。

高校、入学者選抜、大学を通して「学力の3要素」の育成を目指す

それでは、高大接続システム改革では、どのような資質・能力の育成を目指し、それらを大学入学者選抜でどう測定しようとしているのか。「最終報告」では、学力について、中教審答申と共通の定義をしている。その定義とは、学校教育法第30条第2項に示された「学力の3要素」であり、それらを社会で自立して活動していくために必要な力と捉え直している。このことを「最終報告」では、予見が困難で、先行き不透明な、「これからの時代に向けた教育改革を進めるに当たり、身に付けるべき力として特に重視すべきは、(1)十分な知識・技能、(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、そして(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協

働して学ぶ態度」としている。

それら「学力の3要素」を、高校で育み、大学入学者選抜で適正に測定し、そして、受け入れた大学ではさらに伸ばして社会に送り出す、という流れが想定されている。

2つの新テストと個別大学の入学者選抜では、それぞれ「学力の3要素」の何を主に測定するのかが明示されている。「高等学校基礎学力テスト(仮称)」は、義務教育の学習内容も含めた基礎学力の定着と、学習意欲の喚起に向けて、高校段階の基礎学力の定着度合いを把握することがねらいだ。それに対し、「大学入学者希望者学力評価テスト(仮称)」は、知識・技能を十分有しているかも評価しつつ、測定する力の中心は思考力・判断力・表現力だ。そして、主体性・多様性・協働性は、高校の調査書を含めた多様な資料により、個別大学の入学者選抜で測定されることになる。それを受け、個別大学でも入学者選抜の改革が迫られている。今やAPは大学の入試要項には必ず記載され、受験生にもよく知られているが、

抽象的な記述にとどまっていたきらいがある。

そのため、まず各大学で、社会に送り出すべき卒業生像をディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与の方針、DP)として定めた上で、そうした卒業生を育てるためのカリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針、CP)を考え、そして、その教育を受けるにふさわしい能力を持つ入学者を選抜するための方針を示すAPを策定するように大学に求めている。大学教育改革、さらに言えば、組織運営も含めた大学改革自体は、その3つのポリシーをてこに進められていくことになる。18歳人口の減少で各大学が生き残りに必死となる中、3つのポリシーを緊密に関係づけた改革が広がっていくのは必至であり、個別大学の入学者選抜も併せて変わっていくことが予想される。

改革自体が、答えが1つではない問題の解を探る活動

「最終報告」のうち、新テストに関する部分だけに着目すれば、「大学入

学希望者学力評価テスト(仮称)」での、複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考力・判断力、その過程や結果を表現する力を評価するための記述式問題の導入、また、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」で導入を目指す「アイテムバンク」方式(*1)やCBT(*2)方式などが、技術的に可能なのか、現段階では見通せないものも少なくない。

しかし、常に忘れてはならないのは、テストの改革は高大接続システム改革の一部でしかないことだ。大事なものは、どのような大学入試になったとしても、「学力の3要素」に沿って、これからの時代に必要とされる資質・能力を育成し、高校教育を大学教育や社会に接続させることだ。

新テストの開始が、高大接続改革の終わりではない。「最終報告」は、次のように指摘している。

「これまでの歴史の先に新たな教育の仕組みを創造することは、長期にわたって『答えが一つに定まらない問題に解を見いだしていく』活動である」

*1 大量に蓄積した問題群から複数レベルの問題セットを提供し、いつでも、どこでも受検できる仕組み。 *2 Computer-Based Testingの略称。コンピューター上で実施する試験。

複数の情報を基に推論しながら考えをまとめ、状況に応じて適切に表現する力が求められる

問題イメージ例で必要とされる力には、主に次の3つが挙げられる。

① **多様な複数のテキストを読み取る力** 文章だけでなく図表・グラフなどを読み取る力や、複数の文章を比較・分析する力。

② **論理構造を把握する力・論理的な思考力** テキストの論理構造を把握し、根拠から結論、問題点から解決法など、論理性を考える力。

③ **自分の考えを論理的に表現する力** (条件) に応じた表現様式で自分の考えを表現する力。

各問題イメージ例の具体的なポイントとは、次の通り。

問題イメージ〈例1〉多様な見方や考え方が可能な題材に関する複数の図表や文章を読み、情報を統合しながら、考えを構成し表現する問題

「国語総合」に関連する領域・内容

より、「文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること」「現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと」に即した問題イメージ例である。

文章だけでなく、図表・グラフを含めた多様なテキストから情報を読み取って考える必要がある。また、生徒の発言の論理構造を把握し、それに基づいて生徒が立てた仮説や論証に必要な情報など、明示されていない内容を推論し、議論に適合するようにまとめることが求められた。

このような問題に対応できるようにするために、文章に限らず、文章と関連する図表(例えば、新聞報道に使われるグラフ)など、多様な複数のテキストを用いて、それらを関連づけて考える力を身につけさせ

るとともに、根拠を論理的に考えさせ、議論などを通じて、自分の考えを言葉に出して相手に伝わるように表現する力を育むことが重要である。

問題イメージ〈例2〉3つの文章で語られている状況、問題、解決法に関する共通点について考察し、選択式と記述式で構成・表現する問題

「国語総合」に関連する領域・内容より、「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること」に即した問題イメージ例。

示された3つの文章について、「状況」「問題」「解決法」の共通点を考察し、状況↓問題↓解決法の論理性を考えることを求めた「連動型複数選択+記述式」の設問である。それぞれの文章から読み取った内容について比較・分析し、論理を組み立てて説明することが求められた。

授業でも、根拠から結論、問題点から解決法など、論理性をもって考え、論理的な解答を創り出す姿勢を大切にしたい。

問題イメージ〈例3〉1400字程

度の新聞記事を、一定の目的に沿って読み取り、得られた情報を取捨選択したり、自分の考えを統合したりしながら、新たな考えにまとめ、200〜300字で表現する問題

「国語総合」に関連する領域・内容より、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること」「文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること」などに即した問題イメージ例である。

公立図書館について書かれた新聞記事を読み、今後の公立図書館のありべき姿についての自分の考えを、3つの条件に従って表現することを求めた設問だ。読み取った情報を整理した上で、それに基づいて自分の考えを論理的に(思考プロセスを明らかにしながら)表現する必要がある。また、与えられた条件に即して、文章構成を考えながら記述することも求められた。普段から、目的(条件)に応じた表現様式で自分の考えを表現することを意識させたい。

「質問力」の育成が アクティブ・ラーニングを活性化させる

北海道札幌旭丘高校 細田季男



ほそだ・ときお
教職歴30年。同校に赴任して13年目。

図表やグラフを使って 批判的思考力を高める

問題イメージ例の特徴は、文章や図表、グラフといった複数の情報から考えを構成していく点にあります。この問題が取り上げられたのは、仮説を立てて検証する力、論証のプロセスや論理を導き出す過程を見るためでしょう。国語の授業でも、ベン図やマトリックス、ピラミッドなど、複数の情報を使って説明させたり考えさせたりする指導が、これまで以上に求められると考えます。

図表やグラフの活用は、批判的思考力を養う上でも大切です。授業では、問題イメージ例のように、単に

与えられた情報を読み取らせるだけではなく、様々な解釈できるデータを使うと、学びが深まると思います。どこかに錯誤があるデータ、多様な見方ができるグラフをあえて選び、生徒に批判させたり、別のデータを使って反証させたりすることで、生徒はデータをうのみにすることの危うさ、解析の楽しさを実感するでしょう。

問題イメージ例の例2と例3は、本文がないため分析が難しいのですが、例2は、一見、ばらばらに見える複数の情報から共通の問題点を抽出して、その解決策を考える力を見るのがねらいだと考えられます。例3は、情報を取捨選択しながら自分の考えをまとめる力を見る問題ですが、個別学力検査の小論文を採点しやすくした問題という印象を受けました。これらの問題には否定的な意見もあるようですが、複数の情報を編集する力の土台は国語科に置く

いう方針は伝わってきますし、その必要性もよく分かるので、もっと評価してもよいと思っています。

活動をファシリテートするため 生徒把握がより重要に

複数の情報を用いて説明する力や批判的思考力などは、アクティブ・ラーニング（以下、AL）によって鍛えられると思いますが、ALを取り入れた授業は、うまくできればこれほど楽しい授業はありません。講義形式の授業では、「今日はよい授業だった」と思っているのは教師だけということもありますが、ALでは、生徒の様子を見れば、授業の理解度や満足度がよく分かります。

ALで最も大切なのは、生徒の質問力を高めることでしょう。質問力は、一般的にはあまり重視されていないようですが、言語活動の根幹を成すと言ってもよいと思います。議論の身を理解していないまま活動を進めても、表面的な活動に終わってしまふからです。しかし、生徒は、むやみに質問してはいけないと思ひ込む傾向にありますし、そもそも自分が何が分からないのかを把握でき

ていないこともよくあります。そこで、受け取った情報を語らせてみる、詳しく言い換えさせるといった手順を踏み、生徒に分からない箇所を自覚させることが必要でしょう。

ALでは、教師のファシリテートも重要です。最初に有効な問いかけがなければ、生徒は動機づけの段階でつまずき、目的も分からないまま授業に参加することになり、活動は低調なものになってしまいます。

適切な発問や声かけを行うためには、活動に至るまでに生徒は何ができていて、何ができていないのか、何を知っていて、何を知らないのかということを知り、教師が十分把握しておかなければなりません。生徒の学習歴を把握し、「最近習ったこれと関係あるのでは？」と投げかければ、生徒は自然と身を乗り出してきます。生徒が話したいと思う状態さえつくれば、その後は最低限のファシリテートで活発な活動になります。

今後の指導では、これまで以上に、生徒の興味・関心を喚起する教材の選別や提示の仕方が重要であり、そのためにしっかり生徒把握を行うことが求められると考えます。

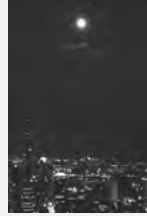
問題イメージ〈例4〉

事象から問題解決に必要な情報や条件を抽出・収集したり、仮定をおいて考えたりする問題。

数学

次の問いに答えよ。

伊藤さんは、「スーパームーン」に関する記事を読み、月が地球から最も離れたときに見える満月と比べて、記事にあるような「スーパームーン」はどのくらい大きく見えるのを知りたくなり、月の見かけ上の大きさについて調べた。



夜空に浮かぶ大きな満月「スーパームーン」

月が地球に最も近づくタイミングと満月のタイミングが重なるため、月が通常より大きく見える。

(平成27年(2015年)9月28日 記事)

〈伊藤さんの調べたこと〉

- 月の見かけ上の大きさは、見えている月を円と考えると、その直径の両端と視点とを結ぶ二等辺三角形の頂角である「視直径」で表す。
- 「スーパームーン」の視直径はおよそ 33 分 (ふん)、月が地球から最も離れたときの満月の視直径はおよそ 29 分である。ただし、1分は 1° の $\frac{1}{60}$ である。

(1) 伊藤さんは、次の方法で満月を観測し、フィルムに円を描いて比べてみることにした。

〈伊藤さんの方法〉

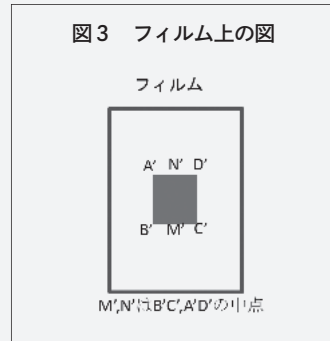
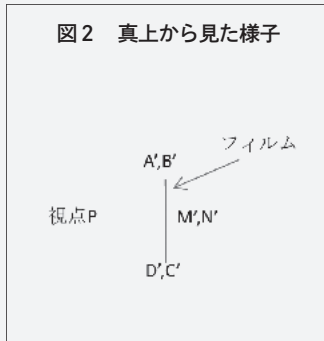
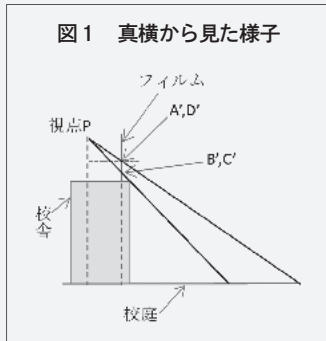
視点から月の中心に向かって 500mmの位置に、月の中心と視点とを結ぶ直線に対して垂直になるように透明なフィルムを置く。そして、このフィルムを通して見える月をフィルムに写し取る。

伊藤さんの方法でフィルムに写し取られる、視直径 θ 分 (ふん) の月の直径は何mmになるか。この直径を求める式を三角比を用いて答えなさい。

(1) の伊藤さんの方法は、校庭に文字や形を描くときにも応用できる。今、学校の屋上から校庭に描かれた四角形を見ている。下の図1、図2のように、伊藤さんの視点Pに対し、校庭を一つの平面と考えた上で、この平面に垂直になるように透明なフィルムを置く。このフィルムを通して校庭を見ながら、校庭に描かれた四角形 ABCD を写し取ることとした。ただし、視点Pは、線分 $B'C'$ の中点 M' と、線分 $A'D'$ の中点 N' を含むフィルムに垂直な平面上にあるものとする。

(2) このとき、写し取られた四角形 $A'B'C'D'$ (図3) が正方形になる場合、校庭に描かれた図形は、 $AD > BC$ の等脚台形であるといえる。

上の下線部の事柄が言えることの理由を説明しなさい。



(3) 校庭に描かれた四角形 ABCD における2辺の AD と BC の比はどのような式で表されるか。校庭から視点Pまでの高さを h 、フィルム上の正方形 $A'B'C'D'$ の辺の長さを d 、校庭から点 B' までの高さを g として、 h, d, g を用いた式で示せ。

*高大接続システム改革会議(第9回)配布資料の別紙3『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たつき台】を基に編集部で一部改編して作成

問題文や図形から必要な情報を読み取り、知識や技能を用いて表現する力が求められる

数学の問題イメージ例は、「事象から問題解決に必要な情報や条件を抽出・収集したり、仮定を置いて考えたりする問題」として出題されている。平面幾何、三角比の知識を活用して日常的なこと（測量）を行う問題であり、(1)は、題材として近年話題のスーパームーンを取り上げている。(2)は、事実を挙げた上でその理由を答えさせるという問題で、問い方が目新しい。(3)は、(2)で考察した図形とは別の視点から、生徒自身で図形を設定し、考察を行う必要がある。

◎問題文・図形等の事象やその数学的表現から情報を読み取る

(1)は、「スーパームーン」に関する事象から、月の大きさを調べるために、フィルムに写った月の直径を三角比の性質を使って調べる問題であり、問題解決に必要な情報を正しく抽出した上で、問いに答える必要がある。

この問題では、「視直径」という見慣れない用語について、前後の文脈からこの用語がどのような意味を持つものなのかを把握するなど、問題で設定されている状況を正確に分析する力が求められた。

また、問題に図は与えられてはいませんが、実際に自分の手で図を描いてみなければイメージしにくい。具体的に書き出してみたり、実験したりすることによって、題意を把握する、もしくは推測する力が求められている。

◎数量化・図形化・記号化などをし、数学的に表現する

(2)は、(1)を応用して、フィルムに写った図形（正方形）から校庭に描かれた図形を等脚台形と予想して、その理由を説明させる問題であった。理由を説明させる点が特徴的であり、図形のイメージをつかんで、等脚台形になることを、三角比や図形の性質を用いて論理的に説明する

必要がある。

言葉だけでもある程度の説明はできるかもしれないが、言葉に加えて数学的表現（三角比で表す）を用いると、より正確で簡潔な説明となる。同様に、図を用いて視覚的に分かりやすくすることなど、数学的表現を用いて論理的に説明する力が求められた。

(3)は、(2)で予想した等脚台形について、校庭から視点までの高さや、フィルム上の正方形の辺の長さなどを文字で表し、その文字を用いて等脚台形の辺の比を表す問題であった。(2)で考察したことを、「数量化・図形化・記号化などをして数学的に表現」する力が求められた。問題を解くためには、必要な辺の長さを自分で設定し、平行線の性質を上手に利用して、求める辺の比を文字で表す必要がある。

ただし、(2)とは異なり、図が与えられていないため、(2)で与えられた図を基にして、より状況が把握しやすい図を描けるかどうかのポイントであった。

◎数学の知識や技能を活用し論理的に考察・処理して結果を得る

問題イメージ例の(1)～(3)を通して、知識としては「数学I」の「図形と計量」と、中学校段階までの幾何の知識があれば解答できるが、問題文に与えられた条件を図式化して、論理的に結論を導く力が求められた。

今後の指導においては、単に知識（公式や解き方）を教えるだけでなく、公式の意味や成り立ち、その分野を学ぶ意義（日常生活でのその知識の活用場面や数学史的な背景）、様々な考え方（別解）といった数学の有用性と柔軟な思考力を育成する必要がある。

今回の問題イメージ例で扱われたような「月の見かけ上の大きさ」「学校の屋上から見た図形」の問題について、高校で学習する数学の知識を適用するためには、これまでよりも思考の多様性を育み、相手に伝わるように筋道をしっかり立てて表現する力を育成していく必要がある。授業の中では、分野を超えて身近な問題を数学的に考察する機会や、クラスメートに自分の考えを説明する場面を設けることなどが求められるだろう。

日常的な事象と数学的思考とを結びつけられる力を育成したい

北海道札幌清田高校 角 智幸



かど・ともゆき
教職歴20年。同校に赴任して2年目。

異なる単元の知識を関連づける力が必要

今回公表された問題イメージ例は、問題自体はよく練られた良問ですが、難易度は非常に高く、指導の際にはいくつか注意が必要です。その1つは、教科書に出てこない単位の扱いです。設問に定義が書いてあるので、60分を1に変換できるかどうか、解答への分かれ目になると思います。また、三角比の平面・空間図形への応用も、注意が必要です。授業では、縦から見た図、横から見た図など、様々な図を用い、切り口や見る方向

の違いについて説明し、空間図形をきちんと認識させた方がよいでしょう。

難易度について課題はあるものの、問われている力は非常に重要です。問題イメージ例から読み取れるメッセージの1つは、知識を融合して課題を解決する力を身につけさせたいということ。例えば、「三角比を平面図形や空間図形の考察に活用する力」に加えて、中学校で学んだ「相似」の知識を思い出せるかどうかポイントになります。異なる単元の知識を組み合わせた融合問題に対処できる力が、重要になるでしょう。

もう1つのメッセージは、日常生活の体験や実感と結びつける重要性です。問題に示された現象は、教室のプロジェクトに写した正方形が歪んで見えるのと同じ原理で、こうした日常的な事象と結びつけられる

かどうかポイントとなります。

私の授業でも、実社会とのつながりをイメージさせることを心がけています。「数学I」の「データの分析」であれば、企業でのデータの活用方法を交えて説明しています。例えば、靴屋で小さいサイズばかり余った場合、その原因は、データをしっかりと取らず販売予測を誤ったことが考えられます。きちんとデータを取り分析していれば、余剰在庫を減らして社員の給与を増やせるかもしれません。

生徒に「数学を一生懸命に学習することで人々を幸せにすることもできる」と伝えれば、授業の取り組み方も変わるのではないのでしょうか。

計算力も表現力の1つ基礎・基本の徹底を

学力の要素として、知識・技能に加えて思考力・判断力・表現力の育成が重視されています。それらは、一見、新しい力のように見えますが、数学では次のように考えることができます。問題の意味を自分なりに把握する力が思考力、その問題を解決

するためにどの単元の知識を使うべきかを選ぶ力が判断力、問題を解決するために場合分けしたり、解答を記述したりする力が表現力です。

また、計算力も、表現力の手段の1つだと、私は考えます。計算が得意な生徒は、先を見越す力があると言われています。この式は、この先どうなるのかという見通しを立てて問題に取り組めるため、途中でつまづくことはほとんどありません。

一方で、基礎・基本としての「計算力の向上」は、引き続き重視する必要があります。今は、数学が得意な生徒でも、単純な計算ミスをするといえます。発展問題に取り組む前に、基礎・基本の定着の徹底が何より大事です。計算が苦手な生徒は、式を立てても最後まで解けず、その結果、数学が嫌いになり、数字を見るのも嫌になってしまうのです。

1人で沈黙考し、計算と格闘する経験を積むことで、表現の場としてのアクティブ・ラーニングがより深い思考の場となり、生徒の数学活動がより主体的になると思います。

社会的なテーマについて自らの考えや意見を、 論理的に英語で表現する問題。

英語

～ Speaking ～（主な受験者層として **CEFR レベル A1 ～ B1** [※] を想定）

与えられた社会的なトピックに対して、個人の考えや経験に基づいて意見を述べる

英語力調査事業では面接形式で実施したが、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」における実施形式（面接／C B T等）については検討中

【問題】

Here is a statement:

Students in Japan should travel abroad. Do you agree or disagree with this statement?
Give one or more reasons why you think so.

You will have one minute to prepare. Then, you will have two minutes to speak.

<60 seconds>

【解答例】（評価3となる解答例）

(Affirmative)

I agree with the statement. Students (in Japan) should travel abroad because traveling is one way to learn. By visiting new places, it is possible to learn about things such as the food eaten there or the language spoken there. Going abroad is the best way to study.

(Negative)

I disagree with this statement. Students (in Japan) do not need to travel abroad. These days it is easy to get information about foreign countries on the internet or television. There are a lot of programs and videos made by people who travel all over the world, so it is not important to go there yourself.

平成26年度 英語教育改善のための英語力調査事業 報告書 P.84 より

高等学校学習指導要領「コミュニケーション英語Ⅰ」に関連する領域・内容

- 「コミュニケーション英語Ⅰ」2. 内容（1）
 - ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。
- 「コミュニケーション英語Ⅰ」2. 内容（2）
 - ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。
 - ウ 事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること。

*高大接続システム改革会議（第9回）配布資料の別紙3『大学入学希望者学力評価テスト（仮称）』で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たたき台】を基に編集部で一部改編して作成。参考資料～Writing～は、同資料のP.21を参照

「聞く」「読む」を通して得た知識を活用し、「話す」「書く」の発信力がますます必要に

【ライティング】社会的なテーマについて、個人の経験などを基に、自分の意見と理由を論理的に書いて述べる

ライティングでは、「コミュニケーション英語Ⅰ」の内容より、「聞いたことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く」や「事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること」などに即した参考資料問題となっている。

シヨートエッセイ・スタイルの意見文を書くタスクに対しては、自分の意見と、その根拠となる事例や説明を論旨のねじれなくまとめることが大切である。その上で、解答例に見られるように、要素ごとに段落分けをしたり、相互のつながりを示す discourse markers を使用したりすることもポイントとなる。

なトピックに対して、個人の考えや経験に基づいて意見を述べる

スピーキングの参考資料問題も、「コミュニケーション英語Ⅰ」の内容より、「聞いたことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする」や「事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること」などに即した内容だ。与えられたテーマに対して話す内容を考える時間が1分で、解答時間は2分となる。最初に自分の意見と、そう考える理由を明確にした上で、時間内に理由の具体例を挙げるなどして説明を肉づけしていく。最初の意見との論旨のねじれが生じないこと、解答中に不自然なポーズを何度もはさまないことがポイントとなる。

採点基準には、内容に関する採点の観点として、「意見（＝課題に対する自分の意見や立場を伝えることができる）」「理由（＝自分の意見や立場をサポートする理由や具体例などを伝えることができる）」の2つと、表現における採点の観点として、「語彙」「文法」「構成」の3つがあり、合わせて5つの観点から評価が行われる。

内容面の採点は、それぞれ必要な要素を満たしているか否かの2段階の判定である一方、表現面の採点においては、0～4の各5段階での判定となっている。

解答時間は20分と決して長くはない。イラストを参考に、書くべきアイデアを素早く決めて書き始め、最後に読み直して推敲する時間の余裕がほしいところだ。

【スピーキング】与えられた社会的

採点基準では、次の2つが採点の観点に設定されている。1つは「内容構成の評価」、もう1つは「文法、表現の評価」であり、それぞれ0～3点の全4段階刻みとなっている。最初の意見との論旨のねじれが生じた

解答であれば、「内容構成の評価」において、0点に相当する「与えられた質問に対応した内容になっていない、あるいは内容が量的にほとんどないか断片的である」と見なされるだろう。

また、ポーズを何度もはさんだ解答の場合、各ポーズが数秒程度であれば、3点満点の「自分の言葉で十数語以上は話して、適切な文法や表現を用いている。誤りがあっても理解には影響しない」と判定される可能性は高いと考えられる。ただし、聞き手にとって不自然に長いと感じられるような数十秒に及ぶポーズが繰り返された場合、文法や表現にさしたる誤りはなくとも減点対象となり、2点止まり、あるいは、それ以下と判定されることがあるかもしれない。

解答し始める前の考える時間内に考えがまとまりきらなかった場合は、多少、解答時間内での話し始めが遅れてもよい。早口になることなく落ち着いて、言葉を選びつつも、しっかりペースを保ったまま、自分の考えを伝えきるようにするとよいだろう。

カリキュラム・マネジメントの観点から 英語を学校活動全体の中に位置づける

熊本県・私立真和中学・高校 松下勝之



まつした・かつゆき
教職歴35年。同校に赴任して6年目。

実践的な運用場面を 教科を超えてつくる

経済協力開発機構（OECD）による2003年、06年の「生徒の学習到達度調査（PISSA）」では、日本は読解力、数学的リテラシーなどの分野で大きく順位を下げました。この「PISSAショック」が現在の教育改革の背景の1つにある以上、大学入試改革においても、「思考力・判断力・表現力」の育成を重視するという方向性は当然です。ですから、今回の参考資料問題に対しても、私は違和感を抱くことはありませんでしたし、生徒の思考力、創造性を見る問題を目指していると評価してい

ます。

それまでの英語の指導が「思考力・判断力・表現力」をないがしろにしてきたとは、私は思っています。ただ、これからの指導は、今までの指導で潜在化することがあった「思考力・判断力・表現力」を、より顕在化させた教え方、評価の仕方が求められているのだと考えています。

実際に、英語を使ってコミュニケーションを取る場面を想定すると、英語4技能のうち、どれか1つでも技能が欠けていては成り立ちません。実践的な運用場面を考えると、英語4技能を統合せざるを得ないと言ってもよいでしょう。

こうした中で、今後の英語指導でまず重要になるのは、カリキュラムの中に実践的な運用場面を具体的にどう組み込んでいくかだと、私は思います。英語の授業に限らず、例えば、「総合的な学習の時間」や学校設定教

科・科目を使って課題解決型の授業を設定し、英語でプロジェクトについて発表するのもその1つでしょう。教科の枠内だけではなく、学校全体の活動の中に英語をどう位置づけるのかといった、カリキュラム・マネジメントの観点がまずは必要です。

「運用」と「知識」を つなぐ文法学習

その上で、もう1つ重要なのが、「文法」の扱いです。「文法」は、英語の実践的な運用と通常の授業を連携させる際の鍵になります。

文法では、インプットした知識を定着させるために、様々なアウトプット活動をうまく取り入れたいところです。例えば、50語びったりで英文ミニ・エッセイを書くコンテスト「[Extremely Short Story Competition]」が私が注目している活動の1つです。また、「総合的な学習の時間」や学校設定教科・科目のテーマと連携して、「仮定法を必ず1か所は使い、50語で○○のテーマについて書こう」などといった活動も考えられるでしょう。自分が書いた英文を校正、添削することで、実践的な運用能力が強化さ

れます。

私は、これからの英語教師に求められるのは、ファシリテーション力だと思います。「英語でもっとコミュニケーションしよう」「もっと深く考えたい」と生徒のモチベーションを高めるような授業を実現するには、Parliamentary Debate（即興的に行われるディベート。入念な事前準備を必要としないタイプ）などを取り入れ、学習内容を深めさせたり、ほかの生徒との協働を楽しんだりすることが大切になります。つまり、教え込むだけでなく、生徒一人ひとりの主体的な学びを促進させる仕かけが、授業でより必要になるわけです。

そうしたファシリテーターとしての仕かけは、英語や「総合的な学習の時間」はもちろん、全ての教科・科目で活用することができます。「思考力・判断力・表現力」を育むために、英語という教科が「学びのツール」として全教科とつながることが理想です。そうしたカリキュラムが自校に組み上がった時、きっと生徒にも、様々な言語、文化、価値観の人たちと協働するファシリテーション・マインドが身につくのだと思います。

問題イメージ〈例1〉

与えられたデータから考察に必要な情報を抽出し、
グラフの作成を通して関係を見いだす問題。

物理

二人はさらに探究を続けることにした。

カズエ：この日射量計を使って、何とかして太陽定数の大きさを求めることはできないかな？

ヒロシ：いろいろな太陽高度のときに日射量計を太陽に向けて直達日射量を測定し、グラフを描いて考えてみたらどうだろう。下のような図を使って説明すると、太陽高度が θ のとき、太陽光が大気中を通過した距離は、大気の厚さを1とすると、 $1/\sin \theta$ となるね。ここでは、仮に、太陽光のエネルギーは大気を通過した距離に比例して減衰すると考えてみよう。

図4 ヒロシさんが使った説明図

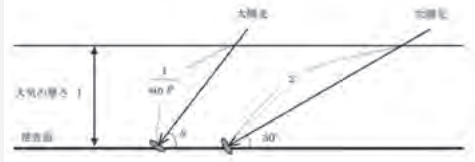


表1 測定から得られたデータ

※時刻	※太陽高度 θ	$1/\sin \theta$	気温	直達日射量 単位: kW/m^2
12:20	69°	1.07	21.5°C	0.92
13:57	58°	1.18	23.0°C	0.89
14:30	52°	1.27	23.0°C	0.87
15:02	46°	1.39	22.5°C	0.84

※時刻と太陽高度 θ は、日射量計で水温の変化を読み取った4分間の中央値を示す。

二人は、快晴の日に、いろいろな太陽高度で直達日射量を測定し、得られたデータを表1にまとめた。そして、このデータからグラフを作成して太陽定数を推定することにした。

問5 表1から必要なデータを抽出してグラフを作成し、ヒロシさんが考えたような仮定に基づいて推定される太陽定数を有効数字2桁で表すとき、次式の□12～□14の中に入る数字として最も適当なものを、下の①～⑬のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

推定される太陽定数 = □12 . □13 $\times 10^{\square 14}$ kW/m^2

- ① 1 ② 2 ③ 3 ④ 4 ⑤ 5 ⑥ 6 ⑦ 7 ⑧ 8 ⑨ 9 ⑩ 0 ⑪ -1 ⑫ -2 ⑬ -3

問題イメージ〈例2〉

温度や浮きの状態など、問題文で与えられた状況からガリレオ温度計の仕組みを思考する問題。

A高校の理科部は、文化祭のブースで、図1に示すようなタイプの温度計を展示することになった。この温度計は、次のような仕組みとなっている。ガラス円筒の液体中に、ガラス製の密封された質量の異なるいくつかの浮きが入れている。温度変化に伴って、それらの浮きが浮いたり沈んだりすることによって、大まかな温度を示す。なお、この商品の品質表示ラベルには図2のように記載されている。

図1 実験ブースに展示する温度計

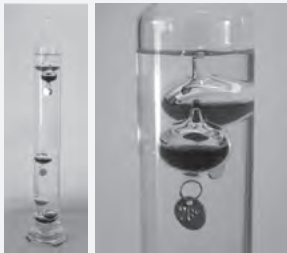


図2 この温度計に付いていた品質表示ラベル

〈品質表示〉
円筒内の液体：パラフィンオイル
ガラス球内の液体：メタノール
(アルカリ性色素入り)
タグプレート・リング：真鍮(しんちゅう)

図3 ヒロシさんが作成したパネル

温度計の解説
温度が高くなると、浮きのガラス球の体積変化によって、浮きにはたらく浮力が変化します。しかし、パラフィンオイルの体積膨張率はガラスの体積膨張率の(A)倍なので、ガラス球の体積変化が浮き沈みに及ぼす効果は、液体の密度変化による効果と比べるときわめて小さいといえます。
温度が高くなると、(イ)。その結果、(ウ)。その結果、(エ)。よって、浮きは下に沈みやすくなります。

理科部のヒロシさんは、温度変化によって浮きが上下に移動するしくみを解説するため、図3に示すようなパネルを作成した。

問2 上の説明文の(イ)～(エ)に入れるべき文章として最も適当なものを、下の文章①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- (イ) □4 (ウ) □5 (エ) □6

- 文章：①浮きにはたらく重力のほうが浮力よりも大きくなります
②浮きにはたらく浮力のほうが重力よりも大きくなります
③浮きにはたらく重力が大きくなります
④浮きにはたらく重力が小さくなります

- ⑤円筒中の液体の密度が大きくなります
⑥円筒中の液体の密度が小さくなります
⑦浮きにはたらく浮力が大きくなります
⑧浮きにはたらく浮力が小さくなります

*高大接続システム改革会議(第11回)配布資料の資料3-2『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』で評価すべき能力とマークシート式の問題イメージ例【たつき台】を基に編集部で一部改編して作成。問題イメージ〈例1〉の問1～4は、同資料のP.11～14を参照、問題イメージ〈例2〉の問1、問3は、同資料のそれぞれP.20、21を参照

必要なデータを抽出して関係を見いだす力や 仮説を立てる力が求められる

【例1 第1問 問5】

第1問の問5は、表1のデータを用いて推定される太陽定数を求める問題だ。問4に出された太陽定数の定義と、問題文の2人の会話から、 $1/\sin\theta$ がゼロの時の直達日射量が推定される太陽定数であることを見抜く必要がある。「評価すべき具体的な能力(案)」の「与えられた状況の中から、必要なデータや条件を抽出・収集する力」「仮説を立てる力」が問われている。特に、「与えられた状況の中から、必要なデータや条件を抽出・収集する力」を見る問題は、第1問の問5だけでなく、今回の問題イメージ例全体に見られたことから、実際のテストでも出題されると予想される。

太陽定数の推定方法を見極めた後は、 $1/\sin\theta$ と直達日射量の値を与えられたグラフ用紙にプロットし、2つの関係を見いだす必要がある。このグラフ用紙に軸や目盛りが

ないことから、どのようなグラフを描くかは自分で判断しなければならぬ。既存の問題とは異なる観点の「どのようなグラフを描くかを自分で判断し、作成したグラフを外挿して正解を読み取る」が扱われた問題であり、また、観察・実験を通じた探究活動が意識された問題とも言える。

この問題は、グラフを利用した解答が求められているが、問題文から、 $1/\sin\theta$ と直達日射量の関係を1次関数と考え、直達日射量と $1/\sin\theta$ の関係式を立式して $1/\sin\theta$ にゼロを代入すれば、グラフを作成せずに解答することも可能だ。このように、解答を推定するプロセスについて様々な方法を考察することとは、「仮説を確かめるための方法立案し実践する力」の育成につながると考える。

第1問を通して、太陽定数や直達日射量、日射量計など、物理では見慣れない用語や実験器具が多く扱わ

れ、また、太陽電池や電気自動車のような社会と関連の深いテーマが出題された。実際のテストでも、物理に関連する多様なテーマが出題されると予想される。日常生活や社会で見られる科学・技術、そして他の教科・科目への興味・関心を高めておくことが大切だ。

【例2 第2問 問2】

第2問の問2は、温度や浮きの状態など、問題文で与えられた状況からガリレオ温度計の仕組みを思考し、その仕組みを正しく説明した文章を選択する問題だ。「温度計の仕組みを分かりやすく解説したパネルの作成」が出題のテーマとなっており、観察・実験を通じた探究活動が意識された問題と言える。

解答するためには、まず、説明文の「温度が高くなると」から、温度が高くなった場合に、重力・浮力・密度がどのように変化するか、仮説を立てながら、それらの関係性を見極める必要があった。温度が高くなると円筒中の液体の密度が小さくなること、浮きにはたらく重力や浮力に温度は直接影響しないことに気づけるかがポイントである。

次に、液体の密度が小さくなった場合の、浮きにはたらく重力や浮力の変化を思考することが求められた。アルキメデスの原理を理解していれば、浮力が小さくなることは容易に想像できる問題であり、物理法則や原理に基づいて思考することが重視されていると思われる。最後に、浮力が小さくなることと、説明文の「浮きは下に沈みやすくなります」から、重力と浮力の大小関係を思考することが求められた。

このように、今回の問題イメージ例では、「温度が高くなると、円筒中の液体の密度が小さくなる」「液体の密度が小さくなると、浮きにはたらく浮力が小さくなる」といった仮説を立て、その仮説が正しいかを原理に基づいて思考するステップが複数扱われていた。ほかにも、仮説を立てる力を見る問題として、観察された現象や測定データを用いて、論理的に組み立てられている仮説を選択する問題などの出題も考えられる。観察・実験を通じた探究活動において、与えられた状況の中から必要な情報を抽出・収集し、仮説を立てる力を養うことが、より重要になるだろう。

汎用性のある手法を用いる実験を選んで行い 探究活動で身につく力を効率的に育む

大阪大学 全学教育推進機構高大接続オフィス 特任教授 川内 正



かわうち・ただし
大阪教育大学附属高校
平野校舎、四天王寺高
校などに勤務。大阪府
高等学校理化教育研究
会顧問。

実際の実験を通して 身につく力が求められる

問題イメージ例で最も注目すべき点は、例1、例2ともに実験が題材となっていてことです。これまでもそうした入試問題は数多く出題されていますが、実際に実験をしていなくても、理論を知っていれば解けるような問題がほとんどでした。しかし、今回の問題イメージ例は、実験の処理に沿った内容であり、生徒が自分で手を動かして実験をした経験がないと、分かりにくい問題になっています。例えば、例1の手順Ⅱに「太陽光

が容器の断面に対して常に垂直に当たる」とあることも、どうすれば実現するのか、意外と分からないと思います。自分で装置をセットしてこそ、理解できることがあります。また、

例2では、与えられた表から使うデータを抽出し、線膨張率との違いにも留意して体積膨張率を比べますが、これは実験で実際に使う手法です。

「評価すべき具体的な能力(案)」に、知識・技能・思考力・判断力に加え、探究活動を想定した7つの力が示され、そのうち4つの力が問題イメージ例の2例に共通して測れるように問題が作られています。そのことから実験の重要性がうかがえますし、私は、「理科課題研究」をテストにしたような問題だと感じました。

既存の問題と異なる点では、与えられた条件から必要な情報を選んで

答えるようになっていことに注意が必要です。解答に必要な条件しか問題文に書かれていなかったこれまでのとは、大きく違います。また、例1は地学に関連する問題でした。実験を題材とした問題が中心になるとすれば、物理学の応用学問である地学関連の問題が多くなると推測します。

生徒同士の議論によって 仮説を立てる力を鍛える

問題イメージ例を見る限り、実験の重要性は高まっています。演示実験をしても、生徒が実際に行う実験が必要です。演示実験は理論理解を助けるために行うものであり、生徒が行う実験とは目的が異なるからです。もちろん、全ての理科の教科書にある全ての実験を行うことはできませんから、ほかの実験にも応用できるような手法を用いる実験を選んで行い、授業で適宜、知識を補足するのが現実的だと思います。

実験で得たデータから必要な情報を抽出し、結論を導く過程では、計算力も鍛えられます。例1の問3で

は「cm」を「m」に換算して解答しますし、例2の問1では負の指数を含む計算をしなければなりません。そうした一連の計算は、普段から実験を行い、得た数値のデータ処理をすることで慣れていきます。また、例1の問5ではグラフ用紙に目盛りや軸が示されておらず、自分で描くグラフを判断する力が必要です。そうした力も、実験を行い、得られた結果をグラフ化するという作業を積み重ねていくことで身につけていきます。

今回の2つの問題イメージ例からは、「仮説を立てる力」の重要性がうかがえます。生徒に問いを投げかけ、生徒から出てきた仮説をグループで議論させて、1つの仮説にまとめる。いわゆるアクティブ・ラーニングを積み重ねて、仮説を立てる考え方を鍛えていく必要があるでしょう。

現行の教育課程では物理の学習内容が増え、厳しいとは思いますが、授業内容を工夫して、実験やアクティブ・ラーニングを行う時間を確保していくべきだと考えます。

問題イメージ〈例3〉

歴史資料を読み解き、複数の歴史事象を関連づけながら、
多面的・多角的に考察して仮説を設定し、
論拠に基づいてその適否を判断する問題。

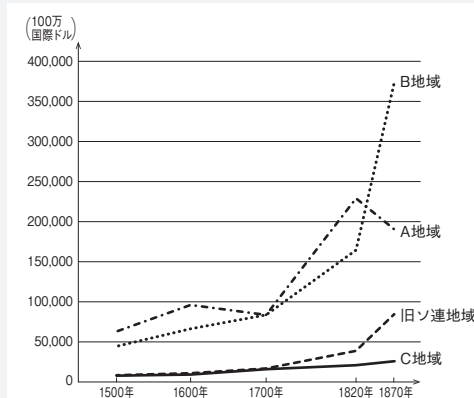
世界史

第1問

次の図は、『経済統計で見る世界経済 2000 年史』（アンガス・マディソン著）に掲載されている数値をグラフ化したものである。日本・中国・西欧・旧ソ連連邦（旧ソ連）にあたる各地域の経済規模（GDP）の長期的な傾向を把握するために、16 世紀までさかのぼって推計している。グラフと注を読んだうえで、I、II の問いに答えよ。

注1 「西欧」、「旧ソ連」というまとめ方は、マディソンの著書によっている。

注2 GDP 数値は、主として一人あたり産出額に人口規模を掛け合わせて算出した概算値を用いている。また、国際ドルとは、異なる通貨単位を計量するために使われる単位である。



I 16 世紀に4 地域中で最大の経済規模をもっていたA 地域のGDPは、17 世紀の落ち込みののち、18 世紀に増加している。それらの背景となる政治・経済・社会の動きについて、下の問いに答えよ。

問1 次の①～⑧のうち、A 地域の変動について述べた文として適切なものをすべて選べ。

- ① 16 世紀にはこの地域の人々がアメリカ大陸を含む世界各地に進出し、世界の貿易・商業を活性化させた。
- ② 16 世紀には日本やシベリアなどの銀が大量に流入して経済が活性化したが、遊牧民や海賊の侵攻に苦しんだ。
- ③ 17 世紀には大規模な農民反乱や、東北から侵攻した異民族王朝への抵抗戦争などによって、人口が減少したと考えられる。
- ④ 17 世紀には、宗教対立や王位継承紛争もからんで各地で不況や戦乱・社会的迫害が生じた。その背景には地球の寒冷化もあった。
- ⑤ 18 世紀には急激な人口増に農業集約化や商工業の発展が追いつかず、辺境部の開発や海外への移民が活発化した。
- ⑥ 18 世紀には租税が銀納化される一方、人頭税が廃止され、経済成長にもつながった。
- ⑦ 18 世紀には輸出が低迷するが、その一方で国内の商業・手工業が発展し輸入品の国産化にも成功したので、全体として外国貿易に依存しない経済の仕組みが成立した。
- ⑧ 18 世紀には農業技術が向上して大規模な農業生産・経営が可能になったため、競争に敗れ土地を失った農民は都市に流入して、工場労働者となった。

II グラフ中の「旧ソ連地域」を示す折れ線に関する次の会話文を読んで、下の問いに答えよ。

(教員) 旧ソ連地域のGDPは18 世紀には上昇傾向を示していますね。この理由は何だと思いますか。皆さんで仮説を立てて話し合ってみましょう。

(生徒1) 18 世紀に中央アジアや極東でロシア帝国がどんどん勢力を拡大していたことと、関係あるのでしょうか。

(生徒2) いや、ロシア帝国も工業化が進んだのではないかな。北方戦争に勝ったことは、軍事力が向上したことの一つの証しとも言えますよね。

(生徒3) 18 世紀にイギリス以外の国で工業化が進んだというのをおかしいと思います。

(生徒4) 私は、穀倉地帯をもつウクライナやポーランドなどを占領したことが影響していると思います。当時のロシアは農産物輸出で富を築いたのではないのでしょうか。

問4 生徒2が自分の仮説を統計データを用いて裏付けようとした場合、明らかに役に立たないと思われるものはどれか。次の

- ①～⑤のうちからすべて選べ。
- ① 18 世紀ロシアの品目別輸出額の変動
 - ② 18 世紀ロシアの産業別人口の変動
 - ③ 18 世紀ロシアの地域別農奴数の変動
 - ④ 18 世紀ロシアの年次別戦死者数の変動
 - ⑤ 18 世紀ロシアの職業別納税者と納税額の変動

*高大接続システム改革会議(第11回)配布資料の資料3-2『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』で評価すべき能力とマークシート式の問題イメージ例【たつき台】を基に編集部で一部改編して作成。問題イメージ〈例3〉の問2、問3は、同資料のP.30、31をそれぞれ参照

資料の活用を通じ、歴史事象について論理的に捉える力が求められる

◎歴史に関する重要情報を資料から取り出し、考察する力

問1は、GDPの長期変動を示したグラフを基に、複数地域におけるグラフの変化の背景を考える問題だ。各折れ線グラフの該当地域は1つを除き明らかにされておらず、グラフや設問文に糸口を見いだしながら各地域を判別する必要がある。受験生にとって初見であろうこのグラフから、どの情報を取り出して考察するかポイントだ。時期とGDPの多寡や推移から、B地域は産業革命から帝国主義の時代に向かってGDPの伸びが著しい西欧、人口や地域規模からほかの2つの地域と比べてGDPが小さいことが予想できるC地域が日本、残るA地域が中国となる。

また、グラフは、いずれも時代が進むにつれて増加傾向にあるが、A地域だけ1820年から70年にかけて

て減少している。A地域の「1820年以降の減少は何が原因か」という疑問から思考を巡らせ、アヘン戦争などの列強進出を想起して、A地域を中国と判別することもできる。

様々な視点からアプローチし、「なぜ、そうなるのか」という因果関係を考えていくと、グラフの変化と連動して理解でき、「評価すべき具体的な能力(案)」にある「歴史資料をよみとき、歴史に関する重要な情報を取り出す力」及び「歴史上の出来事や事象の因果関係、歴史上の出来事と現在との関係を多面的・多角的に考察する力」にかなう。資料は多岐にわたるが、変化の特徴や差異に注目し、その因果関係を歴史事象と関連づけて考察することが大切だ。

◎論理的思考力と仮説や推論を立てる力

問4では、旧ソ連地域を示す折れ

線グラフを題材に、同地域における18世紀のGDPが上昇傾向を示す理由が扱われた。先生と生徒4人の会話文を読み、生徒2の「工業化が進んだ」という仮説の裏づけにあたり、不適切なデータを判別することが求められた。正答に至るためには、直接的に世界史事項が必要とされるこれまでのテストと異なり、世界史の基礎事項を基に会話文を理解し、ロシアの工業化について考察する設問だ。

工業化の判断に際しては、農奴数や戦死者数のデータは直接かわりがないため、ほかの3つのデータと区別される。本問では、仮説を裏づける論拠が問われている点が目新しく、先にも触れた「評価すべき具体的な能力(案)」の「資料と歴史上の事象との関わりを推論する力」「資料等の根拠に基づいて、論理的に表現する力」が意識されている。

また、ここでは会話文という形式が用いられ、4人の生徒の意見(仮説)が述べられている。「重視すべき学習のプロセス(案)」には、論拠に基づいて情報を整理し、多面的・多角的

な考え方を理解することが掲げられている。このことから、個々の意見について「なぜ、そう言えるのか」といった論拠をもって議論し、理解する姿勢が重要である。

◎基礎・基本事項の知識・理解は必須

上記で触れた「重視すべき学習のプロセス(案)」や「評価すべき具体的な能力(案)」では、ほかに「日本を含む世界の歴史の複合性や関連性を理解する力」などが示されている。それらも含めて各種能力が求められているが、その前提として、世界史の学習における基礎・基本の定着の必要性が各設問からうかがえる。細かい知識の定着に労力を割く必要はないが、必要最低限の知識をしっかりと理解することが大事だ。

これまでは知識そのものが求められる傾向が強かったが、今回の設問では、知識を活用して、正答への多面的・多角的なアプローチが重視される。正答が1つとは限らない形式の設問では、なおさらだ。これまでに、相互の関連性も踏まえた基本事項の着実な理解を目指したい。

「覚える授業」から「考える授業」へ 授業のあり方の根本的な転換が必要

長野県長野高校 教頭 小川幸司



おがわ・こうじ
教職歴27年。教頭として同校に赴任して2年目。

資料を読み込む力がないと 解けない問題

私は以前、戦後の60年間で世界史の教科書の巻末の索引数が、どれくらい増えたかを調べたことがありません。結果は1300から3800にまで激増していました。膨大な歴史用語を生徒に覚えさせることに汲々（きつぱ）としているのが、教師の現状です。そうした中で、中央教育審議会で世界史や日本史のあり方について議論されているのは、知識詰め込み型の指導から脱却し、生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすためには、世界史や日本史はどうあるべきかを巡ってのことであると、私は捉えています。

次期学習指導要領で導入予定の必修科目「歴史総合」（仮称）では、歴史の転換点における「継続と変化」「原因と結果」「類似と差異」について、資料の読み取りや議論を通じて、考察を深める活動を重視することが示されています。「歴史総合」のみならず、世界史や日本史でも、この延長線上で授業を展開することが求められるでしょう。その際、歴史用語の扱いについては、「研究者と教員との対話を通じて、歴史を考察する手立てに着目するなどして構造化を図る」ことが打ち出されています。習得する歴史用語を精選した上で、「覚える授業」から「考える授業」への転換を図ろうというわけです。

そのような観点で今回の問題イメージ例を分析すると、世界史や日本史の今後の方向性と求められる指導が、より明確に見えてきます。

今回の問題は、資料を読み込む力

がないと、絶対に解けないものです。しかも、日本、中国、西欧、旧ソ連という異なる地域の数世紀にわたる政治・経済・社会の変動を理解していなければなりません。まさに歴史の継続と変化を読み取る力や、地域間の類似と差異を比較する力が問われます。また、問題文中に出てくる歴史用語からは、詳細な知識よりも、歴史を考察する力を測ろうとしていることが感じ取れます。

生徒を揺さぶる問いを 授業の中で発していく

これまでの歴史の授業では、「（ ）の中に入る語句は何か」「を説明しなさい」といった問題に対応できる力を身につけさせておけばよかったとも言えます。しかし、今後はそうはいかなくなります。

例えば、フランス革命は、一般には1789年のバスティーユ牢獄襲撃が革命の勃発とされていますが、見方を変えれば違う答えを導き出すことも可能です。そこで、生徒には、「フランス革命が起きた年号ではなく、「あなたは何をもちつてフランス革命の始まりとするか」と問うことが大切

になります。そして、様々な資料を基に、根拠を挙げながら自分なりの答えを導き出していくことを重視するのです。その過程で、生徒は、歴史を考察するために必要となる視点や方法を獲得していきます。

そうした指導を行うためには、授業のあり方を根本から見直す必要があります。もちろん、基礎的な知識の習得は不可欠ですが、それだけで授業を終わらせてはいけません。私の授業では、知識解説は1コマの前半で効率よくまとめ、後半は生徒に問いを発することに充ててきました。例えば、フランス革命時の人権宣言について学んだ後に、その対象に女性が含まれていなかったことや、フランスではほかの西欧諸国と比べて女性参政権の実現が遅れたことを示して、「なぜだと思っ？」と生徒に問いかけます。そして、資料を調べさせたり、討論させたりしながら、当時のフランスにおける人権の概念や内実をより深く考えさせるわけです。

これからの指導では、生徒の思考を揺さぶる効果的な問いをいかに発していけるかが、教師に求められると思います。

管理職メッセージ

問題イメージ例の分析から分かった、各教科で求められる力とその育成に向けて必要な指導の共通点、すなわちアクティブ・ラーニング（以下、A・L）を学校全体で行う上で必要なことは何か。高大接続システム改革会議に委員として参加した2人の公立高校校長に聞いた。

A・Lの本質を理解する場として全校体制での研修を

東京都立西高校 校長 宮本久也

「学力」とは、知識や技能、そして、それらを統合したり組み合わせたりする思考力や判断力、自分で学びを継続させていく力などをトータルに含む力だと言えます。その中で最も大切なのは、学びの意欲だと考えます。生徒に主体的な学習意欲を持続させることが、学力向上を図る上で何より重要であり、それがなければ受験学力も伸びないことは、多くの先生が実感しているはず

です。そうした学力を育むために、A・Lが推進されていることは周知の通りです。授業を変えなければならぬという共通理解は、本校でも急速に進んでおり、多くの教師が授業にA・Lを取り入れています。



みやもと・ひよし
教職歴37年。同校に赴任して5年目。東京都教育庁指導部指導企画課長等を経て、現職。

ただ、生徒が活発に活動しているように見えても、知識が定着していない授業もあります。「グループ学習」「A・L」ではありません。授業が上手な教師であれば、ただ座って聞いているだけのように見えても、生徒一人ひとりが深い思考活動をしており、誰もが発言したくなるような雰囲気醸成し出しています。A・Lの大事なポイントはどこか、こういった点に弱点があるのかといったことをしっかり理解した上で、授業に取り入れることが大切です。

効果的なA・Lを行うために、今後、より重要となるのが校内研修です。高校には学校全体で研修を行うといった風土が、小・中学校に比べてあまりありませんでした。しかし、そういった文化が学校に定着すれば、先生自体のポテンシャルは高いのですから、授業は大きく変わっていくのではないのでしょうか。

理論や経験に裏づけされた研修の枠組みを構築する

岡山県立和気閑谷高校 校長 香山真一

これからの授業で鍵となるのは、「活用」ではないでしょうか。習得した知識を活用すれば、その知識がはがれ落ちにくくなります。その最たる例が教師で、生徒に毎日教えているから、知識は深まり、はがれ落ちません。同様の状態に生徒をさせようというのが、A・Lのねらいだと思います。今後は、公式自体を証明する、自ら法則性を見いだして解答を導くなど、教科・科目の本質を深く理解することがより求められます。また、他者と協働する中で、新たな考え方や切り口が見つかることもあります。そうした学びの場としても、A・Lは有効です。

A・Lで重要なのは、生徒一人ひとりに自分の言葉で語るプロセスがあること



こうやま・しんいち
教職歴35年。同校に赴任して4年目。岡山県立岡山操山高校教諭等を経て、現職。

とだと考えます。それさえ担保できれば、教師が話す時間の多い授業でも、生徒の頭の中はアクティブになり、知識がはがれ落ちにくくなるのです。そうした授業を行うためには、学力の3要素を分析的に捉え、それらの力を生徒につけるために効果的な指導や教材、声かけを、教師間で蓄積・共有することが大切です。その学びが本当に効果があつたのかどうかを、学習者自らの言葉で語ってもらい、授業改善に反映するという手法も有効だと思います。理論や経験に裏づけられた研修の枠組みを構築し、教師全体の質を高めていくべきでしょう。

今やインターネット上に様々な授業の動画がアップされています。質の高い授業を視聴できる環境がありながら、それでもなおお学校に行き、受けたくなる授業とはどういうものか、教師一人ひとりが考えることが大切だと思います。

国語

問題例1

生活とのかかわりをより意識した出題のイメージを示すための問題例

分 析

問題 次の文例1及び文例2を読んで、後の問い(問1～問4)に答えなさい。

■文例1

保護者各位	平成28年9月5日 虎ノ門高等学校 PTA 会長 伊藤 進
第25回学校祭のPTAバザー企画について	
謹啓	
初秋の風がそよ季節となりました。日頃、保護者の皆さまには格別の御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。	
さて、標記の件につきまして下記の予定で出品募集をすることとしましたので御案内いたします。よろしく御協力のほど、お願いいたします。	
末筆ながら皆様の御健勝をお祈り申し上げます。	A
記	
1. 募集日時：平成28年9月24日(土)9時～16時	
2. 募集場所：虎ノ門高校東館3階会議室	
3. 募集品目：日用品、書籍、文具、衣類(必ずクリーニングをしてください)等	
4. 注意事項：植物や食品、売れ残った後の処理に困るものは受け付けません。 (その他詳しいことはクラスのPTA役員にお尋ねください。)	

■文例2

総合感冒薬 説明書	
特徴	
• 頭痛、のどの痛み、鼻水などにすぐれた効果をあらわす総合感冒薬です。	
• 当社が開発した $\alpha \times \times \times$ フェンをはじめ、7種の有効成分がかぜの諸症状を緩和します。	
• 胃粘膜を保護する成分を配合しており、胃にやさしいかぜ薬です。	
• 小型の錠剤で飲みやすい薬です。	
! 使用上の注意 !	
1. 次の人は服用しないこと	
(1) 本剤による過敏症状(発疹、かゆみ等)を起こしたことがある人。	
(2) かぜ薬や解熱鎮痛剤を服用してぜんそくを起こしたことがある人。	
2. 本剤服用中は次の医薬品を服用しないこと	
他のかぜ薬、解熱鎮痛剤、鎮静薬、抗ヒスタミン剤を含有する内服薬、…(以下略)…	

出典/大修館書店「高等学校現代文」(平成18年)に掲載の文例を参考に作成

問1 空欄Aに入れるのに適当な言葉を漢字2字で書きなさい。

問2 文例2の内容や表現について述べたものとして適切なものを、次のア～オから1つ選んで記号で答えなさい。

- ア 薬の特徴として、その効果だけでなく色や形についても説明している。
- イ 専門用語を使わず、幼い子供にも理解できるようにしている。
- ウ 記号を用いて、特に注意を喚起すべき情報に着目しやすくしている。
- エ 薬の価格の安さや飲みやすさなどの利点を効果的に説明している。
- オ 利用者の声を敬体を用いて紹介し、薬の効果を親しみやすく訴えている。

問3 文例1と文例2の共通点について述べたものとして最も適当なものを、次のア～オから1つ選んで記号で答えなさい。

- ア 自らの主張の根拠となる情報を引用によって示し、説得力を高めようとしている。
- イ 読み手から提出された疑問点に対して説明し、不明な点をなくそうとしている。
- ウ 今後予定されている出来事の内容と留意点を伝えようとしている。
- エ 必要な情報を読み手に正確に伝え、適切な行動を促そうとしている。
- オ 内容のメリットとデメリットを対照的に示し、正確な理解を求めようとしている。

*高大接続システム改革会議(第13回)配布資料の資料2『「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の問題作成イメージの例等」を基に編集部で一部改編して作成。問題例1の問4、問題例2～4は、同資料のP.10～19をそれぞれ参照

問題作成イメージから見える
「高等学校基礎学力テスト(仮称)」
で求められる力

「高等学校基礎学力テスト(仮称)」ではどのような問題が出されるのだろうか。文部科学省より公表された「問題作成イメージの例等」を基に、同テストで求められる力について、進研模試の教科編集者が分析した。

国語の基本的な力の定着と、状況・目的に応じて表現の工夫や課題解決の説明を考える力が求められる

問題例は、「義務教育範囲」及び「国語総合」の範囲から出題された。説明的文章・文学的文章からの出題、及び生徒が日常的に目にするような身近な文章を素材とし、全体として主に基礎的な「知識・技能」に関する設問を中心としながら、社会の中で出合う様々な場面で「知識・技能」を活用する力や、課題解決のための基礎的な力を問う内容となっている。また、本文に関する生徒の討論の様子を読んで答える問題や、本文に関連するウェブサイトから引用した情報を読み取って答える問題など、複数のテキストを素材とした問題もあった。国語の基本的な力の確実な定着と、身につけた「知識・技能」を状況に応じて活用し、課題解決の道筋を考える力を育むことが重要だ。

【問題例1】生活とのかかわりをより意識した出題のイメージ

大修館書店『高等学校現代文』（平成18年）掲載の文例を参考に作成された問題。生徒が日常的に目にする身近な文章の例として、学校祭のPTAバザー企画に関する案内文書と薬の取扱説明書を素材としている。問1・問2は、基礎的な「知識・技能」を直接問う設問、問3は、2つの文例を比較し、それぞれに共通する表現の特色や書き手の意図について考える設問、問4は、「読み手に内容がより正確に伝わるように」非連続型テキストの効果を考え、表現の工夫について、自分の考えをまとめて制限字数内で記述する設問だ。

個々のテキストは簡潔かつ平易なものだが、設問内容を踏まえて各テキストから必要な情報を見つけ出し、比較・関連して考えることが必要だ。また、読み取った情報を統合しながら、目的や意図に応じて自分の考え

を構成する力が求められている。

【問題例2】文章を読んで設問に解答するオーソドックスな形式のイメージ

「高校卒業程度認定試験 平成27年度 国語 第一回」の小説読解の問題。漢字の読み取り、登場人物の心情の理解、場面・情景の理解、傍線部の表現に関する生徒の話し合いの様子を読んで登場人物の心情について考える問題という、いずれも多肢選択式のオーソドックスな設問構成だ。

最終設問は、本文に関する生徒の討論の様子を読んで答える問いだが、複数のテキストの情報を統合して考える力というよりも、言語活動の場面に即して本文の内容の理解を促すものとなっている。各設問を通じて、小説の読解に関する基本的な力を確認する設問構成だと言える。

【問題例3】義務教育段階の学び直しの観点から、高等学校段階でも認が必要事項のイメージ

文部科学省「平成27年度 全国学力・学習状況調査 中学校第三学年 国語 A」の文学的文章読解問題だ。表現技法についての知識、登場人物の様

子の理解、傍線部に示された場面・情景の説明に関する、いずれも多肢選択式のオーソドックスな設問である。義務教育範囲で習得すべき基礎的な「知識・技能」についての学び直しと、その定着状況の確認として取り上げられたものと考えられる。

【問題例4】義務教育段階での正答率から、高等学校段階でも引き続き指導が必要事項のイメージ

文部科学省「平成26年度 全国学力・学習状況調査 中学校第三学年 国語 B」の問題。説明的文章と、ウェブサイトで引用した本文の内容に関連する情報を、組み合わせることを求める問いであり、複数の資料を比較し、必要な情報を読み取りたり要旨を捉えたりする力が必要だ。

最終設問では、ある課題解決の方法について、読み取った情報をまとめて論理的に表現する力が求められている。各設問とも、平成26年度中学校第三学年の調査では正答率が30〜60%程度と、やや低い結果だった。高校段階でも引き続き指導が必要な事項として取り上げられたと考えられる。

* P.22、24、26で提示している問題作成イメージは、今後、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の問題作成に関する検討を深めていく際のたたき台として用意されたものであり、あくまで一例に過ぎないものです。そのため、今回提示された問題作成イメージをそのまま「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の問

問題例1

日常生活とのかかわりをより意識させる出題のイメージを示すための問題例

問題 ある電気店で下のような広告があった。
この広告の空所を埋めて i) 何年使用すると食器洗い機の方が ii) いくら安くなるのかを伝える広告を完成させなさい。

食器洗い機 価格 40,000 円 (税込)

食器洗い機は手洗いに比べて、食器洗いにかかる費用が 20% 少なくてすみます。手洗いの場合、1年間の費用は 22,000 円

つまり、(i) 年使えば食器洗い機の方が、(ii) 円安くなる !!

※食器洗い機にかかる費用には、光熱費、水道代、洗剤代等食器洗いに必要な金額すべてとその金額にかかる消費税を含んでいます。

「平成 26 年度和歌山県高等学校入学者選抜学力検査問題」より一部改題

問題例3

義務教育段階の「学び直し」の観点から、
高校段階でも確認が必要な事項のイメージを示すための問題例

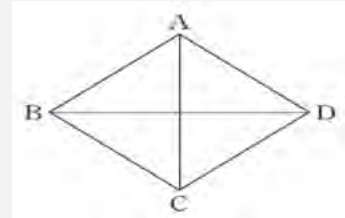
問題

7 次の (1) から (3) までの各問いに答えなさい。

(1) ひし形 ABCD において、 $AC \perp BD$ が成り立ちます。

上の下線部が表しているものを、下のアからオまでの中から 1つ 選びなさい。

- ア 4つの辺はすべて等しい。
- イ 向かい合う辺は平行である。
- ウ 向かい合う角は等しい。
- エ 対角線は垂直に交わる。
- オ 対角線はそれぞれの中点で交わる。

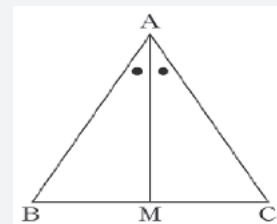


(2) $AB = AC$ である二等辺三角形 ABC があります。∠A の二等分線をひき、底辺 BC との交点を M とします。

このとき、 $BM = CM$ であることを次のように証明しました。

証明

△ABM と △ACM において、
 仮定から、 $AB = AC$ …①
 $\angle BAM = \angle CAM$ …②
 共通な辺だから、 $AM = AM$ …③
 ①, ②, ③より、 がそれぞれ等しいから、
 $\triangle ABM \cong \triangle ACM$
 合同な図形の対応する辺は等しいから、
 $BM = CM$



上の証明の に当てはまる言葉を書きなさい。

「平成 27 年度全国学力・学習状況調査」(中学校第 3 学年 数学 A 問 7) より

* 高大接続システム改革会議 (第 13 回) 配布資料の資料 2 『高等学校基礎学力テスト (仮称)』の問題作成イメージの例等」を基に編集部で一部改編して作成。問題例 2 は同資料の P.23、問題例 4 は同資料の P.25、26 を参照

出題の中心は、生活と関連した問題、 高校数学の基礎事項、義務教育領域の3領域

【問題例1】は生活とのかかわりを意識させる問題、【問題例2】は小問形式で高校数学の基礎的な知識・技能を問う問題、【問題例3】は義務教育段階の学習内容から「学び直し」の観点で出題された問題、【問題例4】は義務教育段階の学習内容で

高校段階でも引き続き指導が必要な事項のイメージを示すための問題だ。いずれも、高校入試や文部科学省「全国学力・学習状況調査」などの問題、またはそれを基にした改題であり、あくまで問題のイメージ例として示されていることが強調されている。

【問題例1】

電気店の広告を題材に、食器洗い機を何年使えば手洗いを続けた場合より安くなるかを問う問題で、「平成26年度和歌山県高等学校入学者選抜学力検査問題」の改題だ。元の問題では、10年間、食器洗い機を使用し

た場合と手洗いの場合との費用の差額を答えさせており、文章中の数値を用いて計算できるのを見ていた。

今回の問題例では、食器洗い機の必要があり、文章の情報から1次不等式を立式できるかどうかを見る問題となっている。また、問題では電気店の広告という身近な題材を取り上げており、自分の身の回りの事象や課題を、数学を用いて解決することができるとも見えている。

【問題例2】

小問形式で基礎的な知識・技能を問う問題。小問形式だが、(1)～(3)は記述式であり、知識・技能の定着を確実に測るための出題方式だと言える。(4)は、平成25年度、高校2年生を対象に実施された神奈川県学習状況調査の問題だ。いずれも高校数学の基礎的な内容からの出題で、高校

2年生対象であることも併せて、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と近い内容と対象学年だと言える。このことから、本テスト実施の際も、このような出題がされる可能性は高い。

【問題例3】

「平成27年度全国学力・学習状況調査」から、義務教育段階の「学び直し」の観点で出題するイメージの問題である。ひし形の2本の対角線の性質や、2つの三角形が合同になる条件を確認する問題であり、実施時の正答率はいずれも約76%だった。中学校で学習する図形の性質の中でも基本的な内容で、高校段階でも確実な定着が必要な事項として、今回の問題例に取り上げられたと考えられる。

【問題例4】

【問題例3】と同じく、「平成27年度全国学力・学習状況調査」からの出題である。相似な三角形同士の性質や平行四辺形の性質などを用いて、図形の性質について考察していく問題で、この問題の実施時の正答率は40～50%程度と、やや低い結果だった。高校段階でも引き続き指導が必要

な事項として、知識を活用して発展的に考える力を測る問題を挙げたと考えられる。

4つの問題例について、ポイントをまとめると次のようになる。

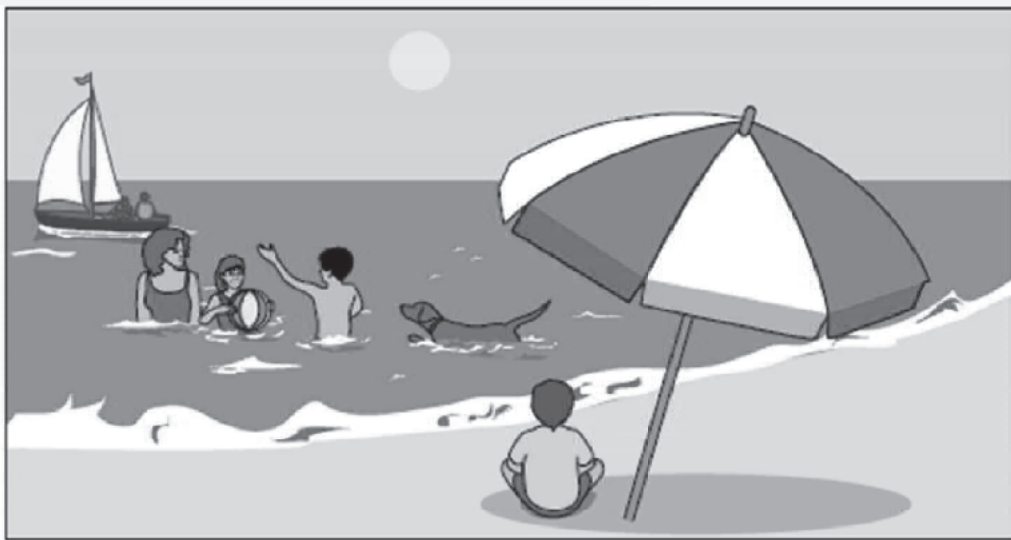
- 身近な題材を用いて文章から情報を読み取る問題が示された(問題例1)。
 - 高校段階の学習内容については、小問形式による問題が示された(問題例2)。
 - 義務教育段階の学習内容については、「全国学力・学習状況調査」の問題のうち、実施時の正答率がやや低く、高校段階でも指導や確認が必要な内容が引用された(問題例3・4)。
- 今後の指導では、高校段階の学習内容については、基礎の定着を徹底させることはもちろん、【問題例1】のように、身近な題材を用いて文章から情報を読み取り、立式させる問題にも取り組ませることが大切だ。また、義務教育段階の学習内容については、「全国学力・学習状況調査」の実施結果なども参考にしながら、指導内容を検討する必要がある。

問題

Instructions

In this task, there is a picture and a set of instructions. The instructions ask you to write about three different things, using the picture as a guide. Read the instructions and write your text on the opposite page. Follow the instructions carefully.

Example task



Write your friend an email and send this picture from your holiday. Tell your friend about three things in the photo:

- where the people are
- the weather
- what the people are doing.

Write 20-30 words.

解答例

My family is at the beach. My mum, dad and sister are playing in the sea with my dog. My little brother is sitting on the sand. It is sunny.

*高大接続システム改革会議(第13回)配布資料の資料2『『高等学校基礎学力テスト(仮称)』の問題作成イメージの例等』を基に編集部で一部改編して作成。問題例1~3は同資料のP.28、30、31を、問題例5は同資料のP.33を、それぞれ参照

オーセンティックな題材への対応力の育成が、今後の指導では一層重要に

問題例は、「義務教育範囲」と「コミュニケーション英語Ⅰ」の範囲から出題された。いずれも身近な場面が扱われ、中学校で履修する語彙が多く使われており、一見、易しい問題が多い。しかし、音声情報や読解情報の中にはオーセンティックな英語表現がちりばめられ、そうした表現への対応力が求められている。また、問題例には、ライティング力やスピーキング力を測る内容もあった。これは、「聞くこと」「読むこと」を通して得た知識を活用して、「話すこと」「書くこと」を通して発信するという、4技能の総合的な育成を目指す新学習指導要領の内容に即した出題といえる。

問題例は、「義務教育範囲」と「コミュニケーション英語Ⅰ」の範囲から出題された。いずれも身近な場面が扱われ、中学校で履修する語彙が多く使われており、一見、易しい問題が多い。しかし、音声情報や読解情報の中にはオーセンティックな英語表現がちりばめられ、そうした表現への対応力が求められている。また、問題例には、ライティング力やスピーキング力を測る内容もあった。これは、「聞くこと」「読むこと」を通して得た知識を活用して、「話すこと」「書くこと」を通して発信するという、4技能の総合的な育成を目指す新学習指導要領の内容に即した出題といえる。

【リスニング】日常的な場面に即した対話を聞いて、概要や要点を捉える

リスニングでは、短い対話を聞いて情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりする問題例が示された。対話の内容は、高校生にとって身近なもので、イラストで示された選択肢も聴解のヒントとなる。ただし、誤答選択肢も対話の一部をイラスト化したものであるため、それに惑わされずに解答しなければならぬ。問われていることを把握した上で音声を聞くなど、問題に応じた聴解スキルの習得が必要だ。

【リーディング】オーセンティックな題材を読み、概要や要点を捉える

リーディングの1つめの問題例は、英語の注意書きを見て、それがどの

ような場面で用いられるものかを選ぶ問題だ。注意書きの中に「WATER」という「水」に関する語彙があることから、正解は「by a river」であると推測して解く必要がある。外国で生活をしている時に目にする注意書きや広告など、あらゆる非連続型の英文が問題の題材となり得るため、日頃から英語の活用場面を意識した学習をしているかが、今後ますます重要になるだろう。

2つめの問題例は、記事を読み、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりする出題だ。語数は230語程度で、「屋外で泳ぐこと」に関する筆者の体験談を中心とした読みやすい内容だ。ただ、「without needing a break（休憩を取ることなし）」といったオーセンティックな英語表現が散見されるため、そのような表現にまずまずに読み進める力が必要となる。

【ライティング】イラストを基に、友人にメールを書く

与えられたイラストを基に、友人にメールを書くという問題で、「説

明の描写や表現を工夫して相手に効果的に伝わるように書くこと」に即した内容になっている。場所や天気、イラストで示された人々の行動を描写することが条件として与えられているため、その条件を把握した上で、基本的な文法力を駆使し、相手に伝わる英文を構成する力が必要となる。

【スピーキング】受検生自身についての質問に英語で答える

スピーキングでは、受検生自身についての基本的な質問に、英語で答える問題が示された。「話すこと」の試験形態は検討中であり、この問題例では、試験官1人、面接者1人の方式を想定していると示されている。「あなたの好きな科目は何ですか」など、高校生にとって身近な内容の質問が多いが、即時に自分の考えをまとめるのに正確に回答する練習が、今後の指導では不可欠になるだろう。

このように、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」の4技能を総合的に育むために、実践的な英語の活用場面を意識した指導が、今後一層重要になるだろう。

基礎学力の定着を図る

P D C A サイクルの一環としての活用を

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、高校段階における生徒の基礎学力の定着度合いを把握、及び提示できる仕組みとして新たに設けられる。テストの活用方法や実施要項の概要、出題内容の意図などについて、文部科学省初等中等教育局の今井裕一総括リーダーに聞いた。



文部科学省
初等中等教育局
高校教育改革 P T
総括リーダー
今井裕一 いまい・ゆういち

高校教育の質向上に向けた 施策の1つとして実施

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」（以下、本テスト）は、高校卒業後の社会生活で求められる基礎学力の定着を確認するためのテストです。大学入試のように、母集団の中での受験者の位置を知ることが目的ではなく、多様な学習成果を測定するツールの1つであり、学習の定着度合いや学力の伸びを示すことが目的

です。

高校では、高校進学率の高まりを受け、多様な方法で入学者選抜が行われるようになりました。また、生徒の興味・関心、能力・適性に応じて、学校や学科、教育課程の多様化が進みました。一方で、学習意欲が低いことも含め、基礎学力が不足している生徒の増加などの課題も明らかになっていきます。そうした課題を持つ生徒が、本テストの受検によって、自分はどこで

つまづいているのかが分かり、そこに立ち戻って学び、理解することで、「分かった」「できた」という実感を持たせたいと考えています。それが、生徒の学習意欲の喚起や学習改善につながるかと期待しています。

さらに、各校や教育委員会では、本テストの活用によって、教育の質の向上を図る P D C A サイクル（図）を構築してほしいと考えています。

既に、多くの高校で、習熟度別学習や義務教育段階の学び直しなど、多様な指導の工夫をされています。それらの成果を客観的に、より広い視点で把握するために、本テストを活用してほしいと思います。また、全国規模のテストという観点では、校内実力テストの代替としても活用できます。本テストにより、生徒の基礎学力の定着度を把握し、さらなる指導改善を図ってほしいと思います。

教育委員会では、自分たちの目標・計画に基づいた様々な教育施策の成果を、本テストの各校のデータに基づき検証できるはずと期待しています。そうした上で、各校の教育の質確保に向けた

体制強化や学校支援に取り組むことが、P D C A サイクルの確立につながることでしょう。

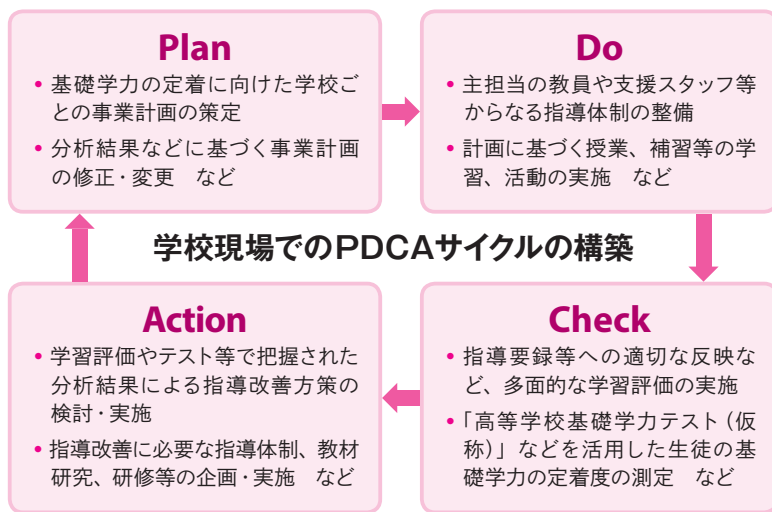
学校の状況に応じて 柔軟に選べるような形式に

本テストは、学校単位での受検を基本とします。ただ、学校単位でも、生徒全員が受検する必要はありません。特定のクラス、希望者のみとするなど、各校の目的に応じた受検も可能です。また、高校卒業者を含めた個人での受検も可能です。

実施回数は、各校の科目履修の進捗状況や学校行事等に応じて、学校や設置者が判断できる仕組みとする予定です。

また、高校、高校生は多様化している中で、同一問題・一斉実施の形式は採りません。複数段階の問題を用意し、自校の実態や本テスト受検の目的を踏まえて、各校が選択することを想定しています。さらに、動画を活用した問題、英語 4 技能の測定など、様々な内容や形式の問題を設けることも考えています。そのため、本テストの実施方法は、今後十

図 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」を活用したPDCAサイクルの構築



*文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための研究開発事業」を基に編集部で作成

分な議論と試行が必要となりますが、CBTの導入を前提として検討を進めていきます。

「現在の学校のICT環境では、CBTの実施は難しい」といった声があることも知っています。ただ、

ICT技術の進展は非常に速く、数年後には学校内のICT環境が大きく進化することも考えられます。さらに、CBTの整備・構築には一定

の時間がかかりますから、今から検討を進めていきます。

もちろん、CB

Tでの実施にあたり、学校に過剰な負担をかけることは避けなければいけません。1学級分だけのパソコンを整備しているというのが多くの学校の現状ですから、実施当初は、USBなどを使用して行うといった環境に応じた実施方法や、紙ベースの実施を併用するなど、様々な方法を模索していきま

学びがどう社会で活用できるのかを実感できる問題に

出題の方向性としては、実生活に結びつく内容を取り入れていきたいと思えます。学習意欲の低い生徒の多くは、学習の意義をあまり理解できていないことがあると思います。ですから、今、授業で学んでいる内容が、自分が社会で働く時や親になった時にどう生きてくるのかについて気づけるような問題も取り入れ、学習の動機づけを図りたいと考えています。そのために、どのような問題を出題していくのかについては、今年度以降、さらに検討していきます。

また、実施方法も含めて、問題内容の検討に際しては、多様な関係者に協力してもらい、民間事業者の知見やノウハウも積極的に活用していきたいと考えています。

特に、英語については、4技能を測るための検定試験が民間に複数あります。CBTや面接方式など、手

法は異なりますが、実績を積まれた試験が少なくありません。それらの活用の仕方も含めて、今後の検討になります。安定性・継続性などの確保を前提に、民間事業者とも連携しながら実施方法を構築する方針です。

本テストは、国としては初めての試みであり、具体的な形がなかなか見えない中で議論を進めてきました。最終報告は出しましたが、多くの面でまだまだ検討が必要です。そのため、2016年度、「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための研究開発事業」で、本テストの導入を念頭に置いた基礎学力の定着に取り組む実践研究校(12校)での調査・研究と、本テストの実施手法の開発などを行います。

高校は、生徒が社会的に自立し、社会に参画する力を共通して身につけることができる最後の教育機関です。生徒が社会に羽ばたいていける力をつける仕組みの構築を、これからも検討していきます。

ハートを
こがせ!

Vol.08

島根県立松江北高校

高齢者向け英語教室

メンバーが支え合い 地域への思いを カタチにしていこう

「続けてみなさい」という
校長先生の一言に発奮

社会の諸問題の解決策を高校生が考え、発表する「国際高校生フォーラム」。その参加のため、学
校代表に立候補した2年生の5人は、3つの課題
を共有していた。1つめは地域の高齢化、2つめ
は国際文化観光都市・松江の魅力のさらなる発信、
3つめは自分たちの課題として、高校での学習と
社会との結びつきが実感しにくいことだった。そ
れらの課題の解決につながる具体策として考えた
のが、外国人に英語で観光案内ができるよう、地
域の高齢者に高校生が英語を教える英語教室だ。
「高齢者が意欲的に参加できる活動にして、地域
の活性化に結びつけるとともに、教える側の私た
ち高校生は、授業での学びが社会に役立つと実感
できる場になると考えました」(遠藤彩也音さん)
そうして、2015年7月に英語教室を開催。

その過程を8月の「国際高校生フォーラム」で発
表した。発表では「継続していききたい」と意気込
みを語ったが、地域の協力が不可欠な活動である
ため、実現への不安も大きくあった。そんな生徒
たちを後押ししたのが、泉雄二郎校長の「続けて
みなさい」という一言だった。
「私たちにだってできる。やってやろう!」と
いう気持ちになりました」(遠藤清也音さん)
**自分たちでゼロからつくるからこそ、
力を合わせて、必死に考えた**

早速、準備を開始した。年度末までに4回の英
語教室を計画し、うち最終回は実践編として、松
江市内の名所での模擬観光案内を実施することに
した。ただ、その具現化にいざ動き出すと、英語
教室の告知や教材作成、受講者への対応、観光案
内のルートづくりなど、やるべきことの多さに戸
惑ったと、リーダーの金井貴佳子さんは言う。

教師の思い

とことん任せることで
生徒は主体的になり
アイデアが湧いてくる



島根県立松江北高校
田中伸洋
たなか・のぶひろ

就職歴20年。同校に赴任して5年目。
進路指導部副部長。2学年主任。国語科。

生徒を信頼し、
どこまでできるかを見守った

地域の人々の参加があつてこそその活動で
したから不安もありましたが、「生徒だけ
の力でどこまでやれるか見てみよう」とい
う気持ちで、生徒を信頼して任せました。
万一の場合は教師がすぐ対応できるように
備えていましたが、ほとんど出番はありま
せんでした。

活動は、私の想定以上に中身の濃いもの
になりました。例えば、最後に実践の場と
して模擬観光案内をするのはよい案だと思
いましたが、受講者と一緒に名所を訪れて、
そこに外国人観光客がいなかったらどうす
るのかと心配していました。すると、その
ケースに気づいたのか、A.L.Tに協力を依
頼し、事前に外国人である彼らを観光客役

「それでも、できるだけ先生に頼らず、自分たちの力でやりきろうと必死で考えました。そうしたら、意外と前に進むことが分かったんです」

最初は衝突もあったと、角森匠己つのもりたくみさんは語る。

「誰かが突っ走ったら皆で止め、疑問は曖昧にせず話し合ううちに、互いの個性が分かってくる。他のメンバーの長所から学ぼうという気持ちで取り組み、課題を1つずつ解決していきました」
例えば、模擬観光案内の当日に名所に行っても、外国人観光客がいるとは限らない。そこで、同校のA L Tに相談し、県内のA L Tに協力を依頼。さらに各自が母校の中学校を訪れ、A L Tに直接協力を求めた。また、英語教室の運営は5人では対応しきれないため、E S Sの生徒に指導役をお願いしたり、受講者が来校した時の駐車場への誘導や応対をボランティアサークルに任せたり、ほ

かの生徒にも協力を積極的に依頼した。

そして迎えた模擬観光案内当日。参加してくれた受講者13人とA L T 10人が4、5人ずつのグループになって回った。終了後には、「生徒のフォロワーがあったので、外国人と楽しく話せた」「今後も続けてほしい」といった感想が多数寄せられた。

「自分たちにこんな大きな活動を実現できる力があるなんて、びっくり。教育に携わる仕事への思いが一層強まりました」(仲井慧悟けいごさん)

16年度は後輩にバトンタッチし、地域活性化の活動をより充実させたいという希望を持っている。

金井貴佳子

かない・たかこ

2年生。リーダーとして活動を引っ張った。メンバーをまとめる中で、大学では組織論を学びたいという思いを持つようになった。

仲井慧悟

なかい・けいご

2年生。活動の企画、教材作成などを担当。将来は教育関係の仕事に就きたいと考えている。

遠藤彩也音

えんどう・あやね

2年生。実務を担当。活動を通して強い達成感を得て、周囲の支えに感謝するとともに、挑戦することの大切さに気づいた。

遠藤清也音

えんどう・きよね

2年生。実務を担当。人前に出るのが苦手だったが、活動を機に、失敗を恐れずにチャレンジする気持ちが芽生えた。

角森匠己

つのもり・たくみ

2年生。実務を担当。意見を伝えることが苦手だったが、言わなければ始まらないと気づいた。将来の夢は、海外の過疎地に学校を建てること。

として集めたのには感心させられました。

**勇気を出して 一歩を踏み出せば
どんな世界は広がっていく**

最初は地域に出ていくことに不安な様子を見せていた生徒たちでしたが、一歩を踏み出したなら、世界がどんどん広がっていくことを実感したようです。そうした経験を通して、生徒たちの姿は随分変化したと感じます。人と話すのが苦手と言っていた生徒は、地域の人と接するうちに社交性やコミュニケーション力を高めていったようです。また、のんびりと考えるタイプの生徒が、常に先を読んで動くようになったことにも驚かされました。活動を通して自分の課題を自覚し、互いのよさから学び合う姿勢が成長につながったのだと思います。

島根県立松江北高校

◎教員伝習校変則中学校として始まり、2016年度に創立140周年を迎える。校訓は「質実剛健」。授業改革と地域課題解決型キャリア教育を通して、社会に貢献できる人材の育成に努めている。

◎設立 1876(明治9)年

◎形態 全日制/普通科・理数科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2016年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東京大、京都大、大阪大、鳥取大、島根大、島根県立大などに188人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ295人が合格。

◎URL <http://www.matsuekita.ed.jp>

授業を進化!

思考を深化!

9:50 授業開始



授業開始の前に、前川先生が各グループに水性マーカー、模造紙1枚、A4サイズの白色用紙数枚、そして授業プリントを配布。模造紙はポスター発表、白色用紙はKP法（紙芝居プレゼンテーション法）（*1）で使用する。学習の成果をどちらの手法で発表するかは、各グループが自由に選択できる。

実践 アクティブ・ラーニング

日本史

●2年生「日本史」の授業には、志望進路が異なる複数のコースから生徒が参加。この日は元禄文化をクロスアップし、「元禄期の文学」「儒学の興隆」「諸学問の発達」の3つのテーマ別にグループ活動を行い、最後に一人ひとりが「あなたが元禄の人なら、文化とどうかかわったか？」を考えた。（P.35に授業デザインを掲載）

仲間と普遍的な問いに向き合う中で 知の統合化を図り、 人間的な成長を実現する



福岡県・私立明光学園中学校・高校

前川修一 まえかわ・しゅういち

教職歴21年。

同校に赴任して13年目。進路指導部長。

高校では、日本史、倫理のほか、

学校設定科目の「キャンパスデザイン」（キャリア教育）を担当。

アクティブ・ラーニングの実践は2年目になる。

前川先生のアクティブ・ラーニング

細かな知識の収集よりも
「思考のひっかかり」を重視

2015年9月から日本史の授業でアクティブ・ラーニングを行うようになった前川先生。それまで、教師による説明中心の授業を受けてきた生徒たちからは当初、戸惑いの声も上がったという。だが、授業での教師からのインプットの時間が明らかに減ったにもかかわらず、模

福岡県・私立明光学園中学校・高校

◎「真実にして、叡智に富み、義務を重んぜよ」を校訓に、カトリックの精神に基づく全人教育を展開。地球的視野で物事を思考し、実行できる人材の育成を目指す。また、様々な国際交流プロジェクトを通して実践的な語学力を育む。

◎設立 1952（昭和27）年

◎形態 全日制／普通科（ソフィア、選抜英語、総合進学、総合音楽、総合美術の5コースを設置）／女子

◎生徒数 1学年約80人

◎2016年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、東京芸術大、九州大、佐賀大、大分大、名古屋市立大などに合格。私立大は、上智大、法政大、立教大、同志社大、立命館大などに合格。

◎URL <http://meiko-p-kit.com/>

*プロフィールは2016年3月時点のものです

*1 公益社団法人日本環境教育フォーラムの川嶋直氏が開発した思考整理とプレゼンテーションの手法

10:02 グループ活動



生徒が4、5人ずつ、合計3つのグループに分かれて、各グループが「元禄期の文学」「儒学の興隆」「諸学問の発達」の中から1テーマを担当してまとめる。前川先生は机間巡視しながら、「大枠をつかめばいいよ」「教科書の内容をそのまま写しても意味がないよ」と生徒に声をかける。

9:52 前時の振り返りと本時の問いの提示



前回の授業時に生徒が10文字以内で記述した「中学社会」の記憶に基づく「元禄の印象」を、前川先生が白色用紙に箇条書きし、それを黒板に貼りながら前時の振り返りを行った。その後、この日の授業での最終的な問いである「あなたが元禄の人なら、文化とどうかかわったか？」を生徒に提示。

試や校内テストの結果が悪化することではなく、むしろ記述式の問題に最後まで解答する生徒が増えるなど、思考に粘り強さが生まれていることを生徒も実感するようになっていった。

「授業での知識のインプットが減っても成績が落ちないのは、授業内で『思考のひっかかり』がたくさん生まれているからだと思います。例えば、今日の授業だけで『元禄文化が整理された』と言い切れる生徒はいないでしょう。しかし、授業の1シーンや誰かの言葉など、何か心に残ったものがあれば、後日、定期考査などの勉強で教科書やプリントに戻った時に、理解の進み方が違うのではないかと思います」

アクティブ・ラーニングを授業で行うようになったことで、生徒は授業の中でも、他者ともっと知的に、密接につながりたいと思っていることに、教師である自分自身が気づいたことも大きな成果だと前川先生は語る。

「どの生徒も学びたがっていますし、自分の考えを話したがついています。ただ、授業のスピードについていけなかったり、教師やほかの生徒の目を気にしたりして、思うように発言できなかっただけなのです。グループ活動に慣れた今では、生徒は自分と違うペース、観点で思考する人との協働作業を楽しんでいます。授業中の居眠りもありません。また、教壇に立つ私も、生徒同士がつながった学びを支援するというこれまでにはない喜びを味わえています」

仲間と、そして教師と 学び合いながら知を統合する

前川先生の授業では、「個別での知識の収集」よりも「集団での知識の統合」を重視している。この日も、前川先生による前回の授業の振り返りは、KP法を用いて簡潔に行われ、その分、グループでのまとめ、発表に多くの時間が割かれた。

「他者と話し合い、説明することで、知が統合され、自分の中に知識が定着します。だから、グループ活動にはしっかりと取り組ませたいのです。アクティブ・ラーニングで一番重要なことは、ともに学ぶ他者が存在することです。自分1人で分かったような気になるのではなく、誰かと相談したり、誰かに説明したりするなど、他者との関係の中で学びが成立することに大きな意味があります」

今回の授業では、グループごとに異なるテーマを深めていったため、個々の生徒が理解するのは、基本的には自分が所属するグループの担当テーマについてである。しかしながら、担当テーマをじっくり考察して歴史の捉え方をつかむことで、ほかのグループの発表を聞いた時に全体像が理解しやすくなり、後日、テスト勉強などで教科書やプリントに戻った時の全体理解が一気に深まると前川先生は説明する。

「ほかのグループの発表と併せて、発表に対

10:20 各グループの発表



各グループ最大3分で発表を行う。ポスター発表を選んだのは1グループ、KP法を選んだのは2グループ。グループの発表が終わる度に、前川先生は間違いがあれば指摘し、さらに、「なぜ、同じ儒学がこんなにいろいろな派に分かれたの?」などと、教科書には答えが載っていない質問を生徒にぶつけた。

10:15 グループ活動が佳境に



グループ活動開始から10分が過ぎた頃から、各グループでの発表準備が佳境を迎える。各グループは、「あ、ごめん!」「大丈夫、大丈夫!」「やばい!」「OK、いけるよ!」などと声をかけ合いながら作業を進める。前川先生は「細かいことは書かないでいいよ!」とさらに声をかける。

する私の質問を聞くことで、ほかのグループのまとめた内容が理解できたり、全体像に関心を持ったりするきっかけになります。教科書に書いてあることを確認するような質問ではなく、人間の営みを普遍的に考えるような問いを心がけています」

思考の活性化・深化への配慮

深く考えたくなる問いを投げかけ 短い言葉でまとめさせる

授業の成果として、「思考のひっかかり」をそれぞれの生徒が得られるように、前川先生は「10文字以内での記述」をしばしば生徒に求める。例えば、今回の授業の冒頭で行われた前回の授業の振り返りでは、元禄時代の印象を「娯楽が多い」「学問が発達」「文化の担い手が多彩」など、様々なキーワードで示したが、それらは全て、前回の授業後に生徒が提出した「リフレクションシート」の中から前川先生が抽出したものだ。

「10文字以内と区切るのには、だからだと考えさせたくないからです。10文字という制限があることで、本当に言いたいこと、大切なことを見抜けるようになります」

また、毎回の授業で提示する「問い」も、生徒の思考が深まるものであるよう、十分配慮する。今回の授業での「あなたが元禄の人なら、



実際に絵巻物を見ながら授業を行うこともある。「絵画資料は、生徒が考えたくなる問いを立てるのに便利」という前川先生。16年度は、絵画資料を生かしたアクティブ・ラーニングの研究を進めるといふ。

文化とどうかかわったか?」という問いも、「深く考えたくなるような漠然としたものであることが肝心」と前川先生は説明する。

「歴史的思考力を培うために必要なものは、現代的な視点です。だから、私は『自分だったかどうか』をよく生徒に問います」

場づくりへの配慮

グループ意識の徹底で 安心・安全な学びの場ができる

前川先生の授業で特に印象的なのは、グループ活動に取り組む生徒が盛んに声をかけ合うことだ。活動の終盤、発表に向けてまとめを行う

授業デザインシート

【教科・科目】日本史B
 【分野・単元】幕藩体制の展開
 【テーマ・作品】元禄文化

【設定時数】10 時間中の9 時間目
 【本時全体の目標】元禄文化の特徴をつかむ

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
授業の目的と目標	この授業の目的、及び目標を理解し、授業の達成点をどこに置いか確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 技能 主体性 	【教師】 この授業の目的、及び目標を理解できるよう、授業の達成点をどこに置いか分かりやすく提示する。 【生徒】 この授業の目的、及び目標を理解し、授業の達成点がどこか確認する。		短く端的に、分かりやすく提示する。
先週の問いとその答えを共有する	<ul style="list-style-type: none"> 振り返る力 オープンクエスチョンにより促される歴史的思考力 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 	【教師】 前時に考えたことを共有させ、元禄という時代を「自分事」として考えさせ、歴史的思考力を培う。 【生徒】 自分以外の生徒がどう考えたのか認識することにより、自分の考えをさらに深める。	前時の問いにみんながどう答えたか見てみよう。	本時の導入につながる点を共有する。
元禄文化の特色(講義)及び本日の問い	<ul style="list-style-type: none"> 傾聴することにより思考を整理する力 オープンクエスチョンにより促される歴史的思考力 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 	【教師】 KP法(紙芝居プレゼンテーション法)を用いて、元禄文化の特色について簡単に講義する。本日の問いを投げかける。 【生徒】 講義を傾聴し、疑問点を整理する。出された本日の問い(「あなたが元禄の人なら、文化とどうかかわったか?」)を考え始める。	あなたが元禄の人なら、文化とどうかかわったか?	KP法を用いて、文化全体の概観が次の作業につながるように心がける。
元禄文化の諸要素「文学」「儒学」「諸学問」について学ぶ①【エキスパート活動】	仲間と協力して知識を整理し、アウトプットに努め、課題を解決する力	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 主体性 多様性 協働性 	【教師】 グループ学習・発表のやり方を説明し、机間巡視とともに適宜介入して作業を促す。 【生徒】 4人グループをつくり、元禄時代の「文学」「儒学」「諸学問」についてまとめ、グループで発表の準備をする。発表の仕方については、ポスターまたはKP法(紙芝居プレゼンテーション法)のどちらかを選ぶ。	何を見てもよいです。時間内に終わらせよう。図式化大歓迎!	作業する人としなれない人に分かれないように、細かく分担させる。
元禄文化の諸要素「文学」「儒学」「諸学問」について学ぶ②【ポスターツアー(KPPT)】	仲間と協力して知識を整理し、課題に対する答えを表現する力	<ul style="list-style-type: none"> 表現力 主体性 多様性 協働性 	【生徒】 4人グループでポスターまたはKPPT(KP法によるポスターツアー)の方法で数分ずつ発表する。発表しないグループは傾聴し、適宜質問する。 【教師】 生徒からの質問が出ない場合は適宜、オープンクエスチョンによる質問を投げかけ、次時までに考えさせる。	なぜ、儒学は多くの学派に分かれたの?(などの質問を適宜ぶつけ思考を促す)	発表するグループと、聴く側のグループが学び合えるように質問を促し、思考がさらに深まるよう教師からも質問する。
確認テスト	<ul style="list-style-type: none"> 知識を整理し、定着する力 仲間と協力して、問題を解決する力 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 	【生徒】 <ul style="list-style-type: none"> まず個人で思考する。 分からなかったら仲間聞く。聞かれた生徒は自分の考えを説明する。 チームで満点を目指す。 	チームで満点を目指そう!	チームで満点を取れるよう促し、達成感を持たせる。
リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> 課題を考える力 全体を振り返り、整理する力 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 主体性 	【生徒】 <ul style="list-style-type: none"> 全体を振り返り、知識の定着を図る 次時への課題・関心につなげる 		「質より量」を意識させ、なるべく多くの言葉を記させる。

*前川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

時、あるグループでは、書き損じた生徒が「ごめん!」と口にする、ほかの生徒が次々に「いいよ!」「大丈夫!」と即座に返し、別のグループでは、「時間、まだあるよ」などと互いに励まし合う声が聞こえた。

「短時間でグループでまとめるためには、下書きをしていると間に合いませんから、どんどん書き進めていかないといいけません。最初は、なかなか手が動かさず、時間内にまとめられないグループもありました。しかし、グループで協力して1つのものを完成させるという意識が徹底してくると、作業がはかどるようになり、声かけも盛んになっていきました。授業では、自分の力だけでなく、みんなの力で問いに向き合えばよいのだと私が繰り返し説明することで、授業は生徒にとって安心・安全な場へと変容します。だからこそ、『ごめん』『大丈夫』といったやり取りが可能になり、いろいろな意見を認め合うことができるのです。そして、そういった場をつくらなければよりよい意見が得られないことも、生徒は体験的に理解しています」

教科の学びと社会で生きるための力の育成が並行していることが、アクティブ・ラーニングの魅力であると語る前川先生。

「アクティブ・ラーニングに取り組む前は、それが遠回りの指導のように思ったこともあり。しかし、生徒の肉体的な成長という意味では、一番の近道なのだと今は確信しています」



青森県立
田名部高校

進路指導

◎町立田名部女子実業補習学校として開校。2013年度から文部科学省「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」拠点校、14年度から青森県「進学力を高める高校支援事業」の指定を受けている。今年度、創立100周年を迎えた。スローガンは「未来へ放て、ラウエの光」。

設立	1917(大正6)年
形態	全日制・定時制／普通科・英語科／共学
生徒数	1学年約200人
2016年度入試合格実績(現役のみ)	国公立大は、北海道教育大、弘前大、岩手大、東北大、山形大、千葉大、電気通信大、青森公立大などに74人が合格。私立大は、青山学院大、東海大、立命館大などに延べ167人が合格。
住所	〒035-0054 青森県むつ市海老川町6-18
電話	0175-22-1184
Web Site	http://www.tanabu-h.asn.ed.jp/

高い志を育む面談と 若手教師の情熱で、 学校を活性化

変革のステップ

背景

◎生徒は真面目で素直だが、主体性に課題があった。また入試方式の適性を自覚せずに推薦・AO入試を利用する者が多かった

実践

◎ワークショップを開いて入試の適性を認識させるとともに、高い志を育む面談を徹底。英語指導力を担保する「TANABU Model」も確立

成果

◎一般入試で、最後まで頑張り抜く生徒が増加。2016年度入試では、5学級の体制以降、最高の国公立大学の合格実績を上げる

**少子化、医師・教師不足
下北の課題は青森県全体の課題**

下北半島北部のむつ市中心部に位置する青森県立田名部高校は、下北地方を代表する進学校の1つだ。地域の人口減少と少子化が急速に進んでおり、同校も現在は1学年5学級となった。学力層の幅は他地域の進学校に比べて広く、その中で次代の下北を担う人材を育成することが、同校の使命となっている。2016年度に赴任した三戸延聖校長はこう語る。

「下北地方は、人口の減少や少子高齢化、地元出身の医師や教師の不足など、青森県全体が抱える課題が端的に表れている地域です。下北を活性化することが、県全体の課題解決にもつながると認識しています。大学進学はその解決策の第一歩であり、下北を代表する進学校である本校の使命だと捉えています」

そうした課題を抱えながらも、16年度大学入試では、5学級となって以降、最高の国公立大学合格者数を出した。第1志望校にこだわりを持って後期日程まで頑張り抜いた生徒が多く、東北大学受験者数も過去最高を記録した。

チャレンジ精神と粘り強さで実績を残した生徒たちだが、入学当初からその姿勢が身につけていたわけではない。この学年以外にも言えることだが、教師の目から見るとむしろ消極的、受け身といった「線の細さ」が目立つ生徒たち

だった。同校出身で、15年度卒業生の学年主任を務めた堤孝先生は次のように振り返る。

「本校に赴任して驚いたのは、生徒がものすごく穏やかだったことです。素直でよい生徒ばかりですが、教師に与えられるのを待つ、受け身の姿勢に物足りなさを感じました。欲しいものは遠慮せず取りに行く意志の強さ、



青森県立田名部高校校長
三戸延聖 さんのへ・のぶまさ
教職歴30年。同校に赴任して1年目。
「人間万事塞翁が馬」



青森県立田名部高校
千葉栄美 ちば・えみ
教職歴27年。同校に赴任して1年目（通算12年目）。進路指導主事。Englishが忙しければ忙しいほど、状況が困難であればあるほど」



青森県立田名部高校
堤孝 つつみ・たかし
教職歴22年。同校に赴任して5年目。図書主任。「化石化しない」



青森県立田名部高校
武川真樹 たけかわ・まさき
教職歴19年。同校に赴任して5年目（通算11年目）。前進路指導主事。現1学年主任。「凡事徹底」



青森県立田名部高校
市川泰斗 いちかわ・たいじ
教職歴4年。同校に赴任して5年目。3学年担任。「授業を通して、数学の本当の面白さを伝えたい」

自分で道を開くたくましさを育てていきたいと思いました」

生徒のそうした気質が端的に表れていたのが、進路選択の場面だった。弘前大学・岩手大学の次に第3志望として東北大学を挙げる生徒や、「医療系希望」と言って看護師・理学療法士を挙げ、医師志望の気持ちを前面に出さない生徒がいたのだ。控えめな目標しか語らない生徒たちに高い目標を持たせ、隠れた力を引き出したいというのが、教師の共通の思いだった。

「推薦・AOワークショップ」で生徒自身に適性を自覚させる

主体的な進路選択のために15年度卒業生の学年団がこだわったのは、推薦・AO入試の指導だ。同校は例年、推薦・AO入試の利用者が多く、合格率も高い。ただ、志望理由書や小論文が苦手でも、保護者の勧めもあって推薦入試に挑戦、不合格となつて調子を落とし、一般入試でも第1志望校に届かないというケースが見られた。

そこで、推薦・AO入試への向き・不向きを生徒自身に見極めさせるために、2年生12月に希望者を対象とした「推薦・AOワークショップ」を実施した。事前に、志望校の志望理由書を書いて担任に提出し、進路資料室で過去問を見ておくように指導。当日は、志望大学・学部が近い3〜4人でグループをつくり、ワークシ

ップを行った(図)。志望理由書の作成、志望校の過去問題に則した小論文の作成、そしてグループごとの模擬面接を行う。志望理由書は、ほかの生徒からのコメントや模擬面接を通しての気づきを生かして書き直し、さらに小論文も完成させて、年明けまでに保護者の捺印をもらい、担任に提出する。

その一連の活動を通して、志望理由書の作成や面接が苦手なことに気づき、早めに一般入試の準備に切り替える生徒も出てきた。また、グループ活動にすることで、自分以外の生徒の姿勢を知ることにもねらいの1つだった。

「友人は真剣に進路を考えていて、自分の

図 「推薦・AOワークショップ」(志望理由書作成の進め方)

1 志望理由書の検討

3〜4人で1グループとなり、自分以外の生徒の志望理由書を熟読。最も優れた点1つと、質問事項2つをコメント記入用紙に記入してほかの生徒に回す。次の生徒は前の人と重複しないように質問を考える。用紙は、最終的に本人に渡され、質問に答える準備をする。

2 模擬面接

1人が受験生役、ほかの生徒は面接官役になり、模擬面接を行う。最初の質問は、「本学を志望した理由をお話してください」。その後は、志望理由書に対して深く突っ込んだ質問をする。受験生役の回答が理解できなければ、理解できるまで何度も質問する。

3 志望理由書の改善

ほかの生徒からのアドバイスを基に、自分の志望理由書の改善ポイントを記入する。

* 学校資料を基に編集部で作成

志望は安易だったということに気づき、志望校や入試方式について再検討する生徒がいたり、友人と切磋琢磨し、ともに合格を勝ち取った生徒もいました。生徒一人ひとりが自分自身で進むべき道を選んだことで、志望校への意欲を高く保つことができたと思います」(堤先生)

同校では、推薦入試合格者も必ずセンター試験を受験し、進学先の判定がD以下の場合、3学期の補習を必須にしている。1学年主任の武川真樹先生は言う。

「推薦入試で合格し、入学後に大学の学びについていけるのかと不安を抱える生徒もいます。そうした生徒ほど意欲的に補習に取り組みため、進学後のGPA(＊)が一般入試合格者より高い場合があります。大学で学ぶために必要な学力を生徒に身につけさせるのは、高校の責務です。生徒が胸を張って進学できるように後押ししていきます」

第1志望がE判定でも最後まで諦めさせない

15年度卒業生の学年団は、高い志を育む面談にもこだわった。安全な道を選ぶようにする生徒に対して、担任が「本当にそれでよいのか」と徹底的に問いかけたのだ。担任を受け持っていた市川泰斗先生はこう振り返る。

「ある先生は厳しく、ある先生は嘸んで含めるようにと、教師の個性が出ていましたが、生徒の思いを本気で受け止める姿勢は同じでした。生徒の心を揺さぶり、自分の選択は甘くないかと自問させ、『行ける大学』ではなく『行きたい大学』にこだわる意識を持たせるように努めました」

市川先生は、経済的な事情がなければ、模試の判定がよい大学は第1志望にさせない方針を貫いた。そのため、大半の生徒は第1志望がE判定だったが、センター試験まで志望校を維持させたことで、多くの生徒が最後まで頑張り抜いた。もちろん、判定のよい大学を第1志望にさせたいという保護者もいた。

「保護者への説明では、あくまでも生徒から自分の気持ちを伝えさせるようにしました。ある生徒は泣きながら『挑戦させてほしい』と保護者に思いを伝えました。センター試験の自己採点結果では合格が厳しい状況でしたが、保護者から『頑張ってきた姿を見てるので、浪人させてでもチャレンジさせてほしい』という言葉をいただいた時は、理解し合えたと思います」(市川先生)

その生徒は第1志望で見事合格を勝ち取ったという。進路指導主事の千葉栄美先生は語る。

「以前は、経済的な事情から国公立大学が無理ならば就職するという生徒も多く、私たちも確実に合格できる国公立大学を目指す指

導をしてきました。しかし、今は奨学金制度も充実しており、本人に意欲があれば挑戦できる条件がそろっています。本気の第1志望ならリスクを取ってでも挑戦させようという姿勢が、生徒・教師・保護者の間で共有できる学校になりつつあると感じます」

よいと思えば即実行、若手教師の情熱を生かす

若手教師が存分に力を発揮できる校内環境も、同校に躍進をもたらした要因の1つだ。同校は、新卒教師の最初の赴任校、あるいは若手教師の2番目の赴任校となることが多い。事実、同校の教師の平均年齢は35歳を切っている。

「若手教師は経験面でベテラン教師に劣ると思われがちですが、その若さこそが本校の強みです。若手教師のやる気や情熱をベテラン教師が受け止め、積極的にチャレンジさせています。そうした若手教師の情熱が生徒たちにも伝わったことが、生徒の意欲的な進路選択にも好影響を及ぼしたと感じています」(堤先生)

15年度、3年生の夏合宿を初めて実施したが、それは若手教師の発案だった。予算や人的配置の点で容易な取り組みではなかったが、進路指導部が積極的に動いて実現させた。また、若手教師を積極的に県内外の先進校視

* Grade Point Average の略。各科目の成績を数値化して算出する学生の単位あたりの成績評価値のこと。

察に赴かせ、ノウハウを吸収させている。持ち帰ったノウハウは職員会議で共有し、よいと思った取り組みはすぐ実行に移しているという。

「TANABU Model」で英語指導の質を担保

教科指導では、5年前から協働学習の研修を行い、アクティブ・ラーニングを国語、数学、英語で順次取り入れてきた。その牽引役の1つが英語だ。13年度に文部科学省「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」拠点校の指定を受け、教科指導力の向上、質の担保のための「持続可能なコミュニケーション英語の授業モデル…TANABU Model 2013」を構築した。

その特徴は、コミュニケーション活動の時間を確保するために、レッスンの内容に応じて時間に幅を持たせている点だ。2・4・10・15時間の4パターンがあり、例えば、2時間の授業では、1時間目に1レッスンの読解力診断テストを行い、その自己採点をした上で、後半1時間で語彙・表現の定着を図る。10時間の授業では、内容理解、語彙・表現の定着活動、音読、ディクテーションなどを行い、最後にストーリー・リプロダクションを実施する。15時間の授業では、最後にパフォーマンステスト（1年生はロールプレイ、2年生はディベート、3年生

はプレゼンテーション）を行う。

「各レッスンは同じワークシートを使って指導するため、初任の教師でもほぼ同じ形式の授業が可能です。生徒はコミュニケーション能力の向上はもちろん、英語に触れるとまず内容を捉えようとする姿勢が身につきました。ベテランの教師も『授業が進めやすくなった』と言っています」（堤先生）

「最初の1年間で、ある程度の成果が出たので、どの教科書にも『TANABU Model』が適用できるのかを確かめるために、14・15年度は教科書を変え、レッスンごとのワークシートをすべて作り直しました。16年

度の2年生では、1年生4月のスタディーサポートの英語の結果が過去5年間で最も低かったのですが、1月の進研模試は5年間で最もよい結果が出て、本モデルが持続可能なものであることを実証できました」（武川先生）

高い目標を持たせる指導、若手教師の活用などで実績を上げている田名部高校。今後の課題は増え続ける仕事量の精選だと、千葉先生は言う。

「先生方が生徒に一生懸命手をかけてきたことが今の実績に結びついています。手を離すべきところを見極めて、取り組みを精選することで、教師の多忙化を軽減する余地はあはずです。内容をさらに精査し、成果を出し続けるシステムを構築したいと思います」

情熱 若手教師が語る、指導変革への

提案が会議で受け入れられたことが自信につながった

3学年担任 市川泰斗

教師になって4年間、本校に勤務して感じるの、アイデアを即実行に移せる風通しのよさです。赴任した最初の年は、進路指導部の業務に慣れるのに必死で、会議でも新人はあまり発言しない方がよいと思い、自分らしい提案はできませんでした。

自分らしさを出せるようになったのは、初めて担任を持った2年目。学年主任を始め、ベテランの先生方に「もっと発言してよ」と言われたのがきっかけです。私自身、「総合的な学習の時間」や進路学習の進め方など、1年間の経験で課題に感じていたことがありました。それを会議で提案したところ、すぐに受け入れられたことが大きな自信になりました。

模試では、クラスの大半の生徒が第1志望でE判定でしたが、「それがあたり前で、諦めずに頑張る」という雰囲気を最後まで保てたのがよかったと思います。状況が厳しくても、私よりも強気な生徒が多く、逆に私の方が励まされました。

2016年度は、前年度に続き3年生の担任となりました。1年生から指導してきた生徒たちではないので、まずは現状把握から始め、これまでの指導の反省を踏まえて、様々な手を打ちたいと考えています。進路指導では、第1志望だけでなく、第2・3志望の大学についてももしっかり考えさせること、授業では、数学の本質まで深く理解させることを追求していきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2015年4月号指導変革の軌跡「大阪府立芥川高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



◎昭和女子商業学校として開校。建学の精神「明敏謙讓」を校訓として、「明朗にして健康で、自主性に富み、謙虚で個性豊かな人間」の育成を実践。文化系・運動系ともに全国レベルで活躍する部活動が多く、日本代表として世界大会に出場する選手も輩出している。

設立	1940(昭和15)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約400人
2016年度入試合格実績(現浪計)	<p>国公立大は、茨城大、宇都宮大、千葉大、千葉保健医療大に6人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、中央大、津田塾大、東京女子大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、立命館大などに延べ604人が合格。</p>
住所	〒272-0823 千葉県市川市東菅野2-17-1
電話	047-323-4171
Web Site	http://www.showa-gkn.ed.jp/js/

千葉県・私立
昭和学院中学校・高校

進学実績向上

英語の指導を軸に、 難関私立大学の 合格実績向上を図る

変革のステップ

背景

◎2003年度に女子校から共学校に移行したが、入学生の学力低下が目立つようになる

STEP 1

実践

◎中学校1年生から英語を軸とした学習指導と、高い志を持たせる進路指導を徹底。模試の結果を教師間で共有し、ぶれない指導を実現

STEP 2

成果

◎推薦入試に頼らず、一般入試に挑戦する生徒が増加。16年度入試でGMARCHの合格者数が過去最高に

STEP 3

共学化を機に、学習指導と
進路指導の課題が浮き彫りに

昭和学院中学校・高校は、千葉県市川市に位置する私立の共学校だ。水泳や新体操、バスケットボールなど全国レベルの部活動を擁し、オリンピック出場選手も輩出してきた。近年は、毎年2桁の難関大学合格者数を出し、文武両道の進学校としての評価を確立しつつある。

同校が、開校以来守り続けてきた女子教育から、共学教育に移行したのは2003年度のこと。女子校人気陰りから志願者数が減少し、1学年最大17学級だった学校規模は6学級にまで縮小していた。志願者数の確保が共学化の目的だったが、当初は学力の低い生徒が少なからずいた。そのため、生徒数を増やすと同時に、指導の質も高めていかなければならないという危機感が、教師間で共有されるまでに時間はかからなかった。

転機となったのは、共学化2年目の04年度。高校中心に指導してきた英語科の山崎直子先生が中学校1学年主任となり、特進クラスを中心に指導のてこ入れが図られた。

「女子校時代から特進クラスはありましたが、部活動の有力選手が多いこともあり、難関大学を目指すという意識は定着しませんでした。スポーツ推薦入試などで難関大学に合格することはあっても、継続的に実績を上げ

ることはできず、特進クラスの位置づけそのものを変える必要がありました」（山崎先生）

コミュニケーションタイプな英語指導で英語力と積極性を育む

04年度、学年主任として山崎先生が掲げた方針は「英語の強化」だった。

「中学校1学年主任、特進クラスの担任として何ができるのかを考えた時、まずは自分の担当教科である英語の学力を上げようと考



山崎直子

やまざき・なおこ

昭和学院中学校・高校
教職歴32年。同校に赴任して33年目。進路指導部長。[Where there's a will, there's a way. 高い志に向かって諦めず努力を続けること]



倉田透

くらた・とる

昭和学院中学校・高校
教職歴23年。同校に赴任して24年目。進路指導部副部長。高校3学年主任。「生徒一人ひとりの意欲を引き出し、応えていきたい」



大橋和也

おおはし・かずや

昭和学院中学校・高校
教職歴23年。同校に赴任して24年目。教務副部長。「情熱ある教師として生徒に接し、最後まで諦めない心を持たせたい」



三浦陽祐

みべ・ようすけ

昭和学院中学校・高校
教職歴11年。同校に赴任して12年目。進路指導部副部長。中学校1学年主任。「生徒の可能性を信じ、目標を持って行動できるよう後押しする」

えました。英語は入試の軸となる教科ですし、英語ができれば首都圏の難関私立大学合格への足がかりになります。まずは、英語力を伸ばして、その勢いを他教科に波及させようとしたのです」（山崎先生）

中学校1年生から文法を徹底的に指導し、長文の内容把握や文構造の理解などの力をつけさせた。山崎先生の授業では、単に英文を和訳させるのではなく、「下線部の文章について、なぜ筆者はそう考えたのか」というように、より深く、論理的な文章読解を心がけた。

基礎・基本の徹底と同時に、生徒の主体性や興味・関心を高めるためのコミュニケーション型な授業にもこだわった。英語が好きでなければ学力は伸びないという信念の下、音読やペアワークなど、アウトプットの時間を多く取り、英語を使う楽しさや喜びを味わわせるようにした。

コミュニケーションな授業では、実際のコミュニケーションの場面でも生徒が物怖じしない姿勢を養うこともねらいとしていた。

「厳しい入試を乗り越えるためには、自分から先生に弱点克服の方法を質問したり、課題を求めたりする能動性が必要です。積極的に英語を使うことで、自分の思いを伝え、望むことを実現するための主体性やコミュニケーション能力を鍛えたいと考えました。アイスやノーだけでもいい。授業ではとにかく英語を使い、自分の考えを相手に伝える意識を

持たせるようにしました」（山崎先生）

GTECで4技能をスコアで示し、学習成果を実感させる

英語の成績が上がるにつれて、「努力すれば学力はつく」という自信が生徒の中に芽生え、他教科の学習にも好影響をもたらした。その結果、10年度入試ではGMARCH（*）の合格者数が初めて20人を超え、最難関の私立大学合格者数も合計9人と躍進を遂げた。以降、同校では難関大学の合格者数を毎年2桁出すようになった。実績が上がるにつれて、より学力の高い生徒が入学するようになり、1クラスだった特進クラスは、14年度には3クラス体制とした。より実践的な英語力が求められるようになった。ここ数年は、英語力を測るアセスメントに、GTEC for STUDENTS（以下、GTEC）を活用している。4年前から毎年受験させ、16年度は特進クラスの受験回数を年1回から2回に増やした。4技能ごとの力をスコアで把握でき、継続して受験することで英語力の伸びも実感できるため、生徒のGTEC受験への意欲は高いという。また、英語の外部検定試験のスコアを、入試に活用する大学が増えていることを踏まえ、進路指導に変化が表れているという。

「GTECでのこのスコアは、A大学B学部の入試で〇点取ったのと同じだよ」という

*学習院大学、明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学のこと。頭文字を取ってGMARCH。

ように、普段から生徒に声をかけています。生徒も入試とGTECの関連を意識するようになってきました。英語が得意な生徒にとつてはセンター試験よりもチャンスは大きいはず。今後、GTECのさらなる活用を検討していきたいと思います」(山崎先生)

「フレッシュマンキャンプ」で 前向きな進路意識に転換

低学年時からの進路意識の醸成も、共学化2期生の躍進で確立されたノウハウの1つだ。以前は、生徒の志望校の合格可能性を検討し、学力との差がある場合には個別指導を行っていた。進路指導部副部長の倉田透先生はこう語る。

「共学化2期生は、低学年時からGMARCH合格を目標にしてきた学年です。生徒も『これだけ勉強しているのだから志望大学に入りたい、入れるかもしれない』という意識が高かったと思います。低学年時から明確な進路意識を持たせ、その目標に向けてしっかり勉強させれば、GMARCH以上も十分ねらえるという認識を教師が共有できたという意味でも、ターニングポイントになりました」
また、少なからずいる公立高校の併願校として入学した生徒に対しても、入学時から高い進路意識を持たせ、その志を持続させることを重視した。山崎先生はこう説明する。

「頑張つて成績を上げて、いざ入試になると、弱音を吐く生徒もいます。なかなか自信を持ってない生徒に、新たな一歩を踏み出そうとする意欲と、大学入試で志望を実現させるという決意を持たせることが必要でした」

高校1年生の4月に行う「フレッシュマンキャンプ」では、講話やレクリエーション、校歌斉唱などを通して、高校生としてあるべき姿や昭和学院生としての自覚を持たせ、クラスの団結力を育む。山崎先生が行う進路講話は、特進クラスとそれ以外の総合進学クラスで時間を分け、特進クラスの生徒には、先輩たちが頑張る様子とその実績を伝えて、自分たちにもできるのだという思いを抱かせ、「GMARCH以上の合格を目指す」という意識を浸透させる。総合進学クラスの生徒には、日常の授業や予習・復習の大切さを説くという。

教師のぶれない気持ち 生徒の意志を強くする

一般入試に挑戦させるといっても、共学化2期生以来の特進クラスの不文律だ。3年生も半ばを過ぎ、推薦入試やAO入試の合格者が出始めると、特進クラスの生徒から推薦入試を受けたいという者が出てくる。また、保護者がそれを望む場合も少なくない。教務副部長の大橋和也先生は次のように述べる。

「難易度の低い志望校に変えてその大学の推薦入試を受けたいという生徒に対しては、教師が一枚岩となって説得します。努力して積み上げてきた学力があるのだから、そのまましっかり学習して一般入試に挑戦した方が可能性は広がることを、担任だけでなく教科の先生方からも話してもらい、生徒が自信を持って一般入試に向かえるように鼓舞しています」
生徒の気持ちを引き締める上で重要なのは、教師自身がぶれないことだと、倉田先生は語る。

『『今の努力を続けていれば絶対に大丈夫』と太鼓判を押してあげれば、生徒は必ずついて来てくれます。内心は不安だとしても、教師が授業や補習などで熱心に指導すれば、たとえ不合格だったとしても、生徒は力を出し尽くしたと納得して、最終的に自分が選んだ大学に進んでいきます』

ここ数年、特進クラスの生徒が指定校推薦入試を希望することはなくなった。1年生から高い志望を持って頑張ってきたという自負と、一般入試で合格できるという確信を持っているからだ。みんなが高みを目指す「団体戦」の意識が、生徒一人ひとりの気持ちを強くしている。

模試のデータを共有し どの教師も同じ目線でアドバイス

進路意識の向上のために、模試が果たす役割

図 FINE SYSTEM の度数分布・科目間の表

コース・科目	5-6文系		5-7理系		国英英総合		国英理文系		数英理理系		国語計		数学計		英語計		地理・公民計		理科計	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差
受験人数	91	53	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43	91	43
学内点	402.9	419.0	281.0	283.6	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7	275.7
標準偏差	87.8	89.9	89.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8	87.5	84.8
平均点(偏差値)	48.2	46.7	47.5	51.8	48.4	49.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2
偏差値(人数)	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900	900

進路模試の結果を詳細に分析し、教師の指導改善に生かすとともに、生徒への具体的なアドバイスにも結びつけている。
*学校資料を基に編集部で作成した画面見本

も大きい。模試の前には必ず過去問題を解かせ、各教科の授業で2、3時間かけて解説する。試験は全て万全の対策をしてから臨むものであり、その集大成として大学入試があると、生徒と教師との間で意識が統一されている。

模試の後には、各学年の模試担当の教師が、FINE SYSTEM(*1)を使って各教科・学級の成績、GTZ(*2)の一覧表を作成し、教科会や学年会議で共有する。成績が芳しくなかった教科や学級があれば、教科担任や学級担任に対策を求め、正答率の低かった分野・単元は、教科担任が授業や補習で事後指導をする。

生徒との面談では、FINE SYSTEM

若手教師が語る、指導変革への情熱

チャレンジすることの大切さを伝えていきたい

進路指導部副部長 三部陽祐

本校では11年間、高校での指導を受け持っていましたが、今年初めて中学校の配属となり、中学校1学年主任と学級担任、進路指導部副部長を務めることになりました。これまで高校の担任として1~3年生を持ち上がりで2度、卒業生を送り出しました。高校での経験を踏まえ、中学校1年生から6年間を見据えた指導を展開していくことが、私の役目です。

本校の生徒は素直で、言われたことにはしっかり取り組みますが、それ以上のことはしない受け身な姿勢が課題です。また、失敗を恐れ、自分ができる以上のことをしたがる傾向もあります。しかし、それでは、生徒は、まだ気づいていない自分の能力に気づいたり、人間性を広げたりすることはできません。そこで、学年の目標に「挑戦」を掲げました。自分の枠から飛び出す勇気を与え、チャレンジして失敗するのはあたり前で、失敗から学ぶという姿勢そのものが大切なのだという意識を浸透させていきたいと考えています。

科学技術の発展やグローバル化がますます進むこれからの社会では、他者とコミュニケーションを取りながら既知の事柄を組み合わせて新しいものを創造する力、異なる背景を持つ人とも協働できる力などが求められます。失敗を生かして自分を高め、未知の領域に踏み出していけるような経験を生徒たちにたくさん積ませ、新しい時代を生き抜く力を養いたいと思っています。

のデータを見せながら、「あと〇点取れていればAゾーンになった」「この問題が解けていれば達成できた」など、具体的にアドバイスする。データの共有によって教師間の目線がそろい、どの教師も同じ内容の助言になるため、生徒は安心して学習できるようになったという。進路指導部副部長の三部陽祐先生はこう話す。

「教師がただ頑張れと言っても、生徒は何をどう頑張ればよいのか分かりません。どこを改善すればよいのか、データを基に解説することで、生徒は解決の具体的な道筋を描くことができます。今は教師がアドバイスをしています。今後は、生徒自身が模試の分析表を参考にして、対策を考えるような自主性を

を養いたいと考えています」

16年5月には「Classi」(*3)を導入し、模試の結果から部活動や課外活動まで、学校生活全般の生徒把握の徹底を進めている。

共学化2期生が卒業してから6年。大橋先生が学年主任を務めた15年度卒業生からは、過去最高の67人のGMARCH合格者を出した。今後は、国公立大学の進学実績向上が課題となる。

「国公立大学志望者があまり多くないため、個別に対応している状況です。カリキュラムの改編も視野に入れながら、5教科7科目に対応できる指導ノウハウを蓄積し、生徒の幅広い進路希望に対応できる体制を整えていきたいと考えています」(山崎先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2013年10月号指導変革の軌跡「石川県・私立北陸学院中学・高校」など
▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

ビフォー
アフター

3年生夏休み

志望校別過去問研究

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、3年生2学期からの入試対策を集団の力を生かしてより充実させるための「志望校別過去問研究会(報告用紙)」について検討する。

検討会メンバー



群馬県立太田高校
新井高広
あらい・たかひろ



群馬県立高志高校
西 繁寿
にし・しげひさ



群馬県立北条高校
衣川 顕子
きぬがわ・あきこ

教職歴25年。同校に赴任して8年目。進路指導部。「正しい道を選ぶのではなく、選んだ道を正しく生きる生徒になってほしい」

教職歴23年。同校に赴任して3年目。進路指導部。3学年担任。「1日1日を生徒と本気で歩んでいきたい」

教職歴28年。同校に赴任して4年目。人間創造コース長。1学年副主任。「生徒のやる気を起こさせる着火剤を目指す燃焼系教師でありたい」

群馬県立太田高校 新井高広先生 「志望校別過去問研究会(報告用紙)」

志望校別過去問研究会(報告用紙)

3年 組 番 氏名

◎志望校

志望順位	大学	学部・学科
第1志望		
第2志望		

◎グループの構成(班長に◎、副班長に○)

出席番号	氏名	出席番号	氏名

◎第1回研究会(月 日～月 日)

大学	学部学科(複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	

◎第2回研究会(月 日～月 日)

大学	学部学科(複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	

◎第3回研究会(月 日～月 日)

大学	学部学科(複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	

ビフォー

過去問題の中からグループで研究できそうなものを生徒が選び、記録を残す。

1週間程度で各自が過去問題を解き、それぞれの解答を持ち寄って、最良の解答を検討し、グループの解答として清書する。

模範解答を見て、グループで採点し、完成答案とともに担当の教師に提出する。この活動は、基本的に生徒の自主性に任されている。

ねらいと機能

同じ目標に向かって
グループ内で切磋琢磨させる

群馬県立太田高校は、2年生12月から実施する志望校勉強会で入試科目などを調べさせ、3年生9月からの志望校別過去問研究会では、実際の過去問題をグループ研究させている。受験勉強が本格化する3年生2学期、同じ大学(あるいは大学群)を目指す仲間と過去問研究会を通して切磋琢磨させることで、入試本番まで頑張れる集団づくりを目指している。だが、同校の過去問研究会は基本的には生徒の自主的な集まりであり、また、受験勉強の進み具合において個人差が出る時期でもあるため、全てのグループが活動を継続するわけではないのが実情だ。過去にはグループ学習の継続が難関大合格者の増加の一因と推察される年度もあったため、よりよい形でその取り組みを発展させたいと考えている。

検討

グループ学習を通して個々の 自力走行のきっかけをつくりたい



新井 志望校別過去問研究会は、グループで同じ過去問題を解くこ

とで、答えに至るまでには様々なアプローチがあることを学ぶ貴重な機会になっています。生徒同士が学び合うことで、個別試験の指導における教師の負担の軽減にもつながります。同じ目標を持つ仲間が存在は、一人ひとりの志望校へのモチベーションを入試本番まで高め続けられますから、この時期からのグループ化はとても重要なことです。



衣川 勉強に対する前向きな姿勢を、仲間と共有できることは素晴らしいと思います。本校では昨年度、推薦入試を希望する生徒が、自主的にグループをつくって面接の練習をしていました。「もっと練習が必要

な気がするし、友だち同士だとまた違った角度からチェックできる」という理由で始めたのです。自主的に学ぶ生徒を見ながら、「これをもっ



西 自分のペースで学習する方が合っている生徒もいるので、グループに縛られすぎないようにする配慮は欠かせませんが、一人ひとりの生徒が、自分にとって適切な頻度で仲間と学び合い、成長できるグループ学習ができればよいと思います。

新井 生徒が自主的に集まって学び続けるためには、活動の様子を教師が把握しておくことが必要ですね。また、時期についても9月より前に始めてもよいと思うのですが、1学期中は部活動の関係で足並みがそろいにくいのです。

西 本校では今年度、夏休み中の課外講習の時間を減らそうという計画があります。主に午後の時間を、生徒たちによる自主的な学習に充てようと考えています。生徒に任せる部分と、教師がしっかりサポートするところを明確にした上での試みです。

課題と解決策

- 1 グループ学習でのメリットを生徒が実感できるように仕組みをつくる。
- 2 グループ学習でどんなことに取り組んでいるのか、教師が活動の様子を把握できるようにする。
- 3 9月以降の自力走行のきっかけとなるように、夏休みの講習期間を活用してグループ学習を行う。

衣川 夏休み中のグループ学習を、生徒たちによる自主的なものに行えば、9月からの個々の学習に勢いが生まれそうです。秋以降、私たちは個別指導にかける時間が多くなるからこそ、**教師の目が離れた時にも生徒が学び合える集団**づくりが重要です。受験本番に向けて、教師が個別指導に力を入れるほど、生徒が受け身になるような気がしていました。「教師である自分が教えなければ」といった考えにとらわれず、生徒の自力走行のスイッチを入れたいです。

新井 **自力走行のきっかけを夏休みにつくり、学習の様子を把握しながらも、学習は生徒に任せられるよう、**少しづつ生徒の手を離していくような仕組みをつくりたいですね。

学校プロフィール

群馬県立太田高校

◎全日制／普通科／男子校／1学年約2800人
◎2016年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、北海道大、東北大、群馬大、東京大、京都大などに136人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、早稲田大などに延べ494人が合格。

福井県立高志高校

◎全日制／普通科／理数科／共学／1学年約3500人
◎2016年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、金沢大、福井大、名古屋大、大阪大、神戸大などに230人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ376人が合格。

兵庫県立北条高校

◎全日制／普通科・人間創造コース／共学／1学年約1600人
◎2016年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、和歌山大、鳥取大、岡山大、徳島大、高知大などに26人が合格。私立大は、同志社大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大などに延べ173人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ「志望校別過去問研究会（報告用紙）」を改良！次ページで紹介します。

アフター

志望校別過去問研究会（報告用紙）

3年 組 番 氏名 _____

■グループの構成（班長に◎、副班長に○）

出席番号	氏名	出席番号	氏名

■第1回研究会（月 日 ～ 月 日）

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

■第2回研究会（月 日 ～ 月 日）

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

■第3回研究会（月 日 ～ 月 日）

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

■第4回

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

毎回のグループ学習で気づいたことを記入する。ここでは新井先生のアイデアを生かして、グループ学習を通して気がついた「今の自分のこと」「グループの仲間のこと」を書かせるようにした。また、衣川先生のアイデアのように「この問題で、自分はここまでできた」ということを書かせてもよいだろう。学校や生徒の特性に応じて、グループ学習で気づかせたいことを簡潔に書かせるようにする。

■志望校

志望順位	大学	学部・学科
第1志望		
第2志望		

■第5回研究会（月 日 ～ 月 日）

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

■第6回研究会（月 日 ～ 月 日）

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

■第7回研究会（月 日 ～ 月 日）

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

■第8回研究会（月 日 ～ 月 日）

大学	学部・学科 (複数記入可能)			
年度	教科	科目	問題番号	分野
			第 問	
グループ学習で気づいたこと（自分のこと）		グループ学習で気づいたこと（仲間のこと）		

夏休みのグループ学習を通じて気づいたこと（自分のこと）
9月以降の決意

夏休みのグループ学習が終わったら、グループ学習を通じて気がついたこと、9月からの学習の決意などを書かせる。担任が目を通して、2学期以降の面談時の資料とすることも可能だ。

改訂後のねらいと機能

他者と比較し、自分の課題を浮かび上がらせる

夏休みの講習期間中、毎日1コマを生徒のグループ学習に充てることを想定し、グループ学習を通して気づいたことを個人が日々記入していくシートに改訂した。全ての研究会の振り返りを1枚のシートにまとめることで、グループ学習での気づきを一目で俯瞰できるようにした。各グループ学習についての記入スペースは決して大きくはないが、それは記入そのものに時間をかけさせたくないという配慮からである。

また、これまでは、どの過去問題を研究するかは各グループの判断に委ねていたが、生徒の議論が深まりそうな問題や、別解を示すことのできる議論が行える問題を教師が示すことも考えられるという提案も出された。

そして、9月以降の学習につながるよう、夏休みの講習期間が終わったタイミングで、グループ学習を通して分かった自分の弱点、課題を踏まえて、9月以降の学習についての決意表明を記入させるスペースを最後に設けた。



ビフォー アフター

活用

個人の学びの課題を把握させ、グループでの学びに納得感を持たせる



新井 学び合いでは、問題が解けた人と解けなかった人とがはっきりと分かれたり、解答のアプローチが大きく異なったりした時が、自分を見直すチャンスになります。自分

ができなかった問題をほかの人ができたのは、発想法が違うのか、それとも勉強法が違うのか、気づいたことを箇条書きさせたいですね。実際に問題を解く時間が一番大切なので、記入に多くの時間を割かせたくはありませんが、書かせることで本人の気づきを素通りさせないシートにしたいです。



西 夏休みのグループ学習を通して、グループだからできたこと、つまり今の自分に足りていないことを理解させたいです。そして、9月

からの学習への決意表明を最後にまとめさせると、秋以降の個人面談の資料としても活用できそうです。それに加えて、各グループで「みんな



衣川 できなかったこと、できるようになり

たいことだけでなく、現時点でできていることにも目を向けさせたいです。特に、学習面で自信を持ってない生徒が多い

学校ほど、ここまでは粘られた、ここが前よりも分かるようになったといったことも書かせて、教師がしっかり評価してあげることが大切です。最近鉛筆で書くのは苦手だけれど、パソコンやスマートフォンを使えば自分の思いを比較的伝えられる生徒も少なくありま

の力で解いてみたい問題「グループのメンバーが課題と感じている分野や単元」を教師へのリクエストシートとしてまとめさせてもよいでしょう。そうすれば、教師が夏休みの講習や9月からの授業で優先して取り扱うべき分野や単元が見えてきます。



活用の流れ

1 志望校別グループで選んだ(または教師が選んだ)問題を各自で解いた上で、グループで解答を検討する。

2 グループで検討した時に気づいたこと(今回のグループ学習でできたこと、できなかったこと・課題)をキーワードレベルで書かせる。

3 全ての活動が終了後、9月以降どう学習していくかなど決意表明をさせる。

せん。そうした生徒の思いを、紙にこだわらずICTを活用してつかむことも、今後は取り組んでいくべき時代になっているかもしれません。

西 グループ学習の時間は、少なくともいいと思います。もともと一緒に勉強したいと思う生徒は残ればいいし、今日はここにいる必要はないと判断した生徒は帰ればいい。そうした中でグループでの学びに納得感を得られるようになれば、生徒は自主的に継続して集まるようになるでしょう。9月以降、模試の結果がより重視される時期に、問題を持ち寄って自主的に勉強するグループが校内に出てくると、ほかの生徒の心

にも火をつけることができます。それが理想ですよね。

衣川 本校でも定期考査の時に生徒が自主的に集まって、勉強が得意な生徒が苦手な生徒のために授業をすることがあります。学びに向かうのが苦しくて逃げ出しそうになった仲間を助け合う人間関係は、生徒の学力にかかわらず、どの学校でも実現できると信じています。

新井 支え合う関係を築きながら、9月からの自分に合った学習スタイルを一人ひとりが見つけることができるよう、今日の検討結果を生かして、8月、9月の指導を校内で考えていきたいと思います。

1年次での体験型学習を充実させ、 4年間を主体的に過ごす ための気づきを促す

明治大学経営学部 ● 体験型学習の拡充

「グローバル経営人材」と「事業創造人材」の育成に力を注ぐ明治大学経営学部では、その実現に向け、知識・技能の習得だけでなく、体験も重視した教育にシフトしつつある。1年次の段階で、英語力に関係なく参加できる海外でのフィールドワークや、企業人が「上司」として「部下」の学生に課題を出す産学協同の講座などを、正課として設けている。そこでの体験も、グループでの協働学習としたり、事前学習や事後報告会を必ず組み入れたりするなど、学生が様々な気づきを得て、その後の学習行動に結びつけられるように工夫している。

知識注入型から体験重視の教育にシフト



明治大学経営学部教授
鈴木正敏 すずい・まさとし
教務主任。筑波大学大学院修士課程体育学研究科修了。博士(医学)。

明治大学の「世界へ！ MEIJI 8000」は、2014年度、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援(タイプB)」に採択された。学生の主体的学びを育み、未来開拓力に優れた人材を育成」を目標に掲げ、全学で特色ある教育活動を推進している。そうした中、経営学部では、「グローバルレベルでビジネスを創造・推進する経営人材の育成」を学部の目標に掲げ、「グローバル経営人材」と「事業創造人材」の育成に力を注ぐ。経営学部教務主任の鈴木正敏教授は、次のように説明する。

「今や大企業であっても、方向性を読み誤ると倒産してしまう時代です。ゼネラルモーターズやリーマン・ブラザーズがそうですし、最近では東芝やシャープが経営危機に立たされました。先の読みにくい社会の中で、経営リーダーとして未来に向かってかじ取りのできる人材の育成を、本学部では目指しています」

具体的に育成すべき力に挙げているのは、自分で課題を解決できる力、

ツールとして使える英語力、未来を読み解く力とそれに必要な経営の基礎知識及び会計能力、そして、情報をコントロールできるICTリテラシーなどだ。それらの育成に向け、ここ数年、体験型学習を充実させている。「これまでの大学教育は、『知識を与える場』としての役割が中心でしたが、本学部では、それに加えて、学生が体験できる機会を充実させ、『体験重視の教育』に転換しつつあります。語学や会計などの力は学習を積み上げることで獲得できますが、先を読み、進むべき方向を決める力は、知識の習得だけで身につくものではありません。答えが1つではない課題について深く考えたり、失敗した経験の中から次に何をすればよいかを考えたり、そうした経験を積み重ねていく中でも磨いていくことが重要だと考えています」(鈴木教授)

英語力に応じた海外体験を1年次から用意

同学部が行う体験型学習の特徴の1つは、経営にかかわる内容としながらも、学生の英語力に応じた海外体験の場を、卒業単位に認定される正課に1年次から組み込んでいることだ(図1)。

まず、英語力に関係なく、1年次から履修できるのが、「フィールドスタディ」だ。調査や資料収集、調査対象への提言とフィールドバックなど、一連の作業を学生が主体的に進める科目で、フィールドは国内だけではなく、インドネシアや中国、ロシアなどもある。

1年次から履修できる科目には、「グローバル・サービスマーケティング」もある。フィリピンのセブ島を訪れ、現地の貧困問題について解決策を探るための社会貢献活動などを行うもので、15年度に新設した。

これらの科目はフィールドワークが主目的であり、学生は内容への興味から参加することが多い。しかし、そこで刺激を受けて、海外に目を向けるようになり、英語学習に力を入

れるようになることも多いという。

「フィールドスタディ」や「グローバル・サービスマーケティング」、短期語学留学の「IBP Plus」を入り口にして海外への関心を高めます。次に、ビジネスを英語で学ぶ海外研修の「ISIBM」を受

講して、語学力も意欲も徐々にステップアップし、最終的には長期留学に挑戦することを想定してカリキュラムを組んでいます(鈴木教授)

それらの体験型学習では、授業の一環として必ず事前学習と事後報告会を行う。

「体験はそれ自体にも価値がありますが、事前に学びの目的をしっかりと持たせてから体験させます。

そして、何を学んだのかという振り返りを行い、学びがさらに深まるようにしています(鈴木教授)

一方、英語力の高い学生向けのプログラムとして「GREAT」を15年度から始めた。これは、少人数制クラスで実践的な英語スキル(4技能)を身につけながら、英語で専門知識を学ぶという4年間のカリキュラムだ。入学時に実施するTOEIC Cのスコア上位60人を対象とし、該当者のほぼ全員が履修している。

「長期留学や国際的なビジネス環境で活躍することを視野に入れ、アカデミック・ライティングや多様なビジネス状況に対応できる英語科目、英語による専門科目で構成しています。通常よりも英語の授業数が多く、課題もレベルが高いのですが、英語力が高い学生にも満足できるように内容となっています(鈴木教授)

図1 実習・調査などを行う科目・講座例

科目・講座名	内容	開講時期・参加条件等
フィールドスタディ	フィールドワークを通じて、資料収集、それに基づくレポート作成、プレゼンテーションを中心とした実習科目。2016年度の実習先は、インド、インドネシア、オランダ、シンガポール、中国、ロシア、日本各地。	1~4年次の選択科目
グローバル・サービスマーケティング	夏休みまたは春休みの約2週間、フィリピン・セブ島の貧困層におけるボランティア活動を通じて、社会課題の解決に取り組む。事前・事後学習も行う。	TOEIC400点以上
IBP Plus (International Business Program Plus)	アメリカのポートランド州立大学またはサンノゼ州立大学に約1か月間、ホームステイをしながら通い、英語研修を行う。ビジネスの授業や現地企業訪問などもある。	TOEIC400点以上
ISIBM (International Summer Institute for Business Management)	経営学部協定校のカナダ・ヴィクトリア大学で行われる3週間のビジネスマネジメントプログラム。ビジネスに特化した実践的な英語、グループまたは個人によるビジネスプランの策定・発表などを、世界各国から参加する学生と一緒に学ぶ。	TOEIC600点以上
学部間協定留学	経営学部が独自に協定を結ぶ海外の大学への留学。派遣先大学で修得した単位は、明治大学の単位として認定される。	派遣先により異なる
GREAT (Global Resources English Applied Track)	特別編成の少人数クラスで、英語で講義を受けるためのリスニングやノートテイキングのスキル、ビジネス環境における英語による表現力や交渉力などを学ぶとともに、英語による授業科目で専門知識を学ぶ。1~4年生の4年間のカリキュラム。	入学時に実施するTOEICのスコア上位60人
経営総合講義 A (産学協同就業力養成講座)	企業が出す課題に対して、少人数のチームでデータや資料を集め、アイデアを練り、解決策を企業に提案する。	1年次前期の選択科目
キャリア形成入門	企業や非営利組織に所属する講師によるオムニバス形式の講義で、企業や非営利組織への理解を深め、仕事やキャリアについて考える。グループワークやビジネスマナー研修なども行う。	1・2年次の選択科目
インターンシップ実習	夏休みに原則2週間、企業や非営利組織、行政の受け入れ機関で、正社員と同様の仕事を体験する。事前学習や事後報告会も行われる。	2・3年次の選択科目

*同大学の資料を基に編集部で作成

1年次から企業の課題にチームで取り組む

もう1点、同学部の体験型学習の特徴として挙げておきたいのは、1年次の段階で、実際の企業課題に対し、その解決策を自分で考えて、具体化する実習も取り入れていることだ。先に挙げた「フィールドスタディ」などがそれに該当するが、最も特色のある科目が、FSP講座（*1）を採用した「経営総合講義A」だ。これは、1年次前期の選択科目で、企業から出された課題に対して、学生6人のチームで調査・検討をして解決策のアイデアをまとめ、企業に提案するという授業だ（図2）。

担当教員の石川公彦助教はこう語る。

「教員はファシリテーターに徹し、学生が考える提案内容には一切、口を出しません。学生が主体的に取り組まざるを得ない状況にするわけです。すると、チームで試行錯誤しながら、自分たちの力だけで企業への提案をつくり始めます。その中で、今の自分に何が足りないのか、嫌でも気づかされ、残りの大学生活で何をすべきなのかを、真剣に考えるようになります」

同大学の商学部では以前からFSP講座を設けており、その担当教員から、科目受講者がその後の学びに積極的になっていくと聞き、経営学部でも行うことを決めたという。

学生にとって有効な学びの場となるよう、授業にはいくつかの工夫点がある。その1つは、1次・最終提案と、1企業につき2回提案する機会があり、さらにチームを変えて2つの企業を扱うことだ。1次提案で企業に指摘されたことを修正して最終提案を行う、また、1つめの企業

での失敗を2つめの企業での取り組みで改善するというように、反省したことをすぐに生かし、挽回できる場を設けている。

リアルに徹することも工夫点の1つだ。協力企業は、学生がよく利用する京王電鉄、東京都心部に位置するホテルグランドパレスといった、学生が就職先に考えるような企業である。「実社会に近い学びの場を提供し、

図2 「経営総合講義A」概要（2015年度実施分）

- 授業期間：1年次前期（4～7月）、全15回（選択科目）
- 受講者：経営学部1年36人（6人×6チーム）
ガイダンス参加者約210人のうち応募者127人で、抽選で受講者を決定
- ファシリテーター：担当教員1人
- 協力企業及び課題：
京王電鉄株式会社（2つの団地内商店街に位置するいずれかの不動産を選択して）「沿線の一大人口集積地であり、少子高齢化が進行している多摩ニュータウンでの、域外からの流入を誘引する施設の企画・策定」
株式会社ホテルグランドパレス 「ホテルグランドパレスの産直市場『ホテ市』の集客増加策」

回	授業内容	具体的な活動
1	オリエンテーション、マインドセット	講座の全体像、グランドルールを説明。
2	大学生としての学び方、チーム結成	身につけさせたい考え方、チーム活動の進め方などを説明。1つめの企業課題に向けてチームを結成。
3	課題への取り組み方の説明	目的を確認し、計画の立て方、研究成果の整理の仕方、プレゼンテーションの方法などを説明。
4	京王電鉄	課題提示
5		チーム活動
6		1次提案
7		チーム活動
8		最終提案
9	1つめの企業課題の振り返り、新チーム結成	1つめの企業課題を振り返り、2つめの企業課題に向けて、新たなチームを結成。
10	ホテルグランドパレス	課題提示
11		チーム活動
12		1次提案
13		チーム活動
14		最終提案
15	授業のまとめ	授業を振り返って自己評価を行う。

赤字の回は企業担当者が参加。

*同大学の資料、取材を基に編集部で作成

*1 一般社団法人 Future Skills Project 研究会による、主体的な学びを育むための体験と気づきを重視した産学連携の授業。 *2 2016年4月、広島国際大学に異動。



明治大学経営学部経営学科2年 松崎友咲 まつざき ゆま
2015年度「経営総合講義A」を履修。神奈川県立横浜翠嵐高校卒業。



明治大学経営学部助教（*2） 石川公彦 いしかわ きよひこ
明治大学大学院経営学研究科博士後期課程修了。博士（経営学）。



メンバーは皆、初対面だったが、目の前に課題があるため、必然的に結束。最初はとにかく意見を出し合い、その過程で人柄を知り、役割分担が自然と決まっていたと松崎さんは言う。

自分が社会に出た時の働く様子を、実感を持ってイメージできるようにしています」(石川助教)

15年度にこの科目を履修した松崎友咲さんは、京王電鉄の課題で提示された2か所の不動産をチーム全員で見に行き、周辺を歩いて住民層を分析し、提案に生かした。マーケティングに関心があることから、いろいろな案を考えて積極的に発言。チーム内では意見がよくぶつかったが、企業に選ばれるために最適な案にするという目標が共有されていたため、納得いくまで議論ができたという。「よい案とするためには、自分の意

見を主張するだけではなく、納得できれば、相手の意見を受け入れることも必要だと学びました」(松崎さん)

議論の結果、オーガニックレストランを提案することに決定。営業時間や店内の配置、人件費や材料費などの必要経費、売り上げ目標など、事業展開に必要な要素は何かも自分たちで考え、そして調べて、提案書を完成させた。授業以外でも活動し、SNSを利用した情報交換などもしたが、最終提案の結果、企業には採用されなかった。

「ほかのチームと違う斬新なアイデアであれば、企業から評価されると

思っていました。アイデアを支えるだけの収支予測ができていなければ、よい案とは言えないことを痛感しました」(松崎さん)

充実したプログラムを活用できる主体性が必要

最終回の振り返りで学生から最も多く挙がったのは、チームワークの大切さに気づいたという声だ(図3)。

「何かをつくるためには周りの空気がチームにどう貢献できるのかを考え、行動することが重要だと、多くの学生が自分の言葉で振り返っていました。また、『消費者ではなく、企画し、商品化する立場で物事を見られるようになった』という声もあり、企業担当者も授業に協力したかいがあつたと喜んでいました」(石川助教)

予想以上に学生の反響があつたことから、16年度は、本科目を1クラスから2クラスに増やし、卒業生の協力を得て参加企業も拡大させる。

以上のように、同学部では1年次から様々な体験型学習を用意している。ただ、1学年約700人もの学生がおり、その全てに対応するのは難しい。「大学受験を終えたばかりの多くの

学生は、学びとは教科書を読んで正解にたどり着くことだと思つています。しかし、大学は答えが1つとは限らない問いを追究していくところ。早い段階でその意識を切り替えられる何かに挑戦してほしいと思います。それは、学部が用意するプログラムだけではなく、部活動、アルバイトなど、何でもよいのです」(鈴井教授)

松崎さんは自身のキャリアをさらに深く考えようと、「インターンシップ実習」を2年次で履修する予定だ。「経営学部は学生数が多いですが、『経営総合講義A』のような少人数制の科目も設けられています。それらの授業では、先生との距離が近く、質問も気軽にできる環境にあります。履修するためには、自ら情報を集め、ガイダンスに参加し、履修を申し込むという行動力が必要です。そのような主体性は、大学の学びにおいて不可欠だと感じています」(松崎さん)

図3 受講者の気づき

- 企画し、提案するためには、熱意が重要であること。
- データの重要性 (収集方法、分析方法、活用方法)。
- どのようなアイデアでもデータで根拠を示すことが重要。
- 自分の「個」があつてこそ全体に貢献でき、チームが成立する。
- 自分の意見を発信し、相手の意見を受容することが大切。
- まずは相手の話をしっかり聞き、本当に伝えようとしていることを理解する。
- 発信力や説得力など、プレゼンテーションの技術の重要性。
- 消費者ではなく、企画し、商品化する立場で物事を見られるようになった。

*同大学の資料を基に編集部で作成

愛媛県

アクティブ・ラーニングの視点に 立ったICT活用で、「心おどる 学び合いの旅」へ生徒をいざなう

愛媛県では、アクティブ・ラーニングの積み重ねにより、他者感覚を備えた、地域で即戦力となる人材の育成を目指している。地域連携やアクティブ・ラーニングの深化を図る鍵として、ICTの活用に着目した同県では、全県立高校・中等教育学校が参加した「ICT教育フェスタ」を開催し、生徒・教師がICTの利便性を体感した。

愛媛県 Data

- ◎人口 約 138 万人 ◎面積 約 5,676km²
- ◎高校数 国立1校、公立53校、私立15校
- ◎高校生数 3万5543人
- ◎電話 089-912-2950 (教育委員会)
- ◎URL <http://ehime-c.esnet.ed.jp>

教育長の ビジョン

地域のために行動する力の育成を目指し、 ICTを利用した授業改善を図る

愛媛県教育委員会 教育長 井上正ただし

地域活性化を支えるため 「地学地就」を推進

愛媛県の人口は、1985年の約153万人をピークに減り続けており、2060年には約81・4万人にまで減少すると推計されています。大きな人口減は地域社会の存続にかかわる課題であり、本県では「愛媛県版まち・ひと・しごと創生総合戦略」を

策定し、人口の自然減の歯止めと、人の流出入の均衡化に努めています。同戦略において教育分野が担う役割は大きく、15年度に「愛媛県教育振興に関する大綱」を策定し、「学校・家庭・地域が連携した教育の推進」「安全・安心な教育環境の整備」「未来を拓く子どもたちの育成」など6つの振興方針を打ち出しました。そのキーワードは「地学地就」です。地域で

学んだ子どもが、大人になって地域の産業に従事し、地域の発展に貢献する。そして、今度は自分が地域を担う子どもを育てていく。そうした好循環の確立を目指しています。地学地就のベースとなるのは、郷土愛です。地域のよさを知り、地域に誇りを持てるようにと、小中高の全ての学校段階において、地域と連携した様々な活動を進めています。

意欲、他者感覚、協働性を 育む鍵となるICT

地学地就に向け、高校段階では、地域で即戦力となる人材の育成に力を入れていきます。その具体策の1つとして、16年度、愛媛県立今治工業いまはつ高校の機械科を再編して、機械造船科を新しく設置しました。同市は全国に誇る造船の町ですが、技術者の多くが高齢化し、若手の育成が課題

それらの活動は、地域のみならず、学校の活性化にも大きく貢献しています。特に高校では、特色ある活動が学校の魅力化につながり、入学者数が増えた学校もあります。



いのうえ・ただし 1980年愛媛県庁に入庁後、保健福祉部介護保険課長補佐、県民環境部NPO・ボランティア推進監、保健福祉部生きがい推進局長寿介護課長、経済労働部管理局産業政策課長、企画情報部秘書広報局長、総務部行財政改革局長、教育委員会事務局副教育長などを経て、2015年から現職。

となつていきます。全国にかつて20校あった造船関連の高校は3校にまで減少していましたが、そのような状況であっても、今治の地場産業を支えるために学科設置を決めました。

同科には国からも期待が寄せられ、設置と同時に文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」の指定を受けました。専門的な職業人の育成モデルを構築し、それをほかの専門高校にも広めて、地域を支える人材を育てる職業教育の復権につなげたいと考えています。

もう1つの柱となる施策は、アクティブ・ラーニング(以下、AL)の推進と、その充実の鍵を握るICT環境

境の整備です。よく言われるように、今や社会情勢の変化はめまぐるしく、先の見通しを持ちにくくなっています。例えば、本県の主力産業である農林水産業では、就業者の高齢化や後継者不足にTPP(※)の問題が絡み、先行きは不透明です。子どもたちには、そうした課題を乗り越えて地域社会を築いていく、たくましい力を身につけてほしいと考えています。

地域の課題に主体的に取り組む姿勢や解決策を見いだしていく力を育むためには、知識・技能の習得だけでなく、自ら課題を見だし、その解決に取り組むという、ALの経験を積み重ねていくことが必要です。

このALで学びを深めるポイントの1つは、自ら取り組もうとする「意欲」を高めることだと考えます。「意欲」は、学ぶ楽しさはもちろん、他者から認められる喜び、自分の世界が広がる面白さなどからも生まれるものでしょう。

さらに、課題解決に向けて重要になるのは多様性です。自分の考えにとらわれず、様々な価値観や意見と学んでこそ、他者の立場で物事を考えられる「他者感覚」が備わってきます。そして、他者を認める寛容性を備えることにより、他者と協力して物事を進めていく協働性も身につけていくことでしょう。

それらの活動を進めていくにあたり、ICTは大いに力になると考えます。他者と意見を共有しやすく、一度に大勢の意見に触れることができ、しかも、言葉だけでなく、図や画像でも表現できます。その過程において、他者に伝える表現力が磨かれることも期待できます。

学び合いの旅に いざなうような教育を

県教委では、そうした考えから、地

域連携、AL、ICTに関する施策を連動させて進めてきました。今後の課題は、ICT環境の整備です。本県では、学習支援システムだけでなく、校務支援システムも未整備であるため、両者のシステムと、既に運用中の教育専用ネットワーク「愛媛スクールネット」を連携させたシステムを構築し、教育の質向上につなげたいと考えています。本県では公立高校の校舎の耐震化率が全国45位(15年度調査)であり、まずは安全・安心な教育環境の整備に力を注いできました。今後は、ICT環境の整備にも取り組んでいきたいと考えています。

人は一生涯学び続ける存在です。そうしたことを子どもたちに伝えるためにも、教師自身が新しい世界を知り、その喜びを感じてほしいと思います。ALを新しい指導方法と捉え、実施をためらう教師もいると思います。しかし、ALは生徒同士だけの学び合いではありません。教師が学ぶ姿を見せるためにも、生徒と教師が学び合っていけばよいのです。心おどる、学び合いの旅にいざなうような教育を実現するために、全力で支援していきたいと思えます。

※ Trans-Pacific Strategic Economic Partnership Agreement の略。環太平洋戦略的経済連携協定のこと。

現場の
ミッション

研究実践校、「ICT教育フェスタ」を起点に 県内全校にICTの活用を広める

ICT環境の整備に向けて 推進委員会を設置

愛媛県教育委員会では、地学地就に向けた教育力向上を目指し、地域連携、AL、ICT活用を連動させて進めている。高校教育課の長井俊朗課長は、次のように説明する。

「地域に貢献する人材を育てようとする時、学校だけでなく、地域も学びの場になります。また、地域の課題解決には主体性や協働性が求められ、それを育む活動としてALが有効です。さらに、ALの推進では、教師が一方的に教える授業から、生徒たちが学び合い、教え合う授業への転換が重要ですが、その手段として、ICTの効果的な活用が必要です。そのように、教育は何かが単独で動くものではありません。施策も連動することが重要だと捉えています」

地域連携では、高校生から地域と

連携した魅力ある学校づくりのプランを募る「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」を、ALでは、拠点校10校が研究実践を行う「高校生アクティブ・ラーニング推進事業」などを進める。

ICT活用については、2015年度、県教委、校長・教頭・情報科教師の代表者、そして、ICT教育の研究者から成る「ICT教育推進委員会」を設置し、全7回の会合を開いて県立学校全体のICT推進を検討した。その結果、まずは、愛媛県立伊予高校と同松山商業高校をICT教育研究実践校（15年度から）に指定し、ICT活用の実践研究を始めることとした。

「県全体で一斉に動けば教育力向上への大きな力となりますが、一方で、導入に向けての慎重な判断が必要であり、予算確保も大きな課題となります。そこで、活用方法と成果の実

績を積むことから始めました」（長井課長）

研究実践校2校で 活用ノウハウを蓄積

両校にそれぞれ電子黒板機能つきプロジェクトター、タブレット端末40台、無線LANを整備。ICT支援員も配置し、活用方法の指導や授業時のトラブル対応など、教師が安心してICTを活用できる体制を整えた。

「当初は活用をためらっていた教師も、使い始めて操作に慣れていくにつれ、タブレットを手放せなくなるようです。また、生徒が発表資料などを簡単に作成できるため、話し合いがスムーズに、かつ活発に行えるようになったと、両校から報告を受けています」（長井課長）

タブレット端末は、伊予高校にiOS、松山商業高校にWindowsを、そして、愛媛県総合教育セン

ターには、その両方のOS（*1）を配備して、研究を進めている。

「タブレットのよりよい活用方法を探るために、あえて異なるOSを導入しました。また、多くの教師に活用してもらうために、授業に役立つICTの活用ポイントをまとめ、実践事例を蓄積していきたいと考えています」（長井課長）

愛媛県では、団塊世代の退職が進み、若手教師が増えている。先輩教師の指導ノウハウの伝承にも、ICTの有効活用を検討している。

「ベテランと若手の縦のつながりだけではなく、学校間や教科間を超えた、横のつながりもしやすくなるものと期待しています」（長井課長）

総勢163人が参加した 「ICT教育フェスタ」を開催

ICT導入に向けて、現場の意識改革にも努めている。県立高校・中等教育学校の校長・教頭が集まる会合では、ICT教育推進委員会の顧問を務める鳴門教育大学の藤村裕一（ゆういち）准教授らの講演を行い、学校教育におけるICT活用の利点を説明した。

さらに、2016年3月には、民

*1 Operating Systemの略。コンピューターのシステム全体を管理、制御するソフトウェアのこと。タブレットの主なOSには、アップル社のiOS、Microsoft社のWindows、グーグル社のAndroidがある。



愛媛県教育委員会事務局
指導部高校教育課課長
長井俊朗
ながいとしろう
愛媛県教育委員会指導部高校
教育課教職員係長、愛媛県立
野村高校校長等を経て現職。

間企業と連携し、「ICT教育フェスタ」を開催。全ての県立高校・中等教育学校から代表の生徒（107人）と教師（56人）が参加し、タブレットを1人1台持ち、3人1組となつて「Classi」（*2）を活用しながら、愛媛県の魅力を紹介する作品を作る授業などを体験した（写真）。

「目的は、生徒や教師にICTを活用した教育の必要性を理解してもらい、県下にICT機器導入の機運を高めることです。全ての参加者に実際にタブレットを使ってもらい、そこで感じたことを各校内に広めてもらうと考えました」（長井課長）

生徒の振り返りアンケートでは、「今日の体験を通して愛媛の魅力に気づくことができましたか？」の肯定率（大変そう思う+まあそう思う）は94%、「周りの人の考えやヒントから新たな気づきを得ることができましたか？」の肯定率が95%と、タブレットの活用による学習効果を生徒



写真 「ICT教育フェスタ」でのタブレット体験授業の様子。愛媛県の魅力を紹介する作品を作り、タブレットを通じて会場内で共有。ほかの生徒の作品に「いいね」を押したり、コメントを書いたりした。

自身も感じている回答となった。また、自由回答では、ほかの生徒の意見を閲覧できる点や、履歴が残って振り返りやすい点などを利点に挙げる生徒が目立った。

「タブレットを使えば、挙手が苦手な生徒でも意見が出しやすいこと、そして、より多様な意見に触れられることを、参加者に伝えられたと思います。何より、教師は、楽しそうに授業に取り組み生徒の姿に刺激を受けたのではないだろうか」（長井課長）

地域や民間とも連携し、効果的に事業を推進

「ICT教育フェスタ」は、民間企業と連携して開いたことも大きなポ

島しょ部で地域創生を目指す高校の挑戦

ICT活用で生徒に学習の自立を促す

愛媛県立弓削高校

瀬戸内海の島しょ部に位置する愛媛県立弓削高校は、全校生徒62人の小規模校だ。少子化とともに入学者数も減少しており、入学者数維持のため、学校の魅力を強化してきた。中でも、小規模校の利点を生かし、生徒一人ひとりに応じたきめ細かい指導は、同校の最大の特色だ。それをさらに推し進めるため、2015年度、「Classi」を導入した。

まず、放課後や休日にパソコン教室を自習室として開放し、生徒が自分のレベルに合わせて問題を選べる「Webドリル」を使って自学自習を行えるようにした。さらに、「Webテスト」を朝学習や授業の最後に行い、学習の振り返りに活用。生徒の解答は自動的に採点され、その結果は教師用のパソコン画面に表示される。誤答率の高い内容は授業で再び指導したり、生徒個別にアドバイスしたりと、テストから間を置かず指導できるため、生徒は効果的な復習ができるようになった。また、生徒所有のスマートフォンでも「Classi」にアクセスできるため、生徒はいつでもどこでも自由に学習できる。例えば、船で通学する生徒は、登下校時の隙間時間を「Classi」で有効活用しているという。

今後は、生徒自身で自分のスケジュールを管理し、家庭学習時間や学校活動を記録する機能を通じて、生徒一人ひとりの学習の自立を促していく予定だ。

イントダ。今回、ソフトバンクが、WiFiや無線LANの環境がなくてもインターネットに接続できるセルラーモデル（*3）のタブレットを参加者全員分、用意した。

「予算も人員も限られる中で最高の結果を出すためには、地域や民間と一緒に取組みることが不可欠です。今回は、本気でICT導入を進めようとしていることを強く印象づけるためにも、全校が参加し、参加者全員がタブレットを体験することが必須でした。そのための最善の方

法を採ったのです」（長井課長）

県の動きと連動するように、学校独自にICTを整備し、授業改善を進める高校もある。県教委では、そうした学校とも連携し、県全体でのICT活用を促進したいとしている。

今後は、実践校での成果と課題を分析するとともに、各校の校長や市町の教育委員会、関係機関とも密に情報交換をしながら、ICT教育推進委員会で十分検討を重ね、県立学校のICT環境を整備していく考えだ。

*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。
*3 電話回線を利用してインターネットにつなぐモデルのこと。

教科学習外活動における アクティブ・ラーニング

—「ワールド・カフェ」の進め方と実践事例—

現在、各校では「アクティブ・ラーニング」（以下、AL）の視点からのさらなる授業改善の試みが行われている。高校におけるALが目指すものは、生徒による主体的・協働的な学びであるが、学校における全ての教育活動で主体的・協働的な学習態度を育もうとする時、教科学習外活動はどのような展開を見せるのだろうか。対話の一手法である「ワールド・カフェ」を軸に考える。

教科学習外活動で

主体的・協働的な学びの力を育む

アクティブ・ラーニング（以下、AL）では、他者との対話や協働を通して学んだ知識を構造化することが学習上のポイントとなる。そのため、各授業ではペア（グループ）ワークを効果的に取り入れ、生徒が学習内容を複眼的に捉えながら構造化していくが、同時に、対話や協働のルール、そしてこれからの社会で対話や協働が一層重要になるという「価値」の確認を行っていくことも必要だ。

「主体性を持って多様な人々と協働

して学ぶ態度」（高大接続システム改革会議「最終報告」より）が求められる中、主体的・協働的な問題発見・解決の場面を、教科学習にとどまらず、様々な教育活動で生徒に体験させることは、カリキュラム・マネジメントの観点からも今後より一層重要になる。言わば、教科学習外活動のAL化である。

進路講演会を例に考えてみる。多くの高校では、大学教授や社会人を招いた進路講演会が行われている。各校の教育目標などに照らし合わせて、講演テーマなどが選定されるが、生徒は講話を聞くだけといったケースも少なくない。普段は接する機会

の少ない学校外の人の考えや思いを知ることは重要だが、一方のインプットは、気づきや感動が生徒の中に芽生えにくいという面もある。

教科学習であれ、教科学習外であれ、他者との対話や協働は、学んだことや気づいたことを構造化するきっかけとなる。進路講演会を始めとする教科学習外活動をより主体的・協働的なものとする上で有効な対話の手法が、「ワールド・カフェ」である。

環境づくりと活動設計で 自由な対話を促進する

ワールド・カフェは、1995年

にアメリカで開発された対話の手法である（*）。お互いの意見を否定しないという安心・安全が保障された、文字通り、カフェのようなリラックした雰囲気、答えが1つとは限らない問いについて話し合う。最近では地方創生やグローバル化など、正解が決まっていないテーマ、意見が対立しやすいテーマでのワールド・カフェが、自治体やNPO主催のワークショップで頻繁に行われるようになってきている。企業でも、ワーク・ライフ・バランスやキャリア形成をテーマにしたワールド・カフェがよく行われているが、それはワールド・カフェが異なる価値観を衝突させるこ

*アメリカの組織開発学者であるアニータ・ブラウン氏、デイビッド・アイザックス氏が開発

図 ワールド・カフェの基本的な進め方

1 リラックスして対話できる環境づくりを行う

- ① 4、5人用のテーブルを作り、テーブルにクラフトペーパーをかける。テーブル上には色違いのサインペンを人数分置く。
- ② 音楽をかけたり、飲み物やお菓子を用意したりして、カフェのような雰囲気をつくる。

2 誰もが自由に対話できるようにグランドルールを説明する

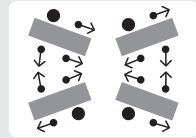
- ① 「これから話し合うテーマは、正解が誰にも分からないものであり、答えが1つとも限らない。そのため、間違いも存在しない。だから、思ったことをどんどん口にしよう」
 - ② 「ほかの人が自分と違う意見を言った時は、頭ごなしに否定せず、なぜそうした意見に至ったのかを考え、自分との違いを楽しもう。固定観念や常識、今日までの自分にとらわれないことが大切だ」
 - ③ 「同じグループの人の意見を聞いて、心に残った言葉や、それをきっかけに思いついた自分の考えをサインペンでクラフトペーパーにメモしよう。文章にまとまらない時は、単語や図、絵でも構わないので、とにかくどんどんメモしよう」
- *上記のほか、以下のようなことをルールとして説明してもよい。
- ・「グループの1人が話している時は、その人の顔をしっかりと見て聞くようにしましょう」
 - ・「静かに考えることで思いがけない気づきに出合えることがある。グループに沈黙が訪れた時は、新たな発見のチャンスだと考えて、焦らずに沈黙思考を歓迎しよう」

3 グループ単位で対話を行う

- ① テーマについて、グループごとに対話を行う。テーマは正解が誰にも分からないもの、答えが1つとは限らないオープンエンドなものを選ぶ。



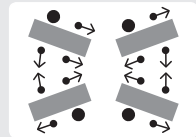
- ② 15分～20分経ったら、各テーブル1人のメンバーだけを残し、ほかのメンバーは別のテーブルに移動する。



- ③ 移動した後、各テーブルに残っていたメンバーが、それまでに自分のテーブルで話し合われた内容を新しいメンバーに説明する。また、ほかのテーブルから移動してきたメンバーは、移動前にいたテーブルで話し合われた内容を説明する。ここでもクラフトペーパーに気づいたことを書き加える。

*この時、前にいたテーブルで話し合われたことを正確に説明する必要はなく、あくまでも自分の心に残った話をすればよい。

- ④ 15分～20分経ったら、最初から各テーブルにいたメンバー1人だけを残して、そのほかのメンバーは再び別のテーブルに移動する。それを何回か繰り返す。



- ⑤ 全員が最初にいたテーブルに戻る。対話の旅を通して、自分が聞き出したことや、自分の中の変化・気づきを語り合う。

となく、むしろ古い価値観に縛られない新しい考え方を創出する機会になるからだ。

ワールド・カフェでは、参加者が一定時間の中でたくさんの人と話し合い、あたかも世界を旅するように見聞を広め、自分にはなかった気づきを得られるよう、独特の進め方が設定される。また、リラックスした雰囲気でも自由に話し合えるよう、環境づくりが非常に重要となる。そして、対話を始めるにあたっては、「自分と異なる意見を否定しない」「常識にとらわれることなく自由に意見を述べる」といったグランドルールの明示も大切になる(図)。

参加者が知識や経験を共有し、創造性のある対話を楽しむワールド・カフェを教科学習外活動に取り入れることで、参加者である生徒は、主体的・協働的に活動する楽しさや喜びを知ることができ、教科学習におけるALの素地を豊かにすることができるのではないだろうか。また、教師にとっても、ワールド・カフェを開催することで、教科学習をデザインする上での様々なアイデアが得られるだろう。

ダイベートと大きく異なるワールド・カフェの機能

これからの社会では、独力で解決できない課題に、他者の知識や経験からも学びながら向き合う姿勢がますます必要になると考えられる。本誌2015年10月号で大谷大教授の荒瀬克己氏は、「その過程では、意見の異なる第三者の主張に納得すれば、自分自身の考えを変えていく、ある種の勇気も求められる」と説明し、対話的精神の重要性を指摘した。

多くの生徒が体験するようになったダイベートは、競技の形で行われる論争であり、試合の中で割り当てられた自説を曲げることは「敗北」を意味する。だが、相手を尊重しつつ自身の考えを率直に出し合うワールド・カフェにおいては、自説が変容することは「成長」を意味する。社会で求められる主体性や協働性を養うALは、キャリア教育そのものであると考える教師は少なくないが、他者との対話を土壌として自身を成長させるワールド・カフェは、キャリア教育の一手法としても学校現場で運用できるのではないだろうか。

ワールド・カフェで能動的に語り合う中で、「学校」という世界の多様性に気づかせる

対話を通して他者と自己の多様性に気づかせる

長崎県立諫早高校では、2015年度より、グローバルに活躍する人材をゲストに招いた「グローバル講演会」を開催している。グローバル講演会の最大の特徴は、ワールド・カフェを始めとする対話の手法を取り入れて、生徒が語り合う時間を重視している点だ。

きっかけは15年7月、国際NGO創設者を招いた講演会を進路指導部が企画したことだ。講演会の内容を検討していく中で、「ただ講演を聞いて終わりという従来のスタイルでよいのだろうか」という課題意識が生まれてきたと、進路指導主事の後田康蔵先生は振り返る。

「本校の生徒は、日々の学習にも部活動にも全力で取り組んでいます。

しかし、毎日を忙しく過ごしている分、今の学習が将来にどうつながるのかを実感する機会は多くはありません。また、教師の言葉を素直に受け入れる半面、自分の考えを率直に相手に伝えることは、どちらかとい

えば苦手です。さらに、地方で暮らす生徒は都市部の生徒に比べて、大学や社会が必要とされる多様性を受容する力を身につけるチャンスが乏しいと感じていました」（後田先生）

「講演会を利用して、生徒がより社会の多様性を実感したり、主体的に意見を述べたりする機会をつくりたい」「これからの入試、そして社会で求められる表現力、協働する力を養う場にもしたい」と、後田先生は校長、教頭、さらに高校生を対象とした教育ワークショップを行う外部ファシリテーターと協議を開始した。その結果、講演を聞いて感じたことをワールド・カフェで生徒同士が話し合う、

「講演＋対話」のスタイルを考案。「グローバル講演会」と命名した。「グローバル」という言葉には、国境を超えて活躍するゲストを招くという意味だけでなく、同じ学校の仲間の多様性と、自分の内面にある様々な価値観、可能性に気づいてほしいという後田先生の願いも込められている。

学校の中にもグローバルがあることを知る

15年7月の「グローバル講演会」では、全校生徒の約3分の1にあたる500人が聴講。90分間のゲストの講演を聞いた生徒の中から、自ら希望したおよそ50人の生徒が120分間のワールド・カフェに参加した。

あらかじめ生徒には「講演会の後、講師の方と一緒に語り合いますよ」と告知されていたが、「ワールド・カフェ」という手法やその進め方などに関して説明は行っていないかった。そのため、実際に何人の生徒が参加を希望するのか、当日になるまで分からなかったが、「それまでの講演会にはなかつた高揚感が、多くの生徒に参加を決意させた」と、国語科の

高比良周一先生は振り返る。

「講演会のゲストが若く、親しみを感じさせる方なのに、とてもエネルギーが豊富なエピソードを語ったこと、講演会を聞いたその場で500人の生徒が感想を話し合ったことなど、生徒はいつもの講演会とは全く異なる雰囲気ショックを受けていました。ジェットコースターから降りた時のようなドキドキ感だったと思います。だから、午後の語り合いの場にも、急ぎよ部活動を休んで参加した生徒が何人もいました」（高比良先生）

ワールド・カフェでは、4、5人のグループをつくり、まず講演の感想を共有して、「グローバル社会」に対するイメージを広げていった。その後、「10年後、世界を今より少しでも



長崎県立諫早高校
教職歴17年。同校に赴任して8年目。国語科担当。



長崎県立諫早高校
教職歴20年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。物理担当。

幸せにするために、私たちには何ができるか」というテーマでメンバーを変えながら対話を行った。あえて抽象的なテーマ、答えが1つではないことが明らかな問いにしたのは、どの生徒にとっても話しやすい場をつくろうというねらいからだ。

「ワールド・カフェでは、気になっていたけれどよく分からない、話しやすいけれど実際に話し始めると予想以上に話が広がるテーマがよいと思います。社会問題などについての

長崎県立諫早高校・3年生
末永翔太
すえなが・しょうた

長崎県立諫早高校・3年生
田崎颯大
たさき・そうだい

長崎県立諫早高校・3年生
豊福勇樹
とよふく・ゆうき

長崎県立諫早高校・3年生
橋本真依
はしもと・まゐ

長崎県立諫早高校・2年生
小川晴香
おがわ・はるか

第1回 グローバル講演会

国際 NGO 創設者による 90 分の講演を聞いた後、希望者が別室でワールド・カフェに参加した。高校時代に社会貢献への志が生まれたというゲストの体験を聞き、「世界の一員である自分」について考えるのが目的だ。



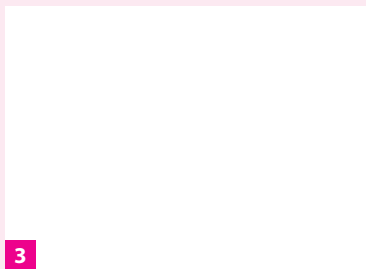
1

ゲストの講演を聞く生徒たち。インプットに徹する静かな時間も、これまでの講演会同様に確保した。



2

通常の講演会はゲストの講演と質疑応答という構成だが、グローバル講演会では、講演を聞いた後、全生徒が短時間ながら語り合った。



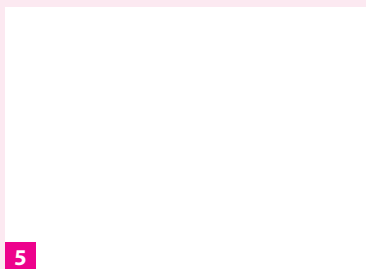
3

講演後のワールド・カフェには、ゲスト、そして教師も参加。普段は出会えない「グローバル人材」と対話を重ねていった。



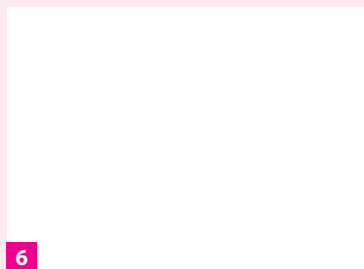
4

対話を重ねることで、生徒の内に「言いたいこと」が積み重なる。その結果、生徒は公開討論にも自ら手を挙げて参加した。



5

ワールド・カフェの最後には、「これからやってみたいこと」をグループ内で発表し、今後の高校生活での具体的な行動につなげていった。



6

ワールド・カフェの後も生徒はその場に残り、ゲストと対話を続けた。リラックスした様子で対話を楽しむ生徒の様子が印象的だった。

知識の量や論理的な思考力の有無にあまり左右されず、ほかの人はどのように考えているのかを素直に聞いてみたくなるような問いを立てることが重要です」(後田先生)

ワールド・カフェに初めて参加した生徒たちは、「同じ学校の生徒が実はいろいろな考えを持っていること」に一様に驚いたという。

「テーブルを移動して、話すメンバーを変えらるうちに、一つひとつのテーブルが国のように思えてきて、まるで世界を旅行しているような感覚になっていきました。同じ学校の中でも自分とは違う考えを持っている人がたくさんいて、小さな場所でも、人が集まればグローバルなのだと思います」(橋本さん)

「ワールド・カフェに参加して、自分はこのな話せるんだと分かって、びっくりしました。最初はすごく緊張したけれど、会場は音楽が流れて全く堅い雰囲気ではなかったの、だんだんみんな笑顔になって、時間の経過とともにどんどん話せるようになりました。120分間はあっという間だったけれど、もつと長い時

第2回、第3回 グローバル講演会

グローバルに活躍するビジネスパーソン、発展途上国で活動してきた国際 NGO 創設者の講演を聞き、ワールド・カフェを行った。



1

講演後の質疑応答もゲストと横並びの対話形式で実施。いつもとは違う会場の雰囲気だからこそ、生徒の集中力も高まる。



2

話すのが苦手な生徒もいるため、「傾聴から新たな発見が生まれることもある」と、沈黙の価値を事前に説明することも重要。



3

「グローバル時代の教育」をテーマに、教師による即興の公開討論も実施。筋書きなしの議論に生徒は耳を傾ける。



4

話し合った内容を書いたクラフトペーパーは、校内の廊下に掲示。参加できなかった生徒の興味の喚起へとつなげる。

間語り合っただけだと思えるくらい、自分の考えを深められました」（小川さん）

生徒の主体的な対話力を引き出すワールド・カフェ

同校のワールド・カフェには、希望した教師も参加し、生徒との対話を楽しんだ。後田先生もワールド・カフェに参加したが、「生徒との対話

は教師にとっても新鮮な体験だった」と振り返る。

「ワールド・カフェでは、教師も生徒も同じ一参加者であり、どちらの意見も価値は同じです。いつもは教え、導く立場なのに、この時は同じ立場で話をするのですから、最初はとてもドキドキしましたし、『教師として生徒の視野を広げようという意見を出したい』という気持ちもありま

した。しかし、対話が始まって20分が経つ頃には、『生徒はここまで話せるんだ』『この子たちはすごい！』と、自分の気持ちが大きく変わっていることに気づきました。実際、生徒の言葉から教わることもたくさんあり、120分のワールド・カフェで自身の生徒観が大きく変わりました」（後田先生）

「ワールド・カフェでは、生徒はいつもは話さないような本音をどんどん口にするようになりました。生徒の言葉を聞くうちに、『私も本音を言わなければいけない！』と思うようになったのです」（高比良先生）

とは言え、全ての生徒がスムーズに対話を楽しめたわけではない。

「みんなたくさん話しているのに、自分はあまり話すことができませんでした。みんながいろいろなことを考えていて、知識も豊富だと分かって、ワールド・カフェの後は正直、少し焦りを感じました。でも、自己嫌悪になることはありませんでした。大学や社会に出たらきつとこのような力が必要なのだろうと分かりましたし、これからもこういった機会があれば、どんどん参加しようと思

生徒が企画・運営に参加し、活動はより能動的に発展

第1回・第2回グローバル講演会の企画と進行は、進路指導部と外部ファシリテーターが行ったが、第3回は、ワールド・カフェの面白さに感銘を受けた生徒数名がゲストの人选や登壇依頼、ワールド・カフェの進行などに携わることになった。有志の生徒と進路指導部、外部ファシリテーターは、「グローバル化において、本校の生徒はどのような課題を抱えているか」「生徒にどんな刺激を与え、変化をもたらしたいか」などについて検討し、ワークショップのテーマやプログラムを決めていった。

「自校の生徒像」と「講演会で与えたい変化」を話し合う生徒。ゲストに何を話してほしいのか、その理由とともに文書にまとめ、ゲストに伝えた。



第3回グローバル講演会当日の朝、講演会やワールド・カフェの進行について最終確認をする生徒と教師。

ました」(豊福さん)

120分間のワールドカフェの途中には、「諫早高校は世界を幸せにする人材を育てることができているのか」というテーマで公開討論も実施。50人以上の参加者の前にもかかわらず、何人もの生徒が「自分に意見を言わせてほしい」と自ら手を挙げ、討論のテーブルに着いた。

ワールド・カフェを主体とした生徒との対話の場を体験した教師たちは、「本校の生徒の潜在能力の高さに驚いた」「生徒は自分の意見を語れないのではなく、我々がそうした場を与えてこなかったのだ」といった感想を口にした。

「生徒はここまでやれるのだと分かったことで、自分の授業観、生徒観にも変化が起きました。私も授業でAIを行っています。意に反して従来の教え込み型に戻ってしまいう時もありました。しかし、ワールド・カフェを通して、『生徒主体』とは何かを改めて考えたことで、教科学習におけるファシリテーターとしての役割を強く意識するようになりました」(後田先生)

多様性を受け入れることで 生徒の学び方が豊かになる

15年12月、16年3月にもグローバル講演会を実施し、ワールド・カフェを行った同校。教科学習外活動において対話の場を学校内に意図的につくることで、教科学習にも必要とされる多様性を受け入れる力が生徒に身についたようだ。

「一人ひとりがいろいろな考えを持って生活していることが分かり、ワールド・カフェ以外の場面でも、その人がどのような考えを持っているのか、じっくりと聞いてみたいと

いう気持ちが強くなったと思います。友人とも今までなら話さなかったような深い話をするようになりましたし、親と話す時間も以前よりも増えたと思います」(田崎さん)

「ニュース一つ取っても、ほかの人がどう考えているのかなど、多面的に捉える習慣が身につきました。自分の考えにこだわりすぎずに、ほかの人の意見も取り入れて、新たな自分の考えをつくることができるようになってきたと思います」(末永さん)

高比良先生は国語の授業でワールド・カフェを取り入れた。評論の筆者の主張を足がかりに、高比良先生

「問い」と「答え」を 生徒自らが生み出す場をつくる

「グローバル社会を生きる力」「未来の理想の田舎」「大人と子どもの境界線」。これまで様々なテーマで中学生や高校生とワールド・カフェを行いました。普通の中高生が大人をハッとさせる、哲学者のような言葉を口にするのは、ワールド・カフェで他者の価値観に触れながら、テーマをその時の自分に引きつけ、自分なりの「問い」と「答え」を生み出しているからです。そのため、ワールド・カフェの後の参加者の感想、気づきは実に多様です。

ワールド・カフェに興味を持った先生には、一度ご自身が参加者としてワールド・カフェを楽しんでみることをお勧めします。ファシリテーターのどんな言葉、所作が安心・安全な空間をつくり、対話を促進させ、個々の思考を深めるかが体験的に分かるはず。それは、校内における主体的・協働的な学びの場づくりとプログラム作成において大いに役立つと思います。

「グローバル講演会」の企画・運営に参加した
外部ファシリテーター
「三四郎の学校」事務局長 日賀優一

が設定した問いについてクラスで話し合うことで、生徒はよりクリティカルに筆者と向き合うことができるようになったという。授業を受けた生徒も、「ワールド・カフェで人は意見が違って当然だと分かってから、筆者は何をを考えているのかと興味を持って評論を読めるようになった」と教科学習との密接な関連性を語る。

「いろいろな教科で、ワールド・カフェなどの対話の手法を取り入れ始めるなど、教科学習での新たな引き出しが確実に増えました。公民と国語で合同で授業づくりに取り組むなど、合教科型の授業デザインも進んでいます。教科と教科、教科と行事・部活動など、学校の全ての活動が対話を軸に結びついていくことで、それぞれが従来にはない価値を生み出せばよいですね」(後田先生)

ワールド・カフェで他者の価値観に接することで、生徒も教師も自分の中の常識や殻を破るエネルギーを得る。自分という国から一歩を踏み出し、新たな世界に出て行くワールド・カフェは、学校にとっては学びをグローバルにするための有効な手法と言えるのではないだろうか。

ポスター発表とプレゼンテーションに計27校が参加

近畿地区のSGH校・アソシエイト校が 合同の課題研究発表会を開催

2016年3月、関西学院大学において、近畿地区のスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）校とSGHアソシエイト校が一堂に会して「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール・SGHアソシエイト校課題研究発表会」（主催・関西学院大学、共催・大阪大学）が開かれた。会場には全国から学校関係者が訪れ、各校の取り組みに対する注目の高さがうかがえた。発表会の様子と参加者の声をリポートする。

課題研究の発表を通して 大学で学ぶ意味を考える

「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール校・SGHアソシエイト校課題研究発表会」は、グローバル人材の育成に取り組む高校の支援を目的に、関西学院大学と大阪大学が高大連携の一環として企画した。それぞれの学校が取り組んできた課題研究の成果を発信することで、高校生に課題解決力・プレゼンテーション能力を高めてもらうとともに、大学進学の意味を改めて考える機会とすることがねらいだ。また、担当の

教師にとっても、指導の検証と次年度に向けた指導改善のヒントを得る場となることが期待された。

SGHの事業が始まった背景には、世界的な教育改革の潮流がある。オーピングセレモニーに主催者代表として登壇した関西学院大学の村田治学長は、参加した高校生たちに次のように語った。

「大学進学率の向上による大学のユニバーサル化によって、大学に求められる役割は、知識・技能の伝達のみならず、幅広い経験の提供へと変わろうとしています。それに伴い、身につけるべき能力も変わりつつあり、欧米では大学卒業後に求められ

る能力として、次の3つが重視されています。それは、①社会に出た後も学習し続ける能力、②知識を実践に応用する能力、③分析力です。

それら3つの能力こそ、高校生の皆さんが学校で取り組んでいる課題研究に必要な能力そのものであり、大学卒業後に世界で活躍するための基礎となる力です。SGHの取り組みで学んできたこと、そして、本日の発表会を通じて、皆で切磋琢磨しながら、大学で何を学ぶべきなのか、何を目標に人生を送るべきなのかを考え、高い志を持つ重要性に気づいてほしいと思います」

その後、参加校の代表生徒が1分

図 「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール校・SGHアソシエイト校課題研究発表会」参加校

- **SGH校** [2014年度採択] 滋賀県立守山中学校・高校、京都市立堀川高校、大阪府立北野高校、大阪府立三国丘高校、関西大学高等部、神戸市立葺合高校、関西学院高等部、奈良県立畷傍高校 [2015年度採択] 京都市立西京高校、京都学園高校、大阪教育大学附属高校平野校舎、大阪府立豊中高校、大阪府立千里高校、大阪府立泉北高校、関西学院千里国際高等部、清風南海高校、神戸大学附属中等教育学校、兵庫県立兵庫高校、兵庫県立伊丹高校、兵庫県立国際高校、啓明学院中学校・高校
- **SGHアソシエイト校** 清教学園中学・高校、高槻高校・中学校、兵庫県立長田高校、兵庫県立北摂三田高校、兵庫県立柏原高校、和歌山信愛中学校・高校



写真1 オープニングセレモニーでは、参加校の代表者が登壇し、自校の発表内容をアピールした。

間ずつ、課題研究のテーマや進め方、自校の学校紹介などを思い思いにアピールし、発表会への意気込みを表明した(写真1)。そして、共催者の大阪大学教育担当筆頭副理事の進藤修一教授が高校生に期待を込めたメッセージを贈り、オープニングセレモニーは終了した。

84グループが参加したポスター発表

参加校は、近畿地区のSGH校21校、SGHアソシエイト校6校の計

27校(図)で、個人またはグループによる、ポスター発表とプレゼンテーション(口頭発表)が行われた。

ポスター発表には、24校84グループが参加。1つの教室に5、もしくは6グループがポスターを掲示し、1グループ15分間で発表と質疑応答を行った(写真2)。

見学者は他地区のSGH、SGHアソシエイト校の高校教師やSGHに協力している大学教員が多く、発表する生徒にとっては緊張しかなない雰囲気もある中で、どの生徒も自身の研究に対する自信と学校代表と

してのプライドを持って堂々と発表していた。

しかし、どのグループも、発表資料の準備は大変だったようだ。京都府の高校から参加した生徒は、「本校の課題研究は、3人で1つの論文にまとめる形式でした。ポスター発表用に長い論文から内容を精選するのは苦労しましたが、学校代表として参加する以上、レベルの高い発表を見せたいという思いで臨みました。全国から来た方々の前で研究成果を発表する機会はめったにありません。大学生や社会人になった時にも生かせる貴重な体験になりました」と語った。

また、別のグループでは、校内でプレゼンテーションソフトを利用して5分間で発表した資料を、今回の発表時間である10分間の内容に膨らませてポスターを作ったという。

海外への発信を意識した国際性豊かな口頭発表

プレゼンテーションは4つの教室を会場として行われた。プレゼンテーションを聞きに来ていた関西学

ポスター発表に参加

兵庫県立伊丹^{いたた}高校1年生
堀越みのり ほりこし・みのり

目指すは自分の研究の実現

本校では「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」を課題研究のキーコンセプトに掲げています。私は、新しいスタイルの「ふりかけ」を日本の米と一緒に輸出し、欧米で新たな需要を掘り起こすスキームについて研究・発表しました。ポスター発表では、他校のレベルが高かったこともあり、緊張しましたが、多くの方がうなずきながら聞いてくださったので、落ち着いて楽しみながら発表できました。

研究と、普段の学習や部活動との両立は大変ですが、東京でフィールドワークを行い、総合商社の社員や留学生に話を聞くなど、普段の高校生活では経験できないことに取り組みめるところが魅力です。2年生では、ふりかけの具現化に向けて、研究をさらに進めていきたいと思えます。

*プロフィールは2016年3月時点のものです



写真3 プレゼンテーションでは、大学教員らが発表内容に関して講評。生徒は真剣な面持ちでその言葉を聞いていた。

院大学経済学部の学生は、「高校生はどの程度、社会に関心を持っているのかを知りたくて参加しました。また、私自身は、高校時代に課題研究をした経験がありません。大学入学後に、高校時代に課題研究に取り組んできた学生と比べて、研究の着眼点や発表のスキルなどの面で後れを取っていると感じる場面が少なくありません。今日の発表では、研究テーマと検証内容が首尾一貫したものになっていくかという点に注目したいと思っています」と、期待を語った。プレゼンテーションに参加したの

は22校で、うち6校は英語で発表を行った。各校20分間、プレゼンテーションソフトを用いながら発表した後、大学教員や大学院生との質疑応答・講評が5分間行われた。

各校の課題研究の内容は、「中国の大気汚染」「発展途上国のICT教育」「インドネシアの交通インフラ」などの国際的なテーマから、「日本農業の発展」「震災復興」「国内の感染症問題」といった、国内や地域に関するテーマまで多岐にわたった。なお、国内や地域に関する課題研究でも、日本と海外とのつながりを意識した内容であり、どの学校も、将来、グローバルリーダーとして活躍したいという思いを感じさせる発表となっていた。

また、発表スタイルは、グループ内で役割分担をして発表する学校、1人の生徒がマイクを片手に熱弁をふるう学校など、様々であったが、いずれの学校も、独自の課題意識に対して、研究の過程で得た豊富なデータで検証を行うなどオリジナリティーあふれるものであった。

発表後の講評では、「分析力が素晴らしく、分かりやすいプレゼンテーションでした」「大学での研究にも生



写真4 会場では留学生と高校生のワークショップも実施。カナダ・インドネシア・ウガンダからの留学生が日本での経験を英語で発表した後、留学生を囲んで懇談会が行われた。

きるでしょう」との賛辞もあった一方、「この研究成果をグローバルリーダーとしてどのように活用していくのか」「科学技術の面を深掘りしてほしかった」といった質問や要望も寄せられた(写真3)。

高校生にとっては、研究成果を披露するとともに、自身の探究能力を高める上で多くのヒントを得た1日となったはずだ。

関西学院大学によると、本発表会の好評を受け、16年度は全国規模に拡大し、「SGH甲子園(仮称)」として実施する予定だという。

口頭発表に参加

大阪府・私立清風南海高校
グローバルコース1年生7人

仮想投資で社会の動きをウォッチ

本校の課題研究の共通テーマは「エネルギー」で、私たちは、そこに「生きていくためのエネルギー」=娯

楽」という観点を加え、航空機産業を研究テーマに掲げました。研究では、バーチャルトレードを利用して航空機産業関連の銘柄のポートフォリオを作成し、株価の動きを見て、社会の変化と企業活動や人々の生活とのつながりについて考察しました。

今回の発表は、準備期間が1週間ほどしかなく、直前まで発表スライドを修正して臨みました。本番では緊張し過ぎて、練習通りに発表できなかった部分もありましたが、会場の人たちが私たちのユーモアに反応し、熱心に聞いてくれたのがうれしかったです。2年生では、シナリオプランニングという手法を用いて研究を深めていきたいと思えます。



SGGH研究開発委員会
志方洋介
しかた・ようすけ

課題研究でイスラームへの理解を深める

本校では、イスラーム文化、特に日本と関係の深いトルコやインドネシアなどのイスラーム国家を、共通の研究テーマに設定しています。今回は、その研究成果を携えて、ポスター発表1人、口頭発表1グループで発表会に臨みました。

課題研究の指導で難しかったのは、テーマがイスラーム文化という生徒になじみの薄いものだったため、導入部分で興味・関心を引き出しづらかったところです。しかし、各グループの研究テーマが決まると、生徒は自分たちで資料を探したり、文献を読んだり、主体的に取り組むようになり、研究はどんどん深まっていきました。また、そうした生徒の変化を見ることで、私自身のやりがいにもつながっていきました。2016（平成28）年度は、研究開発委員会の副委員長を務めます。この1年間の経験を生かして、さらに充実した取り組みにしていきたいと思っています。

文理学科2年生
平田爽
ひらた・さやか

自分で情報の真偽を見極める大切さ

課題研究では、地域創生の観点から再生可能エネルギーの利用について調べました。比較対象として日本とインドネシアの事例を研究し、最適なモデルについてシミュレーションを行いました。そして、現地に赴いて、小水力発電には再生可能エネルギーとしての可能性が十分あることを明らかにしました。

研究前は、ニュースなどの影響でイスラーム国家に対してネガティブなイメージがありました。インドネシアを訪れて、それが誤解だと分かりました。与えられた情報をうのみにせず、本当に正しいかどうかを、自分の目で見極めなければいけないと実感しました。課題研究は7人のグループで行いましたが、今回の発表会は、私1人で発表を行うことになりました。本番前はとても緊張しましたが、聴衆の方々が熱心に耳を傾けてくださり、たくさん質問もいただけて、楽しみながら発表することができました。



千葉県立佐倉高校教頭
越川淳
こしかわ・あつし
（2016年4月に千葉県立千城台高校に異動）

地域に根差した独自の着眼点に関心

本校は、2015年度にSGGHアソシエイト校の指定を受け、グローバルリーダーの育成に着手してきました。13年度からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に取り組んできたため、課題研究の手法やプレゼンテーション、ポスターセッションのノウハウは、本校にも蓄積があります。ただ、SSHには海外への発信という目標があるため、テーマ設定では世界に目を向けつつも地域や日本に密着した課題を掘り起こすなど、SSHとは違った視点が必要になると考えています。

本校の先生方がSGGHの取り組みを負担に感じないよう、多様な切り口や視点を学ぼうと思いい、今回、見学にきました。実際、様々な学校の発表を聞いて、その着眼点の素晴らしさに驚かされています。地域の強みを生かしたり、日本の課題を浮き彫りにしたりした上で、課題意識を具体的な提案につなげているところは、大いに参考になりました。



島根県立出雲高校
飯野卓
いいの・すぐる

学校間交流のノウハウを学びたい

本校は、SGH・SSHの指定校であり、全校で課題研究に取り組んでいます。自然科学や医療、政治・経済など、分野ごとにグループに分かれて課題研究を進めています。まだまだ発展途上の段階で、指導改善のヒントを得たいという思いから、今日は本校の教師3人と参加しました。

本校の生徒の課題研究の内容を見ると、独自の仮説を立てたり、データに基づいて実証したりという面で不十分などがあります。今回の発表会では、プレゼンテーションの仕方も含めて、テーマ設定の視点や研究方法について学び、生徒の指導に還元したいと考えています。

また、課題研究をより充実させるためにも、本校が所在する地域に、学校や県を超えて課題研究のノウハウを共有する場をつくりたいと考えています。そのため、今日は発表の場や情報共有の場をつくるためのヒントも学んで帰りたいと思っています。

*プロフィールは2016年3月時点のものです

**アクティブ・ラーニングに加え、
従来型の指導の重要性を再認識**

4月号の特集では、家庭学習時間の増加、教科に対する意識の改善など、児童・生徒の全国的な動向がつかめ、大変参考になった。アクティブ・ラーニングに加え、従来型の授業形態の支持が高いことも分かり、いわゆる流行に乗るだけでは不十分であることを再認識した。座談会も興味深く読んだ。「自学ノート」は、担任をしていた頃、中学校1年生から高校3年生までどの学年でも続けてきたことを思い出し、大変共感した。また、「できるだけ教えない」指導は、学生時代にアルバイト先の塾長から言われた言葉でもあり、30年経った今も心がけていることだ。

〔愛知県・匿名希望〕

「本物」に触れる経験が印象的

世は新しいものが好きな時代で、ネットや近未来関係の事項がよく取り上げられる中、4月号の「ハートをこがせ!」は、古典の世界へとタイムスリップしたようで新鮮に感じた。印象に残ったのは、ネットや教科書ではなく、本物に触れようということ、生徒が諦めずに俳句作りを続けた結果、短期間で成果を残せたということ。この成果はすごい。

〔静岡県・私立沼津中央高校・後藤松太郎〕

生徒の沈黙を大切に、授業に取り組み

4月号の「実践 アクティブ・ラーニング」は、同じ数学科担当として興味深く読んだ。沈黙の重要性はまさにそうで、静かだと教師

Reader's VIEW

Volume **2**

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

は話したくなる。しかし、沈黙ということは、生徒は考えていたり、計算していたり、誰もが集中している時で、生徒は我々の話すことなど全くと言ってよいほど聞こえていない。群馬県立伊勢崎工業高校の荻戸貴利先生は、その時間を有効に活用して授業をされていた。これからの指導のヒントとなった。

〔東京都・私立東京農業大学第一高校・小堀健二〕

教育の場の理想形として参考にしたい

4月号の「指導変革の軌跡」の福岡県立八幡高校は、文理の枠を超えろという、恐らく最終的に教育の場で求められる形を意識して取り組まれている点に、深く感動した。教育の場の理想形として大いに参考にしたい。

〔大阪府・私立城南学園中学校・高校・北川真〕

**高校生と大学がつながる場合は、
高大接続の点でも重要**

4月号の「大学Evolution」を読み、大学での初年次教育がどんな形で行われているかよく分かった。課題を自分たちで見つけ、チームでつくり上げていくという手法も参考になった。大学が高校生を対象にしたプロジェクトを行っていることは、高大接続の観点からもとてもよいと思う。

〔静岡県・沼津市立沼津高校・谷野公彦〕

教師川柳

若人の熱気で晴らす梅雨の空

兵庫県・とんちんかん

**『VIEW21』高校版は
ウェブサイトでも
ご覧いただけます!**

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「改良! 指導ツール ピフォーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎4月から『VIEW21』高校版編集部のメンバーとなりました、今枝と申します。今号の表紙でご紹介した栃木県立茂木高校の取材では、「阿久津先生に出会えてよかった。恩師です」という生徒の言葉に感動しました。阿久津先生と生徒の間に強い信頼関係がなければ、この言葉は出てこなかったと思います。こうした感動を読者である先生方にお届けできるように、日々取り組んで参ります。どうぞ、よろしく願いたします。(今枝)

VIEW21 6月号 Vol.2

2016年6月13日発行

発行人 山崎昌樹
 編集人 春名啓紀
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
 印刷製本 (株)協同プレス
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦、渡辺敦司
 撮影協力 荒川 潤、川上一生、田中秀和、谷口 哲、南 弘幸、ヤマグチイッキ

VIEW21編集部
 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2016

VIEW21

2016
August
8月
Volume 3

次号は
8月22日発行(予定)
『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY

教師と生徒の肖像

未来へとつなぐ

表紙の学校 もてぎ 栃木県立茂木高校 いさお 阿久津 功先生

進路指導室を訪れる生徒に、進路指導主事の阿久津功先生は「何を学びたいの?」「志望校は?」と気さくに声をかける。そして、何度か顔を合わせるうちに、「学力が伸びない」「経済的に厳しい」と生徒が悩みを語り始めたら、その解決へと動く。「自らここに来るわけですから、生徒は悩んだり、迷ったりしているはずですよ。その状況をさりげなく探り、解決につながるような情報を担任や教科担当の教師に伝える。生徒と教師をつなげるのが、私の役目です」と、先生は言う。

そんな先生も、赴任当初、進学型総合学科のこの学校で、商業科教師の自分に何ができるのかと模索していた。校外の研修に積極的に足を運び、社会や教育の動向、大学入試の変化、他校の指導状況などを知る中で、商業高校で培ってきたキャリア教育や多様な入試についての指導が、今の生徒にも必要であることが見えてきた。先生は、自分の知っていることだけで進路を選ぼうとする生徒に、自分の強みを生かせば、選べる道は多様にあることを気づかせる。「先生と話す中で、当初の志望大学とは別の大学に進む選択肢もあるのだと分かりました。今はまだ学力的には厳しいけれども、できるところまで頑張りたい」と、生徒は力強く語る。

2016年度、同校は探究学習を始めた。「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」と、各教科が連携したカリキュラムを構築し、生徒に生きる力と独自の強みを育むことが目的だ。「生徒の中にある宝を見つけるためには、まず教師自身が力をつけなければ」と、阿久津先生は職員会議や校務委員会で、学校を取り巻く環境や取り組みの意図などの情報を発信し、教師間の連携を強めている。生徒の未来へとつなげるために、教師たちも新たな一歩を踏み出す。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume2 2016年6月号

2016年6月13日発行 / 通巻第358号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
© Benesse Corporation 2016

お客様
サービスセンター

[フリーダイヤル] 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17